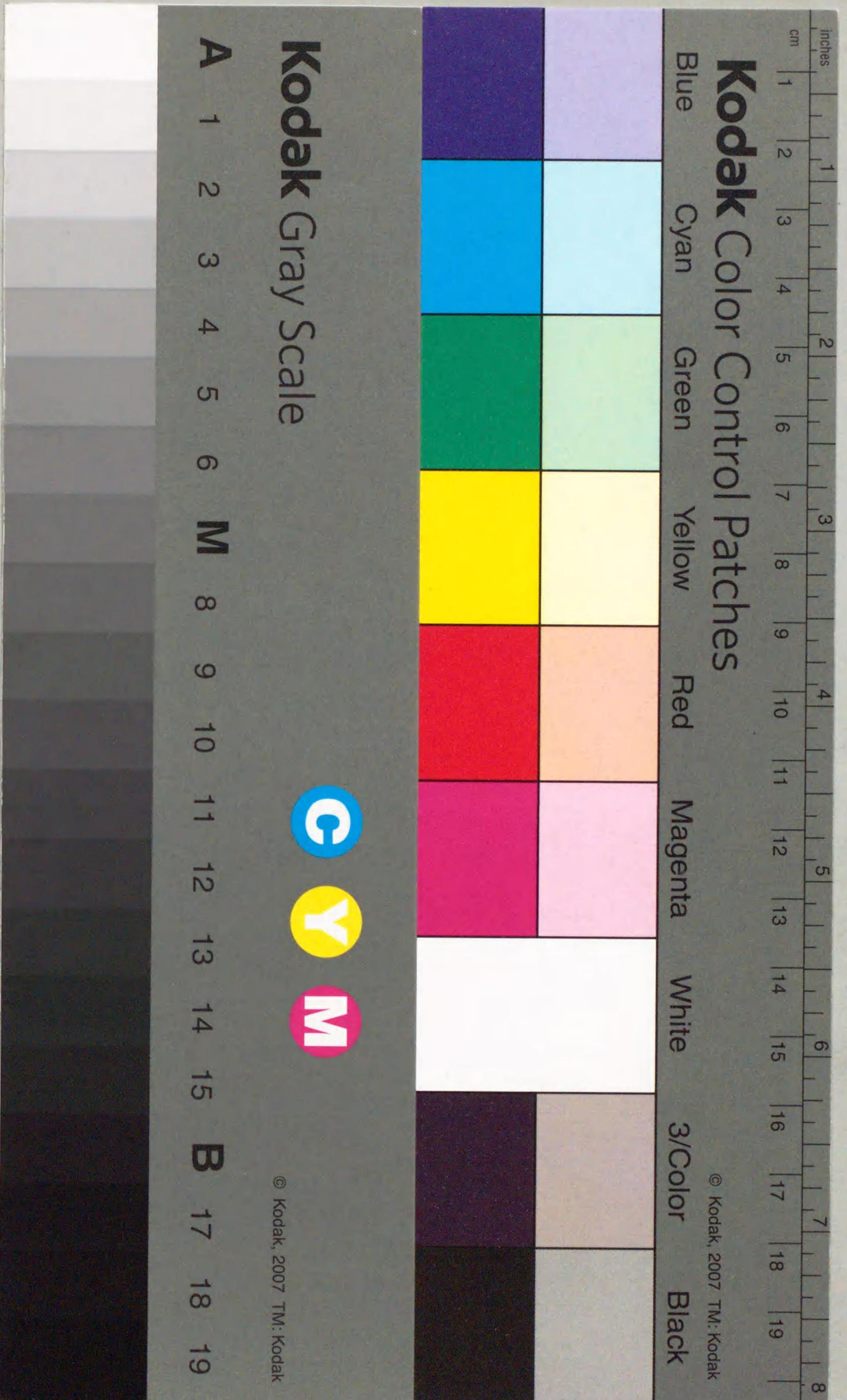


912.2
E74
K



00213616



Kodak Color Control Patches

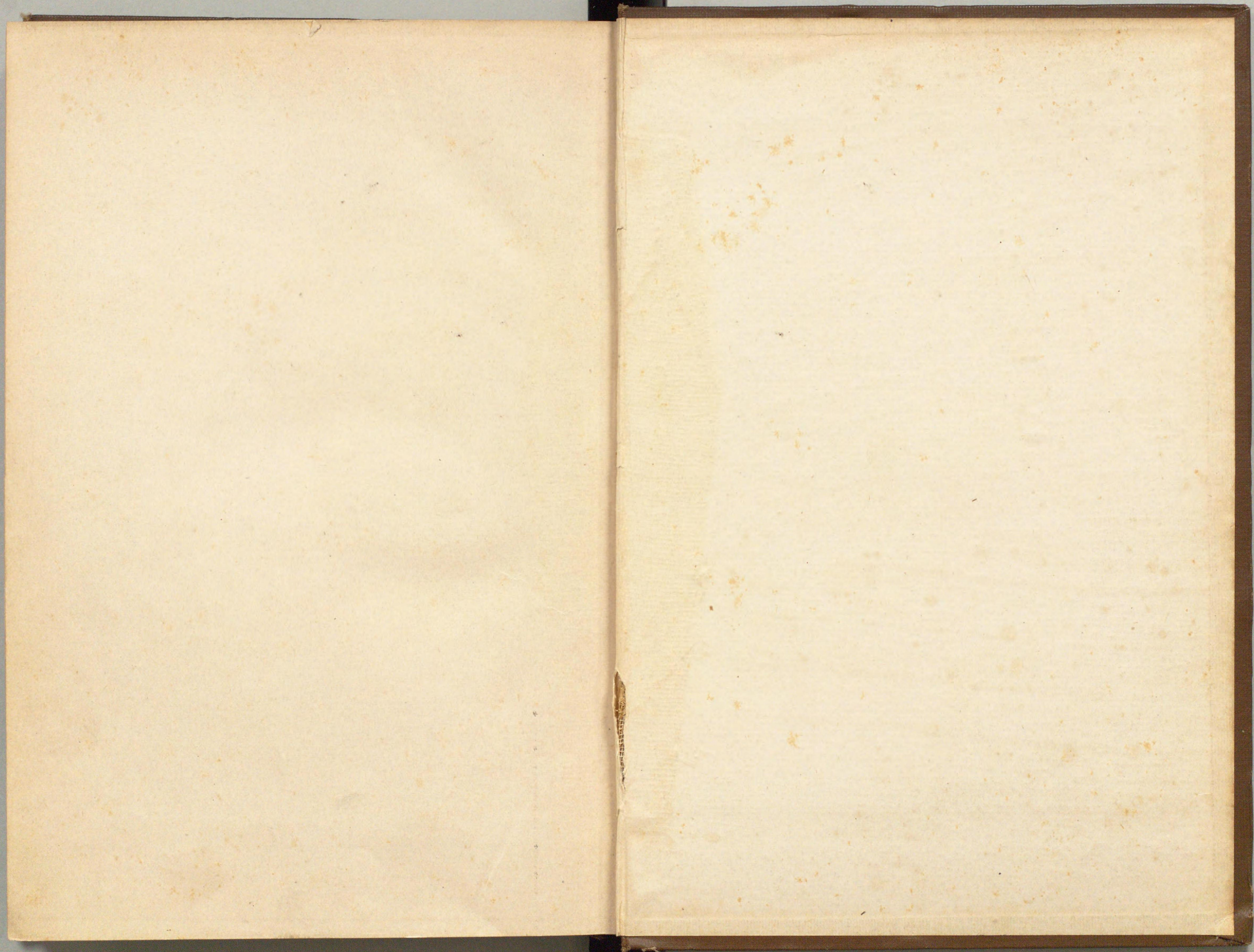
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



宴曲十七帖
謠曲末百番

全

宴曲十七帖
謠曲末百番

全

應永本宴曲抄影寫

熊野春詣
 八相成道乃云乃の都真乃春
 名廣くし和光因老乃月の身
 はやまの孝祭やたよりんま
 や景行の賢法代の事かまふ南心



213616

水篋曲

或子白拍子

あ乃長く延て松月拍子公
宮六羽

西天竺の白踏池志止
仙

伴由すみわあは明池
不宮

七十一番職人盡歌合土佐光信原繪

あはらうしん



あはらうしん
あはらうしん

宴曲十七帖附謠曲末百番目次

宴曲十七帖

應永本宴曲抄影寫

永正本綾小路家五節間郢曲縮寫

七十一番職人盡歌合所載早歌うたひ

校訂訓註例

宴曲概考

第一帖 撰要目錄卷

第二帖 宴曲集卷第一

第三帖 同 卷第二

第四帖 同 卷第三

第五帖 同 卷第四

第六帖 同 卷第五

第七帖 宴曲抄上

第八帖 同 中

第九帖 同 下

目次

校訂訓註例	一一三六
宴曲概考	一一一八
第一帖 撰要目錄卷	一
第二帖 宴曲集卷第一	二〇
第三帖 同 卷第二	三一
第四帖 同 卷第三	三七
第五帖 同 卷第四	四八
第六帖 同 卷第五	六四
第七帖 宴曲抄上	八一
第八帖 同 中	一〇〇
第九帖 同 下	一一七

謠曲末百番

第十帖 真曲抄	一三三	
第十一帖 究百集	一四九	
第十二帖 拾葉集上	一七〇	
第十三帖 同 下	一八七	
第十四帖 拾葉抄	二〇四	
第十五帖 別紙追加曲	二二六	
第十六帖 玉林苑上	二四五	
第十七帖 同 下	二六一	
附 錄 法隆寺緣起白拍子	二七八	
謠曲末百番	二九三	
八幡弓	遠矢	厚婦
大河下	伊呂波	太平樂
義興	式子內親王	現在善知鳥
月乙女	上宮太子	蘆屋辨慶
戀草	餓鬼	出雲龍神
神渡	髻判官	翁草
華自然居士	江島童子	堯舜



藤浪	人穴	筐敦	鈴落	祇園	鳴渡	五節	江豚	多手利	三社託宣	現在檜垣	百足	堪海	泣鬼	一言主	墨染櫻	鶉乃丸	淨藏貴所
竈	劍	躑	六角	範頼	現在殺生石	鈿女	野中清水	瀧籠文學	玉江の橋	月見	岩根山	紅葉	治國	成經	武藏塚	八劍	春日野の露
馬	珠	躑	水尾山	野寺	姫切	小夜衣	農龍	三瓦	時有	大黒	完戸	佛櫻	休天神	清水小町	御菩薩	辛崎	嵯峨女郎花
慈覺大師	秩夫	孟宗															

宴曲十七帖校訂訓註例

一、宴曲は、朗詠及び今様の流を引いて、生れ出でたる鎌倉時代文學獨得の謠物にして、謠曲の前驅をなせるもの、その題材の廣汎なる、その修辭の多様なる、正に我歌謠史上閑却すべからざる資料たり。

一、宴曲は續群書類從遊戯部に輯集せるもの十六帖、宴曲集五卷、宴曲抄三卷、眞曲抄一卷、究百集一卷、拾菓集二卷、拾菓抄一卷、別紙追加曲一卷、玉林苑二卷、首に撰要目錄を附す。合せて十七帖なり。

一、續類從本は善本にあらず。錯簡あり、誤脱ありて、到底その儘には用をなさざる也。然れども今他に之れに勝るべき首尾整頓せる完本を得ず。故に其東京帝國大學所藏の修史局本と圖書館本を以て底本とし、之れに左の諸書を對校す。

一 京都本

京都府立圖書館所藏

原本は半紙半載の小本にして二十冊あり、一冊に五番宛を收めたり。

目次終

龍宮猩々	隱里	禿物狂	濱土産	錦織	喜慶	變化信之	和國	九十賀
業平	朱雀門	衣潛包	輪管	飯野	山住	將門	語酒吞童子	大磯
歌藥師	根芹	戀塚	天橋立	赤澤曾我	西岸居士	國玉		

宴曲抄上一卷のみ。譜博士及び傍訓を附す。應永二年十二月十三日の識語あり。

一 内閣本

内閣文庫所藏

宴曲拔萃と題す。秋「年中行事」心「君臣父子道」瀧山等覺譽「遊仙歌」文字譽「諏方効驗」の八曲を收む。譜博士及び傍訓を附す。永享八年卯月五日の識語あり。

一 榎邨本

小杉氏徵古雜抄

淺草文庫本を閲覽の時の撰要目録の手寫本なり。

一 阿波本

徳島縣立徳島中學校所藏

元阿波文庫所藏たり。宴曲抄以下十一卷あり。憾むらくは目録及び宴曲集五卷の散佚せしことや。拾葉集二卷を除きては、何れも譜博士を附す。傍訓は之を附したるあり。附せざるありて、各卷一樣ならず。玉林苑上は「紅葉興」永福寺下を收むるのみにて完本に非ず。文龜二年九月五日の識語あり。

一 前田本

前田侯爵家所藏

宴曲抄と題す。實はその下一卷のみ。譜博士及び傍訓を附す。連歌師廣懂の筆と傳へらるれど、識語無し。故に書寫の年代未詳。

一、十七帖の校訂に當りては、本文は類従本に據りて之を建て、其の錯簡の訂し、誤脱の補正すべきは、一々之れを欄頭に書す。

一、漢字及び假名の誤れるものは、右方に括弧を施して注す。又本文の假名なるは漢字を旁書して意義を示す。傍訓の阿波本其他に據れるものは左方に之れを附し、校訂者の施せるものは右方に之れを附す。

一、古き傍訓は、假名遣頗る亂れたり。謠物としては表音的にすべきを主としたるにてもあるべし。そは態とその儘にし、括弧内に正しきを示す。

一、句頭に「あの」「この」の類を小字にせるは、拍子の詞なり。又「亂れぬべきものをな」「時雨初むらんや」「遠く唐のや」文の道を忍つゝの如き感動詞の用法あり。その他耳慣れざる語法尠からざるべし。

一、原本の漢字には假借、異字尠からず。假借の特に甚しきものは之

れを頭書す。異字は其の儘に用ゐるを要せざるを以て、總て正字に従ふ。假名は變體を充てずして、多くは普通用のものに書換へたり。異字の數例を左に示す。

樽(穂) 卷(迷) 狀(厭) 樞(樞) 權(櫻) 莠(蔓) 鸞(燕) 灵(靈) 尋(碍)

一、句讀は主として謠物としての調律によりて之れを加へ、語法上の關係には從はず。

一、本書校訂に際し、松井簡治氏は屢、有益なる助言を與へられたり。謹んで感謝す。

大正元年九月

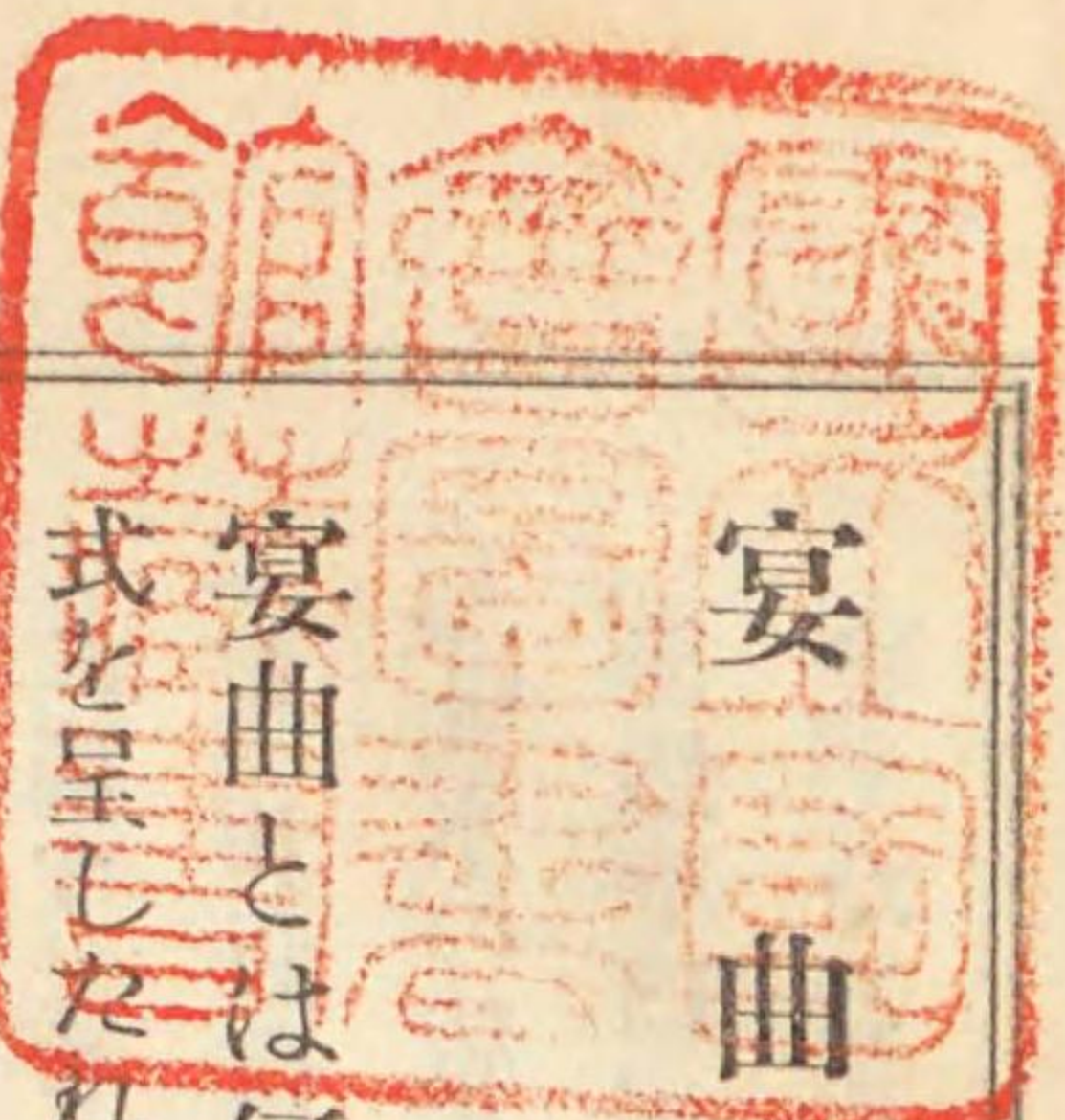
校訂者

吉田東伍
野村八良 識

宴曲

概考

吉田東伍 野村八良 共稿



宴曲とは何ぞ

宴曲とは、我邦中古雜藝の一にして、又郢曲と云はる。もと郢曲・今様の發達して此形式を呈したればなり。而して、明空を推して當道の元祖と爲し、之を従前の綾小路家傳の郢曲の外に別てば、名稱に於いては往々混同せらるゝも、實質に於いて明かに一種相異なる所あるを見る。殊に、九部十七帖の遺存して、鎌倉時代の光彩を現前に傳ふるあり、其異同は對較して詳に之を知るべし。

歌舞品目曰、雜藝とは、歌曲の統名にて、拾芥抄には、風俗の目錄の次に、雜藝の目錄をあげて、東遊・朗詠・今様・古柳・田歌・婆羅林・早歌・片下・物様までをのせたり、歌謠の雜體を統稱すること、知るべし。又、すべて、古くは散樂百戲のことをも、雜藝と稱せしことあり。されば、この名目は、歌曲の統名にて、後世の轉用の名目なるべし。

歌舞品目又曰、郢曲とは、朗詠の一名なり、然るに又、外の歌謠をも通じて呼びしこと見えたり、郢曲抄一卷あり、梁塵秘抄口傳集と一口氣の文なり。(文選、鮑明遠が玩月の詩に「蜀琴抽白雲、郢曲發陽春」。李善が注に「客歌郢中、故曰郢曲也」と見えたり、「客歌郢中」とは、宋玉が賦に出て郢とは地名なり)。郢曲選要は、正安三年、沙彌明空撰のよしにて、宴曲集等八部を類聚せしものなり。宴曲とは、郢曲の一名のやうなれど、朗詠の類にわらず、一種の歌謠にして、今の猿樂の濫觴ならん歟。其義は、宴遊に供する歌曲の義なるべし。其辭は、明空の選要せる宴曲集・宴曲抄・拾葉集・玉林苑など、今に傳はれり。猿曲と書するは、宴曲の假借なるべし、綾小路俊量卿記に「水の猿曲、或號水白拍子」とあり。

さて名目につきては、明空も其書に郢曲・宴曲を交用して、定むる所なく、其選要目録の前序文に「夫、當道の郢曲は、幼童の口にすさみ、萬人の耳にさへぎるたぐひ、さまざまおほしといへども、愚老が撰あつむる曲、すべて其軸十まきをさだめ、其歌百のかずをきはむ、このうち二十餘首、愚作の外なり」云々とある如し。されど、帖名に宴曲集五帖、宴曲抄三帖などあれば、今は宴曲十七帖と名を定めたり。

宴曲の名義

又、宴曲の名義は、宴遊に供へられければ、との舊説なり。吾妻鏡に「壽永三年十一月、鶴岡八幡宮、有神樂、以後、入御別當坊。別當、自京都招請兒童、號總持王、是郢曲達者也。以之爲媒介、所勸申盃酒也、又畠山次郎歌今様」などあるに合せ考ふべし。郢曲・今様の、勸盃の席に多く用ゐられしより、宴曲の別名も起れりとして、穩便ならむ歟。尺素往來に「酒讌詠曲、月卿雲客、或今様・或朗詠、被藝能之間、五節之面影現前」とあるも、其傍證たるべし。而も、明空以前に、宴曲の名目を使用したる明徴無く、僅に、綾小路俊量卿の五節間郢曲に、謂はゆる水猿曲ありて、水宴曲の訛かと疑はるゝのみ。(水宴曲は、殿上淵醉の時の、七・八番も歌はるる中に、其第六・七番にあたり、「いざや立なむ」といふ終の祝言の前にあたれば、之を淵醉の諸曲中の急とも、大切とも、真打ともいふべきものなり)

尺素往來は、一條兼良公の選にて、五節間郢曲と共に、南北朝以後のものなれば、明空の十七帖よりも後出に屬す。されど、綾小路家の相傳の次第を考ふるに、今の傳書は、俊量卿、永正十一年のものなるにもせよ、其曲目章譜の大體の定まりしは、鎌倉時代以前にして、彼の梁塵秘抄、郢曲抄に後るゝ者に非ず。されば「水の猿曲」を以て、宴曲の一體の、初見と爲して可なり、平安朝の季世に成りしならむ。

徒然草曰、梁塵秘抄の、郢曲のことばこそ、又あはれなる事はおほかめれ。むかしの人は、たゞいかに云ひ棄てたること草も、皆いみじく聞こゆるにや。

近世まで相傳せる郢曲の本家、綾小路のことは、古事類苑の樂舞部に參考すべし。

「綾小路は、刑部卿源政長朝臣、堀川院の郢曲の御師範に被參候以來、代々相傳の家業と被致候。其後、子孫、庭田・綾小路と兩家に相分れ、當時、庭田家の方、本家に相立、郢曲の事、兩家共に被相勤候事に候得共、家業と被致候は、綾小路に限り候事にて、庭田家にては綾小路家よりも傳統を被受候由に候。持明院(藤原)家も、古來より是を家業と被致候。綾小路・持明院、兩家の内にて、一家づゝ曲所と申すものに被相成、郢曲の事、領掌有之例にて、當時は綾小路家曲所にて候由(中略)。近代之例、四辻家を樂所支配として、音樂之事、總體、彼家の御預に相成候」などいふにて、大略を知らむ。

水猿曲の白拍子

水猿曲は、其曲譜さへ後世に傳へて、今にも雅樂家に遺る。明空の宴曲が、數傳して絶え、頓に起り頓に亡びしものに比して、頗、感興を牽くものとす。其詞章の構造は、一讀して十七帖宴曲に近く、實に藍本源流の、此に在るを覺らるゝ者とす。

水のすぐれておぼゆるは、西天竺の白鷺池、しむしやう許由にすみわたる、昆明池の水の色、行末久しくすむとかや。賢人の釣を垂しは、嚴陵瀨の河の水、月影ながらもなるは、山田のかけ笥の水とかや。蓬の下葉おとづるは、三しま入江のこほりみづ、春立空の若水は、くむともくむとも、つきもせじ、つきもせじ。

而も、其曲譜は全く聲明道の法則に因り、謂はゆる「魚山蠱芥」の様式の外ならざること、一般の郢曲・今様と同一なり。則、水猿曲は今様の句數に比べて二三倍し、後の當道宴曲を啓くものなれど、其曲譜法は、一に舊式の白拍子に依りて、改むる所なし。

當道宴曲の興廢

郢曲・相承次第の説に考ふるも、綾小路家の傳授の定まれるは、資時後白河院に仕ふ以下には非ず。和歌・鞠・繪などの家學の定まれるにも併せ考ふべし。其郢曲の節博士、之を明空が文字の左傍より

右傍へ移し、折節を胡麻點に變へしは、謂はゆる一流の制記に出づ。且、詠物の題目を擴張し、四季、祝言、神祇、戀、旅、無常、釋教のあらゆる方面に推し及ぼせしは、發達の跡明白なりとす。其熊野參詣の長篇は、日本文學の一特色たる道行の大作にして、五篇より成れるは亦注目を要す。但しその構造を考ふるに、形式に變化少く、猿樂の謠曲に比するも面白からず。謂はゆる劇的構造の全く缺くる所ありて、單調に失すること甚し。されば之を近世の俗曲に對比するも、寧ろ、長唄の類にして、決して淨瑠璃には非ず。蓋、此宴曲があたかも田樂・猿樂の謠曲勃興に會ひて、之と競ふ能はず、戰國以後には亡びて跡なくなりしも、其故あるが如し。即謠曲の前驅たりしと雖、語りもの「舞」所作事の要素を缺きたるが爲に、衰亡の運命を免れざりし歟。

芳賀博士國文學歴史代選曰、平安朝の末に起れる今様歌は、和讃より起りて、尙短き歌なり。之よりは長くして歌はれたる歌に、宴曲といふものあり。續群書類從中に收めたる宴曲類に之を見るべし。長きは數段に分るゝものあり。四季の風光を敘する抒情的のものあり。歴史上の事實を敘べたる敘事詩的のものあり。多く伊勢物語・源氏物語等を材料とせるは、當時の歌學の影響を見るべく、有識故實を説くものゝ多きは、軍記物語已に然るのみならず、謠曲亦然り。しかも其内容の何等の統一なく、精神なく、單に語句を臚列せる形式を貴べるは、諷誦に資せしが爲に、むしろ内容を重んぜざりしにあるべし。即ち古語成句を、あらゆる排列し、網羅せること、當時の軍記物語にも多くあるが如く、單に多少の縁故を求めゆきて、其語を連續しゆくものにして、必しもその前後の意義貫通を主眼とせず。故に敘景の文に於ても、春秋の區別なく、朝暮の差別なし、在る儘に羅列し得るに従ひて連接す。妙はその補綴に在り、その連接にあり。全く連歌の趣味に同じく、時代の嗜好はこゝに存在するを見るべき也。要は前にもいへるが如く模古的也、術學的也。その歌誦の法は知るべからずと雖、古の朗詠の風を合せ、又恐くは佛家の聲明に得るところ多かり

しならん。

鎌倉文藝の一英華

然りと雖、國文學史の上に、一方なる朗詠、今様と、一方なる「平家」「曾我」と並び行はれ、はた田樂・猿樂の謠曲の將に起らむとする時代に當り、宴曲なる者の存在は、是れ重要な研究題目なり。やがて、鎌倉文藝の一英華たりとの品評は、必しも溢美に非ず。殊に宴曲の内容によりて窺ふべきは、内外文武の典故、儒佛道仙の教學、風俗事物の巨細、頗、見るべきもの多し。

宴曲の形式(其一、句格)

今聊、其の形式及び内容の如何を觀察して、文學上の價值を論せんとす。先、其の句格を見むに、例へば秋(宴曲集卷第一)といふ曲は、次の如き構造より成れり。

取し早苗の何の間に(七五) 稻葉の鳴子引替て(七五) 秋風吹ば七夕の(七五) 妻迎舟に契てや(八五) 時しも
こゑをほにあげて(七五) 雲井をわたる雁金(七四) 遠の山路や霧籠て(七五) 友迷せる旅人は(七五) 過さぬ
秋や怨からむ(七五) 露分わぶる篠の目(七四) 春は緑にみえし若草の(三七五) 花は野邊に(三三) 紅葉は峯
に(四三) 色どる露の玉ゆらも(七五) 日影を待えざりけるは(七五) 垣ほにつたふ朝がほ(七四) 古枝にさけ
る本荒の(七五) 小萩が花荳(六四) 女郎花花薄(五五) ほのかに招く夕間暮(七五) えぞ過やられざりける
(七四) 同じ雲井のなどやらん(七五) 七月八月九月になれば(六八) 久方の月の都に(五七) 光ぞさやけかり
ける(七四) 賤が假寢の稻筵(七五) 棹鹿の音に驚かされて(七七) おどろかすなんなる物をな(九四) 山田の
引板のねざめは(七四) この夜やさむからんつづりさせとなく蛩(七八五) いかがはすべき暮るる秋の(七
六) 名残をしたふ袂よりや(七六) 先は時雨初むらんやな(六六)

即、一度諷誦して、直に其の七五調を以て一貫せるを知るべし。而して、其の今様・和讃の餘流なる事をも首肯すべし。七の句の八となり、五の句の六となれるは、所謂字餘りとすべし。「花は野邊に紅葉は峯に」の如き

は、七七の連続と見てもよかるべし。「棹鹿の音に驚かされて」の如き七七の連続は、五節間部曲の「思之津」の如き例もあれば、謠物としては有り勝ちの事なり。爰に特に注目すべきは、七五の七四たるもの少からざる事なり。「雲井を渡る雁がね」露分わぶるしののめ」の如きは、必しも字足らずとして軽々に看過すべきに非ざるべし。義經記に見ゆる今様の、「わかれのことに悲しきは(七五)……夫妻の別なりけり(七四)」の如き、尙旁證とすべきもあり。依りて考ふるに、是も一種の句格と定むべきが如し。五節間部曲の物云舞に、
 椿のかけは八千とせ(七四)松花の色は十かへり(七四)
 御まへの池の鴨とり(七四)うは毛の霜の白さよ(七四)
 の如きあり。後に及びて謠曲となれば、次第と呼べる句に、多くの類例を認めらるべし。

今日思ひたつ旅衣(七五)歸洛をいつと定めん(七四)……船辨慶

げに治まれる四方の國(七五)關の戸ささで通はん(七四)……老松

八重の汐路を行舟の(七五)唐土はいづくなるらん(八四)……絃上

御代も榮ゆく男山(七五)名高き神に參らん(七四)……弓八幡

拾ふ妻木も焼物の(七五)句はぬ袖ぞ悲しき(七四)……通小町

此の句格は琴唄の如きに迄及べり。右の如く、七五の連続を以て調子を調へたるが中に、その句頭に五又は七の句の添加せらるる事も亦少からず。上の例にて、「夜や寒からん」の七の句が、「綴りさせとなく蛭」の七五の句の上に添へるが如し。他の例を擧ぐれば、熊野參詣の、「千早振天より下る神なれば」は五七五なり。善光寺修行の、「吹送由井の濱風音立て」、或は、道の「戀しやな戀しく」の言の葉は「など亦然り。之れも亦後の謠曲などに其の例ある事なり。

宴曲の形式 (其二、この、あの)

凡例にも一言せし如く、宴曲には、「この」「あの」の語が句頭に點出せられ、特に古寫本には小字として傳へ來れり。これ一見して、拍子の詞たるを知るべし。又、句尾の感動詞にも、上の例の如く「名殘を慕ふ袂よりやまづは時雨初むらんやな」などあり、此の感動詞は、これを除きても文意の疏通を闕くものに非ず、猶一種の拍子の詞とも見なば見られむ。中古の謠物を見ても、催馬樂に、

いでわが駒、はやくゆきこせ、まつち山、あはれまつち山、はれ。

櫻人、櫻人、そのふねちぢめ、しまつだを、とまちつくれる、見てかへりこんや、そよや、あすかへりこんや、そよや。

みまさかや、くめのさら山、さら〜に、なよや、さら〜に、なよや。

風俗に、

おほとりのはねに、やれな、しもせり、やれな、たれかさいふ、ちどりぞさいふ、かやくきぞさいふ、みとさきぞ、みやこよりきてさいふ。

わがかどのや、しだらこやなき、さはれ、え〜とうとう、しだらこやなき、しだるかいては、あ〜なよや、しだるこやなき。

など、拍子の詞あり。宴曲は所謂囃し物にも非ねば、囃し詞を混入せりとも思はれざれど、とにかく幾分の拍子の詞は加はれるなり。謠物に拍子の詞の加はれるは、現に耳にする所の民謠に於ても著し。磯節に曰く、
 三十五反の帆をまきあげて、サイシヨネあすは仙臺石の巻、明日はネ仙臺イソホ石の巻、テンヤ〜〜
 〜、イサ、カリン〜、スカレチャドン〜(日本民謡全集)

宴曲の句格につきては、大様右の如し。今其の段落は如何といふに、京都本、内閣本、阿波本等、苟くも節譜士

を傳ふるものは、皆唱詠上の段落と覺しき所には、或は左に、或は右に朱線を以て鉤を施せり。(上の例は内閣本に據る) 謠物として、全章一息に誦すべきものに非ず、音樂上に一の約束の存せしや明白なり。

宴曲の内容 次に、内容に移り、まづ題材の方面につきて概説を加へむに、和歌が四季を始め神祇、釋教、戀、無常、種々の題材を捉へて文學の範疇となし、勅撰、私撰、家々の集、皆同様の體裁を以て編制せられ、和漢朗詠集、亦春夏秋冬雜の部類を成せる所、歌集と相似たり。而も其の雜部は、松、竹、管絃、酒、山寺、閑居、眺望、饒別、行旅、述懷など、四季の題目以外に互り、多種多様にして頗興味あり。宴曲の諸集を通覽するに及んで、此の興味は一層擴大せらるるを覺ゆ。宴曲集は部立ありて、歌集の如き體を備へ、宴曲抄以下は雜然として多方面に互れり。道行の如きも、熊野參詣、善光寺修行など長編を成せるあり。釋教の如きも、法華、曹源、淨土あり。政教の如きも、理世道、夙夜忠、文武、明王德あり、道仙にも互りて道といひ、遊仙といふ題もあり。遊興の如きも、雙六あり、蹴鞠あり。十六と題して、數詞を材とせる珍しき曲もあり。その題材の廣汎なる、諸集を通覽する者、誰か送迎に違なきの感を起さざらむ。

特に其の鎌倉的特色の認むべき者あり。すべての文獻が、常に平安京を中心とするの間に、武門政治の光彩をも點綴するは、亦珍とするに足らむ。海道東海、霧旅奥州、善光寺修行が、鎌倉を出發、又は歸着とする者を初めとし、三島詣伊豆、巨山景建長寺、宇都宮叢祠野州、江島景鎌倉、諏訪勅驗信州、鹿島靈驗常陸、補陀落湖日光、鶴岡靈威八幡、永福寺二階、鹿山景圓覺寺、竹園山法泉寺の題目、皆東國の偉觀あらざるは莫し。而して寄山祝(宴曲抄下)の如きは、鎌倉幕府に對する祝賀の意義の、最も著明なるを見る。

代々經ても彌榮行。竹の園生の遊なる。鳳は翅つばさを刷。明王の徳を待出。幕府山の春の梢。枝を連て長閑なるや。天下靜謐のしるしならむ。千年の松の緑も。萬年の苔の色までも。鶴龜の名をあらはせば。此砌にや榮

へむ。龜谷山巨福山。嵐萬歳を呼ぶなり。

蓋、宴曲の文句の構造は、或人の言の如く、題によりて、故事成句を綴り合せ、絶えむとして又つゞき、首尾統一なく、所謂景事、物盡モノヅケの篇章甚多し。眞に長篇の詠物詩なり。總して詠物詩の一潮流は、流れて室町・江戸の文藝に及び、間接に、謠曲や淨瑠璃中の何々の段と稱する文句、或は長唄の景事、物盡が、發達すべき趨勢を助けたり。而も其源泉を湛へたるものは、實に宴曲なりといはざる可からず。此詠物の宴曲に二類あり。一は馬德、船、風、水の如き、單に其の題目のみに關する材料を列ねたるものにして、他は上下、松竹、内外の如き、類似、若くは相對の、二個の材料を取合せたるものなり。

宴曲と他の時代文學の比較

宴曲の構造に於て、何等かの趣意の認め得べきものありやといふに、例へば酒といふ曲に、養老の瀧の孝子の故事を以て結べるなど、往々教訓的なるものあり。或は曲によりて、宗教的なるあり、或は賀の歌にして、即、頌の體をなせるあり。殊に何々の徳と題するもの甚だ少からず、鷹德、馬德、五明德、日精德、屏風德などの如し。その有職故實を尊べる所、ひとり宴曲のみならず、近古文學共通の特徴なりとす。後の謠曲、狂言等に和歌の徳、鐘の威德などいふ事も見え、牛馬、膏藥煉、鞆鼓炮烙、醉薑などの狂言にも、各その奇特を競ふ所は、その精神の、已に鎌倉文藝たる宴曲に胚胎せりとも云ふべし。謠曲は、敘事詩が進歩して戲曲化せる者なり。かゝる意味を以てすれば、宴曲は全然沒交渉なり。宴曲には敘事的詞章概して乏く。たゞ雙六といふ曲に、丹治の比手勝の所に、般の目揚の現れ出でたる一段、并びに聖廟靈瑞譽に、菅公一代記を敘したるなどの類を、敘事詩的結構の存在と見むのみ。即、詩歌の性質としては、尙抒情詩の埒内に止れりといふべし。

宴曲と他の文學との關係を見るに、我が古文學に於ては和歌、朗詠はもとより、伊勢物語、源氏物語よりも、

最も直接影響を被り、源氏物語の故事は隨所に散見す。漢文學よりは文選を首とし、長恨歌の白氏文集より、遊仙詩の遊仙窟より材を取れる等、其關係の大なる者とす。漢文學の故事は鎌倉時代以前に於て、已に多く我が文學に上りたる所にして、鎌倉時代となりては、唐物語の如き、蒙求和歌(源光行)の如き翻譯文學あり。即、宴曲に多く漢土の故事の攝取せられたるは、寧、當然のみ。佛典の故事材料の多きも、亦時代の趨勢なり。宴曲の修辭に、その著しきを對句の技巧とす。山寺といふ曲の冒頭に、

千株の松の下には。青嵐窓冷まじく。晚鐘霜に響く聲。聞くに哀を催し。
雙峯の軒の間には。白雲隣を卜たり。曉月露に寒き色。見るに心を傷しむ。
金谷戀の初に、

金谷の春のあしたには。うつらふ花をさそふ嵐。春の情
南樓の秋の夜もすがら。傾く月をやしたふらん。秋の興
その品様々なれども……

などかゝる語句は、或は朗詠を加味しなどして、殆、應接に違なからんとす。是れ亦東關紀行、平家物語など、鎌倉文學共通の特質といふべし。殊に謠物たる宴曲としては、當然の事といふべきなり。其の他、古歌を點綴し、又は秀句を弄し、名所を讀み込めるなど、和歌の修辭の各方面を取りて、更に謠曲に於て見るが如き、多種多様の詞姿の基礎を置きたるものなり。

これを要するに、宴曲は時代の文學として、鎌倉文學史の一資料たる可きものにして、歌謠史上に於ては特に好個の研究の對象なりと云ふべし。

元祖明空及び作者 次に作者に就きて考ふるに、十中の六七は明空の自製なるが、他作亦少からず。拾葉抄・玉林苑の四帖に月江といふは、蓋、明空の省畫に因れる一名なれば、晩年には月江と稱したりと知ら

る。而も此人は當道の元祖として、應仁略記に明徴あれど、他に合考すべき材料は未だ之を得ず。明空以外の作者にして、多少考ふべきは左に註するが如し。

洞院前大相國家 洞院の二祖公守にして、正安元年太政大臣に任す。

花山院右幕下家 右大將家教ならむ、永仁五年に薨す。

冷泉羽林と入江羽林 同一人なるべく、即、京極爲兼歟、又は其一族中なり。

二條羽林 楊梅二條資氏ならむ、嘉元四年に薨す。

洞院左幕下家 左大將實泰ならむ、延慶三年之に任す。

生覺 綾小路經資、分脈に「嘉元二年出家生覺、依後深草院御事也」云々。

資時 左馬頭入道

一時賢 中納言 有資 鈴蟲中納言 經資 中納言

一流の秘譜講式 應仁略記は、大原魚山の聲明僧侶が、其郢律の好みを同くする畠山大夫入道持富(管

領持國入道徳本の舍弟)の最期を哀みて録せる者なるが、めづらしくも明空が秘譜製記の事まで併せ言ふ所あり。曰く「郢曲相傳に至つては、元祖明空以來七代の傳なり、明空と申せし人、熊野の權現の利生に依つて、郢曲の秘譜を製創せらる、しかるを鎌倉において、極樂寺良觀上人『一流の製記、律呂の韻曲を聞に、凡人の所修にあらず、一會の講讚に留まらば、恐らくは後世の聞を廣くせし、和漢の智用、神威佛徳、一々詞花、ことごとく是讚佛乘の因たるべきの趣』を、眞法の供養に擬ひ、五段の講式を心より草せらる、良觀律師製作の式是也、」云々。良觀は忍性菩薩と謚せられし大徳にて、明空が其贊助に因り、後世までの講式を卍定したりと云ふは、最事情を得る者の如し。之を秘譜といひ、製記といひ、熊野權現の擁護を説く、皆當時の風習にして、

要は古の鄴曲を變化して、新しき宴曲を作るをいふに外ならず。(一遍房知真も、明空同時代の人にして、其唱名は熊野權現の靈告に因るとぞ、即、遊行時宗の元祖なり。)

應永の坂阿盛阿

明空以來七代相傳して、應仁の畠山持富入道に至るといふ。年を以て之を數ふれば、二百六、七十年にもなりぬべし。此間に於ける宴曲の盛衰は、之を審にするの史冊に乏しと雖、應永中の事は確と之を證明すべし。惟ふに、此明空の一流の宴曲は、他の月卿雲客の鄴曲と相並びて行はれしも、固より公家には容れられず。他の武家士林の間に賞玩せられしが如し。而も之を呼びて専ら早歌サカといひ、其名稱に混亂の疑あり。山科教言卿記に「應永十五年三月、若君室町殿左馬頭宣下。二十四日、御乗船逍遙、又西馬場御經歷云々。入夜、早歌被聞召之、好士五人、右京大夫入道召具之參候。飯尾善左衛入道阿(原註坂子)不參、多田入道、田島清阿云々。

花亭祝言 花 不老不死

遊宴

法華

神祇

等歌也。以尺八時々音取之、後聞、多田、塚和入道參、口阿若不參歟。早歌の名は兔にも角にも、其六の歌曲は、悉皆明空が撰要中の物なり。飯尾善左衛門は坂子とも註せらるゝを見れば、坂阿にて、宴曲抄上京都本と玉林苑に「應永二年六月、沙彌坂口花押」とあるにあたり、稍疑を釋くべし。好士とはスキノヒトをいひ、クシと訓まれ、世阿彌觀世元清申樂談議に「飯尾の善右左の衛門とて、けんのくしにて早歌うたひにて有しが上手也、」とあるにも合せ考ふべし。(又、十七帖が飯尾彦六左衛門常房の家に傳へしを見れば、室町幕府の吏務を世々にせる三善飯尾氏が、兼て當道にも携はりしを知る)多田、塚和の二人の事は、之を詳にせざるも、田島清阿は正しくは盛阿彌なり。斯人は當道の傳統者にして、應永の昇平に會ひ、永享の初めに死せるが如し。

畠山持富入道

惟ふに、室町幕府の時、武家の好士に賞玩せらるゝ宴曲が、鎌倉の特色を帶ぶるは已

に偶然ならず。而も畠山山名の諸大名が亦之を好むあり、一流の相續も附托其所を得たり。盛阿は蓋明空より六傳の祖なるべし。其盛阿と並びて興阿あり、畠山持富は盛阿の弟子にて、やがて七傳とも云べきが如し。

按、應仁略記に、畠山持富禪門龍興寺大夫入道ともいはるの早歌堪能の事を敘し、盛阿に就きて廿年學べりと云ふ。曰

「此の人早年の比ほひ、早歌の鄴曲、其源を求むるに、都には盛阿彌・興阿彌と聞し、兩人其名を發し、後小松院北山御所行幸の剋召れたり。其後二人共に仙洞に昇殿して、一曲沙汰す。彼田島の盛阿彌が云く、在所へ通ふ事およそ廿年に及ぶと云々。故に、一流の奥儀異説、兩曲盡ざるはなし」以上次に、文安の頃にや、山名氏の人々が盛阿が十三年忌を弔へる事を敘し、「彼盛阿十三年菩提を弔はん爲、春日京極の亭にして鄴

律講興行有し。歌曲の列衆、亭主を始めとして十六人、堂上には四辻前大納言季保、園中將基有、綾小路中納言有俊。一會の師範として中御門豊筑後治秋今按、治は統の誤、體源抄の作者筑後統秋御師範同雅守、賴秋、并今橋耆年佐渡守郷

秋。兩流の樂人三十餘輩、絲竹絃管の調べ、歌曲の合奏、邂逅の嚴議、都の名仁歩を運び、門前市を成し、見聞耳目を驚かし、精等後昆に傳はる。時に戒師は元應寺の内攝取院、多年多日の知音たり、折くの法會席を重ぬと、云々(中略)。洛中において興行の事稀なり、二十个年先歟、以上次に、盛阿三十五年忌の法會を

敘して、今度とあれど、寛正年中の事ならむ。寛正八年をば、應仁元年とす其文に曰く。「山名の興行の後は沙汰を聞ず、今般の嚴儀まで、洛陽城において兩度なり。誠に珍重の法席、悦び多からしめ、意を懸る事を寛ふ旨、およそは前代未聞の會場、時に叶へる音律の感應、翰墨に盡しがたき事共なり。其後兩度これありき、一度は遊宴の講筵、一度は盛阿三十五の作善。朝の程は法花懺法講、堂上、堂下、樂所、大略は以前の人數也。懺法調聲の僧衆は、四條西洞院の音徳院衆、東山攝取院律扉十二人、盤涉平調律曲所作。次第別記の如し。夜に入て鄴律講、歌曲列衆十六人、先の如し。本法の如く、平調の音樂たり。此外、聖護院熊野の法樂、彼人生の内、西

土花の都の昔の春秋、電光懷舊と成れり。就中、近比一條攝政殿下新作の早歌を送らしむ、^上以一條攝政とは兼良にして、其新作の宴曲もありし由なり。連歌師宗砌も新作ありといひ、是の近比の興行は、畠山持富禪門の、春日の亭の催しなるべし。故に又曰ふ、「近代名を得たりし宗砌法師、四季戀といふ題にて早歌を作り、大和國より京極の亭へ送る、いづれも博士を付て當代に貽せり。次に敷島の古風に至つては、入道一生の翫び、花鳥風月色を集む、春日の三位(常闇)松月庵、常光院以下、知音に漏たる人これなし。和國の風詠、源流を盡し奥儀を窮む^上次に、持富禪門の實子にして、舍兄持國の養子たる次郎政長が、變亂の爲に都を落ち、河州嶽山城へ移り、持富も聲明道の本所たる大原魚山へ逃れて、閑居二年にして死することを録して曰ふ。「匠作禪門、閑居の今の本望には、年來の有増、兎に角に事逝ざりし大原衆、本所の聲明士に、且暮晝夜の參會、色々の梁塵の曲調、日を重ねて意を慰む。げにも南房良秀法師しきりに所望、新造の早歌(原注大原題也)博士を付て彼室に留む、永代の形見となれり。かゝる時代の變化せる、永日徒然の折々も、わすれざるは、世上の恨み、捨がたき、次郎が今の飽ぬ別れの悲みなり。或時、消息に紅葉を一枝裏みて、嶽山の城、次郎が方へ遣はす、一首の歌あり、

思ふ事大原山のもみぢ葉は折袖までも籠る枝かな

と書たり。知音を興せし洛中の名人、朝夕ともなふ寺僧達、知もしらぬも諸共に、見聞覺知、何事か涙を催さずと云者なし。終にして、翌年八月廿一日、彼草庵にして、年來信仰他に異なりき。法花讀誦、即往安樂の素懷をとげられ畢ぬ、^上此應仁略記は、恐らくは、當時大原本所の寺主たる南房良秀の作ならむ、然らずば其徒弟輩の編輯なるべし。

宴曲と音樂

此宴曲は、絲竹に合せて歌ひける趣は、教言卿記に「以尺八時々音取之^{ネトク}」といひ、應仁略記

には平調の音樂たりなどあるに明なり。又、座上即興には、章を斷ち句を絶ちても歌へる如し、「花」と云ふ篇中の句「花見の御幸云々」を歌へる記事ありて、此絶句は、閑吟集といふ尺八の小唄の中にも收めらる。看聞御記には、早歌をば鞆鼓八撥^{ヤツバチ}と四竹(コキリコ)にて囃したる由を載す。

應仁略記に、寛正の頃、畠山氏東西の兩亭(政長と義就)へ、義政台臨の事を敍し、「公方出仕、方々禮節、内外の計策、移れば替る世の習ひ、亦上無こそ見えたりける。雪月花の御翫び、恆例臨時、折々の御成。殊に翌年三月、兩亭押并べて御成。大夫入道東の亭、御氣色思程の時宜也。觀世・今春、當時代の御猿樂。昔を殘す、日吉猿樂、石童大夫が笛物狂ひ。乙松以來、代々名を得し蟹が狂言、御廉の際に召れつゝ、御酒器を下さる。思ひ出たりし事共も、只一睡の夢の昔、名のみ残りて跡ぞなき。中にも、御興宴と覺えしは、今次郎・彌々若と呼れし童形(十歳、十六歳)親の音曲さる事なれば、早歌は定めて歌ふらん、一曲と御所望有しに、「花見の御幸と聞えしは、保安第五の衣更着^{キサラギ}」を歌ひ出す。一座の興宴、公方御氣色、其頃の褒美、天下の沙汰、此事なりき、深更に至つて還御、云々。

看聞御記、永享八年正月廿七日。室町殿^{公方}義教^{後崇}へ參賀、三獻後御歌、予^{後崇}室町殿御詠許講、仍三反講了。其後、藤壽・石阿等、被召參。藤壽、遊物也、老者七十餘、故攝政^{二條}持基^{持基}鹿苑院殿被賞玩、連歌師也。風折烏帽子、水干、大口、八撥附腰。石阿、手鞠名人也。藤壽先施藝、吹尺八、歌一聲、次打八撥、猿樂觀世兩三人參、留鼓拍之。次コキリコ、詠小歌舞。次、白拍子舞。次平家、語神泉苑行幸鷺被召事。次早歌、八撥、コキリコ、度々被打、其藝皆以神也妙也、感歎無極。○按、看聞御記に見ゆる藤壽の遊藝にて、當代の風尙も察せらるゝが、其歌曲には一聲と、早歌の二つありて小歌には舞をも副へるは、やがて曲舞^{ケセ}といふものならむ、猿樂放下僧の四竹に想ひ合はすべし。一聲は、興福寺延年に絲繪^{イトヨリ}一聲、亂拍子一聲とあるに同き歟、今様歌の一種に似たり。

早歌(サウカ)うたひ 七十一番職人歌合に、「早歌うたひ連歌師に番はせ、男子の折烏帽子に水干着て扇持てるを繪像したるは、謂はゆる好士なるべし。詞に「かたみに残る撫子」とあるは、早歌の引句なるが、十七帖の中には見えず。又、月と戀の二題につきて、

もろともに月にうたはんげにやさば今はた誰もさぞおぼえたる。

判云、「げにや娑婆」の曲、其興はべり。但、げにやさらば嘸覺たる、誰いひおほせざるにや。別れ路に泣くかうたうか枯聲のしほりあけたる袖の名残りは。

判云、「袖の名残り」の美聲、近比の早歌の聽聞、耳をおどろかし侍る。

「げにや娑婆」といふものも十七帖に見當らず、「袖餘波」は宴曲集卷三に載するものなるべし、稍短篇に屬す。此七十一番歌合の出來しは、應仁・文明以後と思はるゝに、猶早歌の好士もありしにや。天正慶長當代記に、「三好長慶が兄弟衆、何も連歌好士、當世之器用也」といひ、其兄弟の一人たる義賢入道實休が、永祿三年に自害したる事を十河物語に載せ、「實休は、紹鷗が茶湯の弟子なり、紹鷗、其追善にとて影前に茶を備へ、石川や、せみの小川の清ければ、月も流を尋てぞ、すむも濁るも同じ江の、淺からぬ心もて、何疑の有べき。年の箭の、早くも過る光陰、惜みても返らぬは本の水、流はよもつきじ、絶せぬ手向なりける。

此小歌をうたひ、紹鷗泪にむせび立にけるとなん、云々。此小歌も、やがて早歌にて、コウタや、コウタヒにはあらざるべし、尙考ふべし。

七十一番歌合の早歌をば、歌舞品目にハヤウタと訓ひはわろし。延享年中の刊本にサウカとあるに従ふべし、倭訓栞にもしか云へり。さて、其サウカの名目由來につき考ふべき事あり。倭訓栞に「神樂歌に早歌と云ふものあり、夙に北山抄に見ゆ」と述べ、梁塵秘抄、五節間部曲にも早歌を傳ふるが、全く異なり。而

も、源氏物語・徒然草等にサウカと云ふは、唱歌にて、樂譜の唱詞をいふ、タンチリとか、トウトウタラリとかの類なり。然らば、宴曲のサウカ、サウカは、いづれが、眞の語源ならむ。むしろ唱歌に歸して、宴曲を唱歌するの義か、後の定めを待つ。(嬉遊笑覽に、浮世草子を引き、京師の近世には密賣女を惣嫁と稱ふる由來を擧げたり、是も恐らくは戰國時代に衰へし早歌の遊が、遊女に移りての名目なるべし。)

宴曲の唱歌亡ぶ

體源抄に、「早歌とて、部曲世に飢びし也。是は、雅樂の音聲をたゞして、五音七音

皆其源に本づく、殊勝のもの也。是もさる間、世に數奇者なくして、今は稀也」と。數奇者は前の好士にして、體源抄は應仁・文明亂後に成りし書なれば、是にて宴曲の衰へしを推斷せらるゝなり。近世に至りて、全く之を玩ぶ者を絶ちしにや、其書冊を傳ふるも、猿樂謠曲の番外ものと誤られし程なれば、研究する人も無かりしなり。又、古寫本にして往々錯誤の甚しき者あるを見れば、續類從本の各種、及阿波文庫本等、相傳演習の路を絶ちし後にも、僅に簡冊を模寫して、其書を傳へしも久しと知らる。

延年と猿樂、平語の墨譜

昔、南都・北嶺に行はれし延年歌舞の講式の中には、多種の雜藝を包含

し、近世の猿樂能の戲曲的要素は、實に延年講式に備はれり。其徵證は、法隆寺の古記録中に、最夙く認めらる。而も、其延年講式は、國書刊行會の近世文藝叢書に收められし、康正年中の興福寺延年唱歌と題する一帖に據るも、大概を悟らるべし。(近世の人、往々宋元の雜劇を以て、猿樂の能の起因を説明せむと試みる者多しと雖、恐らくは空想に過ぎじ)但し、刊本には延年の歌曲の墨譜を省略したれど、其舊譜を取りて之を宴曲に對せしむれば、全く同一の様式に依る者とす。即、明空が宴曲の秘譜を造りたる後に及び、延年の歌曲も(先の聲明に出でし部曲の墨譜を棄て、)新譜を採用したるなり。是の變化は、文字の左傍なる折線狀の譜を替へて、右傍の胡麻點に爲したる者にして、やがて梵唄・聲明と日本音曲の調和とも謂ふべき歟。(猿樂謠も、

全く此胡麻點に依りて之を創めたる如し、平家の舊譜は、未だ之を審にせざるも、近世の墨譜は、亦胡麻點に外ならず是等の事情は、猶研究の餘地多し。

法隆寺縁起白拍子 かくの如く、延年講式には戯曲の要素を胚胎しながら、而も他の歌曲に於いては、今様といひ、宴曲といひ、短きも長きもあり。其の今様の短き白拍子を男舞に舞ひかなでけるより、白拍子舞として世に喧しく賞玩せられ、白拍子は専ら舞曲の名に移れり。されど、白拍子は本來、樂家俗人にて素拍子を指せるのみ。故に、白拍子を、數ふとも、踏むともいふ。指折り、足踏みて、數を取ればならむ。(水の宴曲を水の白拍子といふ、其墨譜ものこれり)此に法隆寺縁起白拍子といふものありて、白拍子歌曲の長篇なり。宴曲よりも後れて出で、法隆寺にのみ用ゐられし者なれど、亦明空以外なる、一種の類似歌曲なり。今、参考に資けんが爲に、十七帖の末に附録す。

法隆寺縁起白拍子は、故小杉楳郎氏の徵古雜抄、大和國の部に收められ、白拍子記ともいふ。本寺の縁起七箇條を敷敘せる者にして、讚歎の詞章なるが、其靈德威光をのぶるに、史傳に因りて信仰を篤くせしむ、亦一種の妙文なり。作者は、本寺の五師僧なる重懷にして、貞治三年甲辰の書とす、明空に後る、こと五十年なり。本寺の古書、嘉元記の末續に、

康安二年壬寅三月六日、源春房五師、當寺事初を白拍子に造て、於中花蘭天滿講、談義之次にかずえ給ふ。仍、講衆各出酒在之、彼五師の結構也、二種肴毛立に、如法大酒になる。白拍子終て、卿々五師、開口在之。とある源春房は、蓋、重懷にして、翌々年八月に猶定稿したる者なるべし。楳郎氏説開口といふも、一種の雜藝なり、興福寺延年講式にも見ゆ。

撰要目録卷

序

夫當道の郢曲は、幼童のくちにすさみ。萬人の耳にさへぎるたぐひ。さまさまおほしといへども、愚老が撰あつむる曲。すべて其軸十まきをさため。其歌百のかずをきはむ。このうち二十餘首は愚作の外なり。すなはち其作者の名字をたどるくしするす。これ或は貴命により。あるひはうたゝ聞をよぶところ。耳にとゞまり。ゆへあるしなをさきとして。都鄙のもてあそび。ちまたの説をもきはされば。さだめてあやまりもあり。本説もおぼつかなく。うける事おほくして。後のそしりのがれかたかるべし。いはんやみづからもとめ。外をうかゞはされば。はかなき筆のまよひおろかにし

祝言 シツゲン

嘉辰令月 カシンレイゲツ

宇禮志喜哉 ウレンシキカナ

優曇花 ウドンゲ

花亭祝言 クワテイシツゲン

不老不死 フヲウフシ

神祇 ジンギ

宴曲集卷第三 戀部

吹風戀 フクカゼノコヒ 素月作 同調曲

遅々春戀 チ、タルハルノコヒ

戀路 コヒヂ

龍田河戀 タツタガハノコヒ 冷泉武衛作 明空調曲

袖志浦戀 ソデシノウラノコヒ 權少僧都頼慶作 同調曲

袖湊 ソデノミナト

袖餘波 ソデノナゴロ 或人作 明空成取捨調曲

源氏戀 ゲンジンノコヒ 或女房作 同調曲

名所戀 メイシヨノコヒ

宴曲集卷第四 雜部上 附無常

樂府 ガク

伊勢物語 イセモノガタリ

源氏 ゲンジン 或女房作 同調曲

海邊 カイヘン

海路 カイロ

海道上 カイダウノジヤウ

オナツクテツ
同中

オナツクテ
同下

キリヨ
羈旅

トマナナゴリ
留餘波

ユクナゴリ
行餘波

ムツヤツ
無常

宴曲集卷第五雜部下
附釋教

朝アサ

夕ユフ

ネンチウギヤツジ
年中行事藤三品作
明空調曲

ヤマ
山同前

クサ
草

カミンエ
上下

ココロ
心

アハスモノ
顯物

サケ
酒

エンガン
遠立

カンキヨ
閑居

カンキヨシヤクケウ
閑居釋教

宴曲抄上

クマノサンケイ
熊野參詣自京
到住吉

オナツクニ
同一自池田
到藤代

オナツクサン
同三自藤代御坂
到切目山

オナツクシ
同四自切目中山
到瀧尻

同五オナシクゴ自瀧尻山口
到那智山

善光寺修行センクワウシ ユキヤウ

同次オナシクツギ

道ミチ花山院右幕下家作
明空調曲シフ ロク

十六

雙六スゴロク

宴曲抄中

鄧律講物禮エイリツ コウ モツレイ

三島詣ミシマ ヲウヂ

理世道レイノミチ

夙夜忠シク ヤノチウ

文武ブンブ自或所被出不知作者
明空成ニ取捨ニ調曲

朋友ホウイウ同前

山寺ヤマヂラ同前

松竹マツタケ同前

名取河戀ナトリガハノコヒ冷泉羽林作
明空調曲

曉別アカツキノワカレ同前

懷舊クワイキウ自或所被出不知作者
明空成ニ取捨ニ調曲

宴曲抄下

買内外ナイゲ

筆德フデノトク

狹衣袖サヤモモソデ

同妻オトコウツメ

鷹德タカノトク

撰要目錄

馬徳 ウマノトク

靈鼠譽 レイソノホマレ

不知作者カ
榎村本衆作

船 フネ
明知作
明空成ニ取捨ニ調曲

寄山祝 ヤマニヨスルイハヒ

眞曲抄

對揚 タイヤウ

遊宴 イウエン

夢 ユメ

無常 ムジョウ

法華 ホツケ

釋教 シヤクケウ

淨土宗 ジヤウド シツ

以下七首 附 新作三首

祝 イハヒ

薰物 タキモノ

雨 アメ

究百集

隱徳 イントク

和歌 ワカ
自或所ニ被レ出冷泉武衛作
明空調曲

長恨哥 チヤウゴンカ

納涼 ナフリヤツ

風 カゼ

水 ミヅ
自或所ニ被レ出不知ニ作者
明空成ニ取捨ニ調曲

十驛 ジツエキ
權少僧都賴慶作
明空成ニ取捨ニ調曲

明王徳メイワウノトク 自或所被レ出 明空調曲

君臣父子道クニシンフシノミチ 法眼頼順作 明空成ニ取捨ニ調曲

老後述懐ラウゴノジニクワイ

後伏見院御宇

正安三年八月上旬之比録之畢

沙彌明空

御宇云々後註以下同

古事類死ニハのがれがたうこいハアリ

いまはむそちのあまり。つれなきいのちの程をも。しらざるべきにしもあらねば。しつかなるすさびに身をかくして。ひたすら佛の御名をたのむよりほかはと。よろづをおもひすて侍しを。のがれかたらずかしこより。あながちにすゝめられしかば。なまじるにうけひき。かみの目録にこそもれ侍れども。なをざりにてやまむもしかすがなるべければ。かさねてしるす。しかあれば。よ所の家の風に吹つたふる葉の花の匂は。まづさきたちて

手折 色にうつるかずもおほくこれをえらび。つたなきもとにさびしき老木にのこるこの葉は。かつはふりはてぬるもめづらしからず。冬枯の木末まれに。人にしられぬかくれがの。ふかき林にいをりをしめ。後にひろひあつむるわざなれば。拾菓集となづけ。巻をふたつにわかちて。上下といへるなるべし。

拾菓集上

南都靈地譽

同并

巨山景コサンケイ 已足侍者作 明空成ニ取捨ニ調曲

五節本ゴセツノモト 自或所被レ出候 明空成ニ取捨ニ調曲

同末オナツクスエ 同前

忍戀シノユヒ 自或所被レ出候 明空成ニ取捨ニ調曲

被出候ノ候 仙臺本之ニ 作ル以下倣

仙臺本常便
ニ作ル

金谷思キンコクノオモヒ自ニ或所ニ被レ出候
明空成ニ取捨ニ調曲

宇都宮叢祠靈瑞ウツノミヤノサウジノレイズキ

瀧山等覺譽タシマノトウガクノホマレ熊野常住作
明空成ニ取捨ニ調曲

同摩尼勝地オナツクマニシヨウチ同前

拾葉集下

梅ウメ自ニ或所ニ被レ出候
高階基清調曲

磯城島シキシマ自ニ或所ニ被レ出候
明空成ニ取捨ニ調曲

遊仙詞イウセンカ平義定作
明空成ニ取捨ニ調曲

蹴鞠シウキウ二條羽林作也
助員調曲明空加ニ取捨ニ

車クルマ生覺作
明空成ニ取捨ニ調曲

袖情ソデノナサケ明空作
基清調曲

旅別タビノワカレ

雲クモ自ニ或所ニ被レ出候
同調曲

曹洞宗サウトウシウ雲岩居士作
明空調曲

二闡提ニセンダイ

嘉元四年三月下旬之比重加注之畢

沙彌明空

拾葉抄 調卷後日出來之同追加加入云々

管絃曲クワンゲンノキョク自ニ或所ニ被レ出候
月江成ニ取捨ニ調曲

文字譽モンジノホマレ空圓上人禪林寺長老也
月江成ニ取捨ニ高階基清調曲

仙家道センカミチ藤原賴光作
月江調曲

五明德ゴメイノトク同作月江成ニ取捨ニ
入江羽林調曲源正字

旅別秋情リョベツアキノナサケ月江作
同

曉思留アカツキノオモヒトママルカクミ月江作
高階基清調曲

戀朋哀傷トモヲコノルアイシヤウ月江作
同

得月寶池砌 トクゲツハウチノミヅリ

全身駄都徳 ゼンシントク

江島景 エノシマノケイ 藤原賴光作
月江成ニ取捨調曲

諏訪効驗 スハノカウケン 月江作
曲同

花園院御宇

正和第三三月五日重注之畢

別紙追加曲

源氏紫明兩榮花 ゲンジシメイリヤウエイクワ 月江作
曲同

琵琶曲 ヒバハノキョク 洞院左幕下家作
藤原助貞調曲

聖廟靈瑞譽 セイベウレイズキノホマレ 月江作
曲同

同靈瑞超過 オナツクレイズキノテウツワ

鹿島靈驗 カシマノレイケン 左金吾藤宗光作
入江羽林月江相共調曲成ニ取捨

同社壇砌 オナツクシヤダンノミヅリ 同前

補陀落靈瑞 フダラクノレイズキ 自ニ或貴所ニ被レ出候
月江成ニ取捨調曲

同湖水奇瑞 オナツクユスキノキズキ 同前

巨山龍峯讚 コサンレウホウサン 月江作
曲同

同砌修意讚 オナツクミギリノイノサン 同前

玉林苑上

鶴岡靈威 ツルガサカノレイキ 沙彌唯心作
藤武衛賴光調曲

善巧方便徳 ゼンコウホウベンノトク 月江作
高階基清調曲

永福寺勝景 エイフクジノシヨウケイ 月江作
同列戶記
字石行時調曲

同砌并 オナツクミギリノナラビ 同前

鹿山景 ロクサンノケイ 月江作
高階基清調曲

竹園山譽讚 チクエンザンノヨサン 月江作
曲同

同砌如法寫經讚 オホツクミギリニヨホフシヤキヤウノサン 同前

戶記字石楯
千本戸部二
從トアル
ニフベシ

象山謠シヤウザンノウタ藤金吾二千石賴光作
月江調曲

紅葉興コウエフノキヨウ藤原親光作
曲同

日精德ニツセイノトク賴光作
與州匠作調曲

玉林苑下ユキリンエンノシタ附鄂律講式繼ニ出來一加之仍次第不_レ同

山王威德サンワウノキ法印忠覺作
藤原助員調曲

背振山靈驗セブリザンレイケン彼山住僧蜜海作
月江調曲成ニ取捨

同山并オナシクヤマノナラビ同前

隨身競馬興ズキシケンゲイ月江作
曲同

同番諸藝德オナシクツガヒシヨウゲイノトク同前

寢寤戀ネザメノコヒ月江作
左金吾春洞調曲

屏風德ビヤウブノトク藤原親光作
曲同

琴曲キンキョク月江作
左金吾春洞調曲

與州匠ノ三字
楹村本ニ

衣原本ニ脱
ス其存在ニ
ヨリテ補フ

餘波ナゴリ藤原時員調曲

衣コロモ

後醍醐天皇御宇
文保二年二月之比記之了

享德二曆孟夏中旬書之
三善常房

右一帖者以飯尾彦六左衛門尉三善常房朝臣自筆本令書寫即時校合

訖

貞享元甲子仲秋天
前泉州司馬時元

宴曲集卷第一 四季部

春

霞カスミたなびく雲井クモキより。春立ハルタチけりな天アマの戸トの。明アカる氣色ケシキも閑ノドカにて。鶯ウグヒス誘サン引フ春ハル
 風カゼ。かすむとすれど淡雪アハユキの。下草シタクサは猶ナホム結スボれて。岩間イハマの氷解コホリトケやらす。争イカチか春ハルの
 越コエつらん。不來ナヨソの關セキの東路アヅマヂ。そよやあらまほしきは梅ウメが香カを。櫻サクラの花ハナに匂ニホハ
 せて。柳ヤナギが枝エダに發サカセてしかな。百千鳥モ、チドリ。木傳コツツバば己オノが羽風ハカゼにも。亂ミダレぬべき物をな。
 誰タレに仰アフセて。鳴音ナクネも絶タエせざるらん。八重ヤハ款冬ヤマアキムラサキフカ。紫深フチナミき藤波フジナミ。汀ミギハになびく池イケの面オモ
 取トリ々にぞや覺オボユる。しるてや手折タハラまし。おらでや挿頭カササましやな。三月ヤヨヒの永ナガき
 春日ハルヒも。猶ナホあかなくに暮クラしつ。

花

春ハルは義弓ヤナギ木の徳トクありて顯アラハせり。櫻桃サクラモ、スミ李コノハナ。這花ナカの中ナカにも勝スグレたる。紅櫻ベニサクラ絲櫻イトサクラ。初ハツ

花ハナ櫻サクラさけるより。梢コズエにかゝるしら雲クモ。花ハナの所トコロの名高ナダカキは。石崇セキソウが住スミし金谷キンコク苑エン。
 廬山ロサンの邊ホトリの錦繡キンシウ谷コク。我朝ワガタウの吉野山ヨシノヤマ。龍田リウテン泊瀨ハツセ志賀シヤの山ヤマ。奈良ナラの都ミヤコの八重ヤハ櫻サクラ。
 大内山オホウチヤマの花ハナ櫻サクラ。雲井クモキの櫻サクラをかざすなる。臨時リンジの祭マツリの舞人マヒヒト。花ハナしづめの祭マツリは。
 實ミ然シカミ。猶ナホほ。頼タノ。げにさは此神コノカミのなをぞたのもしき。去來イザ穗別ホワケの天皇スメラギの。稚櫻ワカサクラの宮ミヤの花ハナの盃サカヅキ。
 淳和ジュンワの御門ミカドの花ハナの宴エン。天長八年テンチヤウハチネンの春也ハルナリ。花見ハナミの御幸ミユキと聞えしは。保安第五ホウアンゴ
 の二月キサラギ。萬代ヨロツヨのためしをば。花ハナにぞ留トメし白川シラカハ。瓶カメにさしたる花ハナを見て。物思モノオモ
 ひなしや老オイのはる。今日今日來来。けふもこずと恨ウラミしは。雪ユキと降フリし庭ニハの花ハナ。楊貴妃ヤウキキヒがかほ
 ばせを帶オビたる花ハナの枝エダ。源氏ゲンジの紫ムラサキの上ウヘ。霞カスミの中ナカのかば櫻サクラ。催馬樂サイバラの櫻人サクラヒト。雙調サウテウ
 には柳花リウクラ菌エン。花山ハナサンの遍昭僧正ヘンセウソウジヤウ。花菌ハナゾノの右大臣ウダイジンとかや。花色ハナイロ衣花イハナ染ソメ。花ハナうすや
 う花ハナかたみ。靈山リヤウサン說法セツポフの庭ニハには。四種シユンシユ曼陀マンダの花ハナぞふる。法花ホツケの喻ユし優曇ウツドン花ゲ。
 如何ニホヒいかなる匂ニホヒなるらむ。哀賢アヘンケンき御代ミヨなれば。あの風カゼも枝エダをならさず。千年チトセの
 春ハルぞ閑ノドカき。

春野遊

上陽の春の野遊の曲。紅錦をさらす春日影。閑き風にや匂らん。霞にもる
 る花の香。花に鳴ては木傳ふ鶯は。此誰が家の軒端にか。珠簾いまだ卷ざ
 るに。夢の枕に音信て。人來と客を呼とかや。臺頭に酒有て醉を勸る砌に。
 爐下に卷を和する。野澤に求しるくの若菜。折手にたまる早蕨。土筆と書
 るは土筆。長安の薺の青きは。田中の井戸に引田菘。あこめよいかにとめ
 こかし。形見にそてを連つゝ。摘しらせばやとぞ思ふ。うつろふ情の色し
 有らば。花のもとに歸らむ事をや忘るらん。遊絲繚亂の色々。碧羅の天に
 なびくなり。裳を宛て打解る。花の下紐永日も。あかぞ暮山鳥の。尾上の
 櫻さきしより。一木が本は綾なくて。見きと語らむ都人に。いさうち群て
 御吉野や。小泊瀬志賀の山越。片野のみの。櫻がり。雉鳴野の夕煙。龍田の
 奥の幾霞。霞を分て誰粟栖野に宿どらん。尋入野のつぼすみれ。摘てや來

るぐ塵添盛
 糞抄ニハ女
 妻ノ字ヲ充

宛て訓不詳
 但シ眞曲抄
 對揚ニ一ツ
 シガタル所
 リ

給ふらむ。今夜ねて名残の袖はしほる共。小野の芝生の露分衣。日もゆふ
 暮の歸さ。

夏

花は根に鳥は古巢にや歸らん。惜し物を櫻色に。染しは花の袂を。此いつ
 しか更ば。云ぬに着たる夏衣。卯花さける玉川の。井ぜきにかゝるしら浪。
 二葉に見えしあふひ草。みあれのころや榮ん。勝先初音もめつらしき郭公。
 雲井の外の一書を。おもひもあへず詠れば。強顔のこる晨明。水位増ぬや
 五月雨に。荻手もたゆき河長の。菖蒲はもらぬ軒端にも。藁屋萱屋板廂。何
 もかはらざりけり。外面の木陰露涼し。一むらすくる夕立に。水増らざら
 めや。鶉飼舟螢やかゞり。篝火や螢にまがふ夕闇。今宵計や六月の。名残も
 惜き木綿祓。麻の末葉にかよふ秋の初風。

郭公

水位「ミカ
 サレト訓ム
 ベキカ

ものはカ
言問ふカ

緑松の陰の本。紫藤の露の底。胡蝶も霞に遠ざかり。溪鳥も雲に入ぬれば。
 待るゝものとは我宿に。問ふ空の郭公。ほどとき過ぎ聞ばやと。おもふ心
 や誘引けん。その神山の昔年。其神館にたちやすらひけん。かたをかのも
 りて初音にめつらしき。四五月のあはひの。端山の峰の雲の外。二三更の
 間の。夢の直の雨の後。枝には露を帶つ。金鈴りゝと房なり。華は艶を施
 して。岩麝芬々とかぐはしき。盧橘の香をもとめて。鳴は昔や忍ばるゝ。有
 つる垣根の同聲に。慕來にける哀は。さすがに人には異なるや。花散里の
 時鳥。待日はきかず日比経て。今夜聞つと讀りしは。音羽の山の時鳥。鳴つ
 る方を詠れば。たゞ有明の月影の。強顔人の橋より。鳴音空なる戀わび。こ
 ころのうちを書口説。岩瀬の松の郭公。如來りしは。いかなる夜の事成け
 ん。汝が父なれど鶯は。賤き塙ねに木傳て。玉敷庭には音信ず。然を一聲の
 山鳥は。夜となくひるとなく。聞む事を松の戸に。明方かけてや名乗らん。

橋ハ楢カ古
今集ニ證歌
アリ
如來本ノマ
マ如ハハハカ
トヨムカ

片不明今假
ニ擬ス

木の丸殿の曉。鶯の聲の中より巢立とも。藍より青き聲なるは。たゞ郭公
 鳥のみならず。履手乞ては何かせん。賜めが片戀を顯す。五常の中の信あ
 るは。布穀に過たる鳥ぞなき。何の田長そ名もしるく。己鳴ては早苗とり。
 丸は田に立營に。にきはひわたる君が代。げに治れる時の鳥。寢覺の空の
 村雨に。袖に涙の色染て。人の戀敷常磐山。唐紅にふり出て。鳴は我身の類
 かと。露けき程の五月雨に。しげきあやめに水越て。善悪もみえぬ夜の浪
 に。御船を留し淀の渡。まだ夜ぶかきにと詠しは。いかなる船の中ならん。
 おぼつかなしや鞍橋山。山路くらしつゆきやらで。只一聲のあやなくも。
 やがて明ぬる篠目の。信田の森の千枝の數。聞てもあかぬ名残は。いつも
 初音の子規。紀路の遠山廻つ。今來の岡にぞ侍るなる。さかても杉のむ
 ら立を。を詮にせむ山田の原。又百千歸信濃なる。須賀の荒野になく
 比や。聲六月の郭公。

秋

雲井内閣本
 雲居内閣本
 鷹金内閣本
 鷹が音内閣本
 怨らむ内閣本
 本つらむ内閣本
 心二作らむ内閣本
 線内閣本色
 朝がほ内閣
 本種二作らむ内閣
 争内閣本花
 薄内閣本花
 引板内閣本
 打木内閣本

取し早苗の何の間に。稲葉の鳴子引替て。秋風吹ば七夕の。妻迎船に契て
 や。時しもこゑをほにあけて。雲井をわたる鷹金。遠の山路や霧籠て。友迷
 せる旅人は。過ぎぬ秋や怨らむ。露分わぶる篠の目。春は緑にみえし若草
 の。花は野邊に紅葉は峯に。綵露の玉ゆらも。日影を待えざりける。垣ほに
 つたふ朝がほ。古枝にさける本荒の小萩が花。荇萱女郎花争。ほのかに招
 く夕間暮。えぞ過やられざりける。同じ雲井のなどやらむ。七月八月長月
 に成ば。久方の月の都に。光ぞさやけかりける。賤士が假寝の稻筵。棹鹿の
 音に驚かされて。おどろかすなんなる物をな。山田の打木の寢覺は。此夜
 や寒からん。つゞりさせと鳴蜚。いかゞはすべき暮る秋の。名残をしたふ
 袂よりや。先は時雨そむらんやな。

月

更闌夜閑にして。清明たる月の夜。明月峽の曉。度公が樓に登れば。千里に
 月明なり。殘月窓に傾て。宮漏正に長ければ。打や砦の萬聲。千度寢覺の床
 の上に。拂ひもあへぬ露霜を。片敷袖にや置副む。月冷く風秋なり。此和琴
 緩く調て。潭月に望むのみならず。索々たる絃のひびき。松の嵐も通來て。
 深ては寒き霜夜の月を。候山に送なり。瀧水氷むせむで。ながるゝ事をや
 えざるらむ。月の出鹽や御津の濱松の。下枝をあらふ波間にかよふ白妙
 の。月や砂を照らむ。月は明石の浦の栖居。檣の戸口の月影。問す語の夢も
 げに。忘ぬ節とや成ぬらむ。いざ見に行む佐良科や。姨捨山清見が關。廣
 澤住江難波方。蘆間にやどる夜半の月。仰げば清き久方の。月の都は九重
 の。雲の梯にすみわたる。露臺の月の在明。月花門の夕月夜。秋の宮人の袖
 のうへに。移ふ萩が花すり。露もさながら色々の。玉かとみゆる月影。いざ
 よひに弓張。伏待の月。朧に霞む三日月。

秋興

蕭颯たる涼風。一時の秋を告とかや。槐花雨に潤ふ。桐葉風涼し。林を繡紅葉。緑苔を掃もてなしも。皆秋の興を増て。色々にみゆる百種千種の花。下
 ひも早解染るいと萩に。亂て結ぶ白露。薄霧の立旅衣の。袖かともがふ初
 尾花。分行末もはるくくと。ほのかにきけば妻籠に。男鹿鳴野の眞葛原。末
 枯ぬれば蟲のねも。絶よはる夕暮。よしさらば今夜はここに宿どらん。男
 山花にあだ名は立ぬとも。我脱懸む蘭。なまめき立る女郎花。げにそもえ
 ならぬ色なれば。あたりのゆかりまでも。心をかるる夕露の。手枕さむき
 かりがねの床。第一に心を病しむる。何の所にすくれたる。月のあきらか
 なる前。此夜はじめて長ければ。かうくたる星の。あけなんとする曉。壁
 に背る灯の。幽にのこる窓の中。

絶々カ

冬

樂ハ假借字
恆婆ハ恆河
沙ノ略

今日よりは間なく時雨の。間無時雨の布留の神杉や。年舊ぬれば染あへな
 くに。猶緑に三輪の山本。嵐や過て吹ぬらん。僅にのこる紅葉ば。霜に枯行
 浅茅生の。宿には人も問こず。板井の水も水草あて。氷の上に霰ふる。小野
 山里雪ふかし。跡だに見へぬ細道。春の隣の近ければ。老木は花も浦山し。
 いとひてもいとふ方ぞなき。来る老樂の關もり。さても佛名に成ぬれば。
 三千世界恆婆如來。諸佛菩薩受持名號。功德無量無邊引接。頼敷ぞや覺る。
 立舞袖もしばし。追儼の夜半の人。

雪

瑞を豊年に顯す。尺に満白雪の。降て暮行年月の。積々ても。終に紅葉ぬ松
 が枝の。緑もふかき春くれば。雪間を分る若草の。はつかに思ふ心はうき
 人の。末の松山浪越か。とみゆる浦ちかくふりくる雪。この光に明る山の。
 尾上の里のさと人は。人目枯行跡無庭に。問ぬを情と思へども。猶恨敷や

侍ハ待カ

椎ハ維ハ
ツナカヌ

侍るらん。袁司徒が家の雪。春過夏深く。積て道は迷はず。瑤階を連ぬる庭
 の雪。瓊樹を抽る林の雪は。此一萬株の花ほころび。梅が枝に花降まがふ
 淡雪。鶯の百囀すれども。猶風まぜの春の雪は。班女が閨の中には。秋の扇
 の色となる。孫康が窓には。雪を集て光とす。朝に跡を尋しは。雪の中の椎
 ぬ駒とかや。夕に鳥立に迷ふ雪も。白符にみゆる箸鷹。皓鶴あざやかなる
 をうばはれ。白鷗は素をうしなふ。抑善政曇らぬ御代に。あふがたのしき
 九重の。豊の明の小忌衣。袖ふる雪はなをさえて。日影に消ぬ玉敷の。御垣
 にたえぬ御溝水。汀の氷。峯のゆき。君にぞまよふ道は迷はずと詠ても。さ
 えなばけぬべき命の。なを又世にふる白雪に。市の南に望し賣炭翁は。さ
 ゆる一尺の雪を悦ぶおもひあり。我やどの薄をしなみ降雪は。世々に積て
 も。跡はたえじとぞやおぼゆる。

宴曲集卷第二 附賀部 附神祇

祝言

四海浪閑にして。九州風治り。雨壤を犯さず。棘の野邊も押なべて。遍き露
 をや灑覽。幾萬代と白浪の。濱松が枝の手向草。緑に見ゆる山藍の。小忌の
 衣の。立舞袖をひるがへし。神の心もや打解て。曇らぬ光は玉銚の。道有御
 代をや照すらむ。所々の宮柱。猶古へに立歸り。寺々の叢もかはらねば。鎮
 護の道場憑有。蓬萊洞は長生殿。歲月春秋積りても。老せぬ門に仕て。忠臣
 朝を待出る。砂に響く杳の音。民も久しき御影を仰ぐ天の下。閑き春の耕
 すより。苜ほす稻葉の秋を経て。絶すぞ備る御調物。東に霞を隔ては。花
 洛の境に攀上り。西に浪路を凌ても。都の道に急がはしく。萬民愁を成ざ
 れば。關の戸とづる事もなし。

嘉辰令月

嘉辰令月の。曇なき御代に會ては。國富民豊なり。萬歳千秋の風長閑なれば。浪治れる時を知。優曇花海中に開つつ。百度發萬度。榮る春の日の。長居の浦の砂路の。砂の數は拾へども。盡せず久しき玉津島や。光を塵に和げて。紀路の濱木綿重ても。猶憑しく三熊野の。神もろともに□せば。□も賢き流のする。聞ては古ぬる五十鈴川。伊勢の濱荻代々を経て。替らぬ田鶴の聲までも。雲井に遙に立のぼる。此位山麓の塵ひち積りても。其名は實然。高砂の。尾上の松の枝さし副て。幾千年をか限らん。

□闕字不明
座(マシマ)カ
せば聞カ仰

宇禮志喜哉

宇禮志喜哉や皇の。玉體光清して。曇らぬ御代の天の下。幾萬代をかかきるらむ。大宮人は帝闕の。星を戴に急はしく。涓濱の浪を疊まで。猶又仙洞の。月にそ歩を運けるやな。かかりける御代の事かとよ。七徳を儼て七徳

の。歌をば奏しけるやな。元和の古も。聞ては詞舊たり。今日の日今に非ずな。

優曇花

思へば久し君が代の。様に類ば。希に開くる優曇花の。花待えても百千度。改らさんなる物をな。榮は端山茂山。しげみの緑重きに。猶枝差そふる杉の葉。谷深み道も知れねば。はるけきかなや行末。此蜀江の錦と。閻浮檀金。崑崙山の玉。娑竭羅龍女が一顆の玉も。此砌にや顯れん。

花亭祝言

玉樓金殿に。錦を飭る翫し。雲のたたりかた藁を並たりやな。霞の軒端には。又立並様なく。萬代の春を重ても。榮花の花はさき草の。三葉四葉に殿作。宜も富けり我君の。御代の榮は曇なき。玉を連ぬる緑のすたれ。行末懸て見ゆる哉。鏡を磨く粧ひ。臺には舗り。紅錦の色。庭には満り。面を並る

認て「シメ
テ」ト訓ム
ベキカ

珊瑚の鬘やな。青苔地を飜つ。黄菊籬に鮮也。枝かはす軒端の松の木高
き陰。幾千年をか仰べき。峨々たる山は動なき岩根を認て。流絶せぬ池水
の。汀の砂のかずくに。寶を雨す如意珠までも。此砌にや備らむ。

不老不死

思ハ照カ

長生不老の樓は。必蓬萊の島のみかは。いなや歸らじと尋しかど。文成が
僞も由なく。老せぬ門をさして云へば。日月陰らず代を思す。御垣の光や
是ならん。されば累代の政を賢くして。青陽の春の始の日。樂の曲袖を連
ね。弓場殿に此又座を敷て。不老不死の藥を獻ずとか。衆徳を兼たるは酒
の興宴。憤を發し齡を延。年月次を重ても。巴の字を書たる流のす。重陽
の宴の菊水。仙宮萬年の翫び。上壽をたもつと態なり。何も常磐の若緑。千
とせを遠く松に住は。まだ巢の中なるひな鶴。梅の初花初子の日の。若菜
は老せぬ君が代の。様に誰かは引ざらん。勝榛柴の屢も。枝を鳴さずのと

因ニ部記ハ東四
大子部ハ勝東
弗于部ハ勝東
身置部ハ勝東
西貨部ハ勝東
南閩部ハ勝東
勝北勝北勝北
越勝勝勝勝勝
ノ文イ此カ

開かなるや。風治まれるしるしならん。幼なかりしは若紫の。遙に思ふ行す
る。初もとゆひを結しは。二葉より契葵草。若葉さす野邊の小松と祈しも。
最ねび増て物々敷。見る甲斐有し様なれや。抑佛は常住にして。はや浮雲
の空隱。法性の光は有明の。つきせす無量の壽命なれば。二八の尊者は今
現に。遺教流布の勅を受。或は北瞿盧西瞿陀尼。東勝南瞻部州をしめ。或は
玉樓金閣。香翠山。潘觀婆山。廣教毘布羅の山の麓。分身普く及して。教法
今に絶せぬは。不老不死と説れたる。一乘一味の雨のしたに。藥草藥樹の
花のにほひ。病即消滅の風薫す。の凡不老不死の利益。藥師の十二大願。
十二神明の擁護なれば。始宮毘羅大將よりや伐折羅大將。安底羅乃至摩睺
羅眞達羅等。此招杜羅大將毘羯羅も。皆是等の大將諸共に。各七千の眷屬
と。君をぞ守奉らん。

神祇

神徳峯高くして。粉楡の榮枝を連れ。感應海廣ければ。蘋蘩の綠波に浮ぶ。
 浪を隔る千里の外。雲を重ぬる萬國に。其形を餘多に分ては。利益を常に
 絶ず。倩古の舊にし跡をおもへば。天の岩戸を緋の瑞籬に。宮るする代々
 に至まで。皆我國の神態。誰かは是を仰ざらん。伊弉諾伊弉冉の。二人の尊
 計て。天より降す玉銚の。道有御代の今もなを。荒金の地の動なく。崇神の
 賢き昔かとよ。天津社を崇て。此地祇御神も瞻す。神の神たるは。人の敬に
 依てなり。人の人たるは。神の恵に依とかや。さればや大内の御垣にも。祝
 れ給ふなる。神祇官の八神殿。園韓神の社と。生馬の明神鑿て。賢所は温明
 殿に。玉體光を並とか。又賤き宮仕子祝子。あの巫女の鼓の打妙に。神閑冷
 増る鈴の音。振仰見れば榊葉や。立舞袖の追風に。御注連にかくる白木綿。
 弓立宮人聲々に。此豊幣取々なる態までも。神の心やなびくらむ。

宴曲集卷第三 戀部

吹風戀

吹風の目にみぬからに身染て。おもふ心よ何も角。益無迷ふ戀路の。すゑ
 やは何合坂の。せき留難瀧津心は山川の。音に立ても謂ばや物を。無端命
 も知ずかけろふの。岩垣淵の隠に。身を捨ても何かは忍ぶ。思ふには負習
 も。有蘇の海の片貝。此拾もて會ぬ恨の。數取とらばや。如此計見目の外に
 強顔は。闕も終なでや思草。葉末の露のたまさかに。來てだに手にもたま
 らぬは。取滞り衣手に。咽涙の中に別れにし。うきおもかけを身に副て。明
 行空に朝鳥の。音のみ啼て左右に。憂物なれや人毎の。聞苦しき世の中に。
 長居てあはむ憑だに。懸ても如何が他浪の。寄邊定ぬ水の上の。泡ときえ
 なでや浮沈。水隠に喘餘。早川の瀨に立ねど。苦しき戀の淵となる。涙の床

借ハ此ノ假

水隠(ミガクレ)にカ

〔衍文ナ
ラン〕
愛ハ愛（ウ
キ）カ
かいらぬ身
にノ下類
本錯簡アル
ガ如シテ歌
類聚ニ據ル
テ訂正チ加
フ難ハ堅ノ假
借

の行末も。しらす迷ば其や白雲の。雲や白雲の。かゝらぬ山も啼々ぞ。君に
は迷ふ迷ても。愛も情も露の假言も。かゝらぬ身に仕へつゝ。あの願もせぬ
我宿の。軒端にしげる葱草の。種取ましを逢事の。最如此難岩にも松は生
なるものを。強てなど強顔色と知ながら。なをこり須磨の浦に焼。海士だ
に慎思さへ。けぶりのするにや顯れん。後をば知ずたのみつる。今夜計や
新枕。返しもあへぬ昵語の。名残は未盡無に。後夜將に明なむとす。頻に鳥
も音に立て。つらき別在明の。月こそ袖に曇けれ。又夕暮と契れども。憂習
の言の端は。盡ても不知や憑ねば。待としも無音信の。そよともすれば下
萩の。末越風をや待らん。見や夢有しやうつゝ。面影。忘すながら遠さかる。
雲井の雁の玉章も。虚の空なる記念哉。君が爲に衣裳に薰物すれども。匂
有とも白雲の。懸ぬ山も。あらし吹そふ木の本に。消すはありとも散花の。
明日は雪とや積るべき。如何に鳴海の恨ても。人を見目は假にだに。憂節

知らぬ吳竹の。長夜懸て契也。

龍田河戀

戀爲てふ我名は未き龍田川。渡ぬ水の分てなど。益無袖ぬらすらむ。不知
幾世か玉の緒の。長往にける伊勢の海の。海人の真手形のしばし置らむ露。
出て拂ふと計の。情は能や葦垣の。隙こそ無れ。勝に又訪れねば。條目苜澤
田に袖の。濕にぞぬれし物思ふ。我衣手を見ばや。婦に山城の六田の淀に
小網差て。しほるゝ麻の狭衣。

袖志浦戀

戀爲てふ袖師の浦に拾ふ玉の。たま〜きては手にだに止め強顔さ。ほか
らじと懷貝のからかひて。終に逢ずば玉くしげ。二度命の長經て。有經物
とは白雪の。きえてや中々忍れむ。淺間の嶽の淺猿く。もゆる気色は富士
の峯の。けぶりもそらに立上り。上無思の行末とや。雲居の月も霞らん。鏡

海ノ古ノ真手
形ハ袖來申諸
説アリ但申
抄照リ但申
伊勢ニ併シ
浦アリ併シ
考フベシ形
隙ノ類無レ
錯簡アル本
如シテ歌類
正ニ據ルテ
山城六田疑
ハシト雖疑
ニシテ山城
掛ケテ山意
淀ケテ文意
續ケテタル
ナ

猿ハ假借

踏不
明ラ
踏恐
然ラ
ハ並
詞字
林並
綱目
出ツ
のう
げの
カ

浦山
布ハ
假借

の影に向居て。むかしもあらず山の井の。淺猿げなるくろかみも。誰手枕
にみたれん。問れぬ夜半も菅筵。我も臥憂竹簀。書流しけん水莖の。跡は入
江の藻鹽草。からくは浮世に踏躑て。此輪の中に廻逢瀬にかけに水草。う
しとは誰を岩打波の。碎る心は我計。慎とすれど涙川。朽にし袖のしから
みの。流て早月夜の。夜の衣の恨しく。計無夢の中にさへ。ゆるさぬ夜半の
關守も。しばしは打ぬる隙も哉。浦山布さても彼。巫陽臺の邊にして。朝に
は雲と成。夕には雨と時雨けん。神女に結し夢の契。げに有難かりし様哉。
是も思へば何かせむ。迷の中のまよひなり。暗より闇にぞ入ぬべき。山の
はつかにのこる月の。心の霧をやかへげまし。光は秋の白露の。色々に見
ゆる玉なれば。磨ばなどか磨ざ覽。

袖湊

思立より戀衣。袖の湊の深くのみ。鳴海の波の音に立て。謂ぬは苦しきた

差香ハ
假借

薰ハ重
サナル
カ
大唐
濤ノ
モ
ミト
訓ス
ベキ
カ
械ハ
權カ
袂に
カ

くなはの。長恨と成やせん。人心不知未しらず花染の。變安き世の間の。習
を誰かは頼らん。川船の差香に差も離ねば。うきたる中を思へども。寄て
はかへる他波の。情を懸る言の端。諸ともにおもふと聞ば能やさは。心盡
陸奥信夫の奥。千尋の海の底までも。入なむとぞやおぼゆる。勝奥の海の
な。鵜の居岩の狭間にも。葎のやど萱が軒。土生の小屋の締さも。苔踏鳴す
岩がね。薰る雲をわけても。大唐濤唐櫓械梶を取ても。渡まほしき物をな。
此不來の關守は。打ぬる宵も有なむ。置らん露もさのみやは。袂結ぶべき
やな。契の末の替ずば。虎臥野邊鯨の寄る島にも。留ば留なんやな。如何な
る思なりけん。反魂香に咽し。けぶりの末の面影。生ても思に絶じとや。こ
の石季倫が別には。緑珠が身をもすてけむ。

袖餘波

さても此強顔見し晨明にや。衣々の袖の名殘。忘る間無は曉。思ふ鳥のそ

らね。談らふ一夜の夢路にや。緒斷の橋の名をかけて。又今も渡ぬ中河の。逢瀬もつらき別路。さぞな昔の垣も越ぬらん。

源氏戀

善とても能名も立ず。菫萱のいざ亂れなん。菩薩に藤壺の。如何なる迷なりけん。憂名もきかなで薄雲の。浮立おもひの終よき。立舞べくもあらぬ身の。紅葉の賀の夕榮に。頭の中將の匂ひも。人より殊に見れども。花の側の太山木と。押しもさすがに如何おぼしけん。袖打振し御返し。立居に附て哀と。讀せ給ひけんも分無。此朧月夜の内侍の侍や。さりや何に落けむ涙の色を。穴君など疑せ給たりけん。朱雀院の問し御心。恥くも如何恥ざらん。女三の宮の柏木も。薰の行末と思へば。更に疎も終れざりけり。浮舟の匂ふ兵部卿の宮。橘の小島が崎に。舟さし留て契けん。河より遠の御栖居。最淺からずやおぼゆる。

侍「カン」
スキミト訓
穴君不明今
假ニ擬ス

名所戀

忍も苦し如何にせむ。強顔人は常葉山。言ねばこそあれ岩躑躅。さのみはいかゞ慎終む。思倍田の生限は言出じ。漏じとこそおもへども。音羽の瀧の音にたちて。岩瀬の森の梢の。色にし見えねば然る人だにも。戀には迷ふならひの。我柄忍の泉郎の菫。藻に住蟲の音をぞ啼。ねむ夜の丈と成にける。袖の涙を侘ても。知ず體なる松の風の。手枕近き明暮。おもへば計無や身をさらぬ。面影計の忘記念。誰も思ば攝津國の。難波の蘆の憂節に。礙小舟の寄邊無。身は他波の心地して。いでや此煙計を。此世の思出な。又思ふ邊に立別て。憂身を離ぬしるべならん。藤つぼ邊に忍しは。いとど無態なれども。語ふべくも無ればや。猶あらじとて立寄し。后徽殿の細殿の。をし明方の朧月夜はににる物やなかりけん。心迷の契故。猶こり須磨の浦傳。飛鳥井の深き思。跡無水の夢の直。如何に憂と思出る。常磐の里を忍け

倍田ハ益田
ニテ生ニ池
カニ掛ケタル

分(ソリ)無
カ

口ハ衍カ

園ハ園垣ニ
テ忌垣ナル
ベシ
積ハ積カ運
歩色葉集ニ
積米トアリ
目不明自カ

ん。凡妹脊の中に落。芳野の瀧の由無に。擗て物を思ふてふ。心の中の苦し
さを。さて又誰かは我爲に。慰程も語て。袖打返したはぶれむ。春や昔の春
の狂言は。水の尾のいにしへとかやな。夢かうつゝかおもほえず。齋の宮
のかりの契。憂子一のかたらひより。丑三計の昵語にや。神の園の渡てな
どか問ざらん。さりともと信土の山の待甲斐も。名草の濱千鳥の。跡だに
付ねば小餘綾の。急て我や行まし。宇土濱の疎遠心の駿河なる。田籠の恨
有蘇の海の。見目の外にや成ぬらん。争かは會の松原行てみむ。浦山布は
戀の岡。婦が姿の池水に。しばし水飼影をだにみむ。檜の隈川を渡す駒。人
しれず涙に袖は。鹽垂山に迷つ。佐野の船橋さのみやは。外にも人を聞
渡らん。君が住綴喜の里の床しければ。尋行ては美作や。久米の佐良山更
更に。争人に逢ざらん。常陸には田をこそ作筑波山。端山重山。茂人目を凌
ても。苜田の穠思出ば。秋はてぬとも問てまし。目情計は。懸よ鹿島の常陸

鳴鶴(ナグ
タツ)のナカ
萬葉集卷七
ニ證歌アリ
夏ハ夏カ麗
紅葉ニハ麗
近(ワケ)ラ
バ)ナラシ
カ

をと海ハ遠
と海(遠江)
カ

帯の。神に誓し契の。すゑの松山他にしも。争か波の越つらん。人心うつろ
ふ花の櫻川。外にもやがて立歸る。霞の關の關守。妻が島記念の浦に鳴の。
音には立れど忍の岡。強顔色のかはらぬは。年經松が浦島。夏紅葉に問人
有。須磨。浦の。あまり憂音に袖は露じ。言絶ぬれば陸奥の。壺石文ふ
みもみず。心の奥を知せばや。信夫の山の下わらび。然伊吹の誓約束。さし
もつらくてやまんとや。不審な逢瀬だにも迷身の。渡ぬ前の名取川に。しつ
みも終ば無名島。麻生の浦回に。來寄波の濕衣。羽束しの漏ても誰か散し
けむ。會事をと海。猪無の湊入の。蘆分小舟の礙おほみ。緒斷の橋の絶ねと
や。鳥屋の。鳥の有耶無耶の。關の扇の稠ければ。敢ぬ中とや成ぬらん。

宴曲集卷第四 附雜部上

樂府

如何に心も摧けむ。蓬萊宮を尋けん。童男娘女は。眼は穿なんとせしかども。不見事をえざりき。是皆徐福文成が。誰たと歎し甲斐もなくして。たゞ徒に老にき。上陽人は又紅顔空に衰。窓打雨の夜の床。寝たる事も覺ず。秋の夜長寝されば。明も心無宮の。鶯は百轉すれども。聞事を厭。梁の燕はならび住ども。物妬事を止てけり。たゞ深宮に向て。明月を望とかやな。此衣裳青き黛。眉書て細く長ければ。外人には見じとよ。みなば笑れなんやな。

伊勢物語

昔男在原の。其身は賤と云ながら。かたじけなくも楡の葉の。末葉の露の

誰たと本ノ
マ
□關字不明
みえなばカ

白玉か。何ぞと問し人も皆。他なるちぎりの中様かは。心の奥は陸奥の。信夫の里の摺衣。おもひ亂る涙より。袖の湊のさはぐまで。一方ならぬ迷にも。命強顔長らへて。初冠の往年より。五十に餘年月を。送迎る春秋の。詞の花の色々に。しばめる匂を残つ。思ひ思はず花かたみ。目ならぶ人は大幣と。名にこそ立れ百年に。一とせ足ぬつくもがみ。立寄老の波までも。情を懸ば武藏鏡。さすがに誰をか捨はてし。我身一は替ぬに。おぼろげならぬ春の夜の。月やあらぬとながめても。見し面影をやしたふらむ。あだしみやびのせめて猶。すける心はいちはやく。都をさへに住うかれて。東路はるかに思立。淺間の嶽の夕煙。富士の高ねは時知ぬ。山路の雪の曙の。鶯の下道や打拂。限無遠來にけりと。こし方を思つゞけて。いと哀なる時しも有。名もむつまじき鳥の音。住田川原の渡守に。事問侘し旅の空。物うきひなのすまるなれば。此えびす心もいざやさは。都の土産にいざといは

む。何かはわすれん御芳野の。頼の雁もひたぶるに。我が方にのみ寄ると
 鳴物を。おもへば久方の。あまりくまなき心もて。誰に思ひをかけまくも。
 賢神のゐがきをも。強顔中の隔とや。かりのつかひのかりにても。思ひよ
 るべき便かは。ねひとつばかりの月影に。丑みつまでば語へど。夢うつ
 とも分かねて。心迷に明にけん。井筒に懸し丸がたけ。振分髪のはぶれ。
 落穂拾し田邊の庵。春日の里深草。長岡水無瀬小野の里。菟原の郡高安の。
 里をばかれずやかよひけん。飯匙取しくままでも。忘れぬ情の妻なれや。

源氏

藻鹽草書集たる其中に。紫式部が筆の跡。疎なるは無やな。六條院の女樂。
 傳てきくも面白や。比は正月廿日の空。おかしき程に成行に。御前の梅も
 盛に。大方の花の木どもも。皆けしきばみ霞渡るに。臥待の月差出て。先女三
 の宮を見奉ば。人より殊に少くて。櫻の細長に。柳の絲の様したる。御髪こ

笙ハ箏カ

駒ハ高麗ノ
假借

般(フナバ
カ)を叩て

ぼれかゝりて。琴引給ふ御姿。鶯の木傳ふ羽風にも。亂ぬべくぞ覺る。女御
 の君今少。匂加る様して。笙の琴をぞまさぐり給し。開こばれたる藤の側。
 並無早朗を見心地す。紫の上は葡萄染にや。色濃小袷に。蘇芳の細長をぞ
 きたまふ。最花やかに和琴を。氣高こそ書立れ。花と云ば櫻に喩ても。猶物
 より異に見るに。並ては非御邊に。明石は氣押べけれども。最差も非持成
 て。駒の青地錦の。端さしたる茵に。琵琶を打置て。只氣色計引懸て。婀娜
 に仕成たる撥の持成。五月待盧橘の花も實も。ともに押折たる喩は。何に
 も如何くだされん。

海邊

蒼波路遠し。雲の浪煙の波をしのぎて。纜を解を叩て。商客の夢を驚す。憂
 ねの床の檣枕。旅泊の哀を催す。滿來鹽の彌増に。湊を隔る伊豆手船の名
 殘を留る猪名の渡。難波入江のうら風に。末葉に波を亂葦の。世に定無鳩

不明歌謠
類聚明るも
しらぬトア
焼差(サシ)
たるカ

鳥の浮巢を他にや憑らん。伊勢の海の清渚の。玉敷濱邊に拾貝。しばしと
おもふやすらひに。涼しき松のしたかげ。鳥羽玉の夜佐の浦浪の。荒磯に
碎る音立て。友迷せる小夜千鳥の。聲澄程にや成ぬらん。苦ふく軒を漏月
の。かたぶく空は天の戸の。明るも□篠目に。焼□たるいさり火の。煙に紛
ふ朝霞。浦より遠の浦傳。憂かりし鹽の彌合に。沈も終ぬ身と成て。淺から
ざりしちぎりも。如何なるしるべなりけん。泡と見淡路吹越興津風に。鳴
湊の若布海松房玉藻貝。荇干てふ里の泉郎の。間遠の衣袖冴て。月影なが
らやこほるらん。海漫々たり。年々に藥を尋し蓬萊宮。天水茫々として。更
に氷に所無りき。

海路

海は四徳を湛つゝ。連鹽を萬里に廻令。雲客は霞に乗て居たり。仙人は月
を翫ぶ。深櫻は春の雲をうつし。畫鷁を波の前に開。あの節にふるゝ情は。

深山(ヒマヤ)
櫻カ

摘みカ

船の中波の上。一生の歡會是同。朝浪閑の霞の間より。行瀨の浦の白波の。
花かと紛ふ追風。此奥津鹽合を吹送る眞帆に當る。船乗爲らし吾妹子が。
赤裳のすそ濕つゝ。霑共行む見目しげく。麻生の浦廻の磯菜摘にてや歸ら
ん。住吉の岸なる其さは。草の名は忘る種を誰か蒔し。さても思の我にの
み。津守のうらの恨してめや。強顔生の松原生て世に。心づくしに幾代經
む。蒼海渺茫として。きけば青海の波の音は。岡部の松にや通らん。嵐に類
琴の音。攪ては又挑し。玉盤に跳。竊々たり嘈々たる聲も有。船を近付て語
しは。潯陽の浪に浮し曲。鹽の山差出の磯には千代經ても。浪治れる時や
著しるき。藤枝の浦に居る。□千□も遠立騷。夕浪千鳥奥の海の。浪越岩の島
津鳥。浮て流葦の根の。亂て鹽瀨の波や懸む。滿鹽の入江の島に。かつくて
ふ海士の。神馬草そ荇干汀の。岩根の床に。其かとみゆる別敷。己が爲態も
取々に。眞橈の響唐櫓の音。皆聲澄て船子歌。夜船をいそぐ磯傳。夜さへ苦

竊々ハ切々
ナリ

磯千鳥カ

別敷不明

しき綱手繩。月に促す天の戸を。緋の粧舟ほのくくと。波よりしらむ篠の
 目。暫として立寄甲斐も渚なる。苫屋は如何に浦廻る。一時雨も森戸の松の。
 木蔭にいざさらば宿取む。

海道上

行々たる露の驛に。思を千里の雲に馳。眇々たる風の泊に。心を幾夜の波
 に碎む。霞隔。霧を凌ぎ。立別れば旅の空。雲居の外にや成ぬらん。馴來し
 都をかへりみて。會坂越て打出の。濱より遠を見渡ば。鹽ならぬ海に歎る。
 石山詣の昔まで。其面影の心地して。山田にかゝる湖の渡。矢橋を急ぐ渡
 守。長等の山を外にみて。淡津の原を後にし。勢田の長橋野路の末も。時雨
 て痛く守山の。篠に露散篠原の。小竹分る袖も濕つ。日も夕ぐれにや成
 ぬらん。くもりも霞む鏡山。いざ立寄て見てだに行む。年經ぬる身は此老
 ぬる。老蘇の森のした草の。蔭に駒を留ても。今夜は是所に假枕。草引結ぶ

霞をか
 歎不明歌謡
 類聚ニ據ル
 湖歌謡類聚
 潮ニ作ル

礙不明歌謡
 類聚ニ據ル
 とはトアル
 ヨリ今假ニ
 擬ス
 足重ハ足近
 川又阿志賀
 ノコトカ

大高カ高字
 ナ脱ス

旅ねせん。更ふけぬるか人を。咎る里の犬上の。床の山は不知哉何ぞ。不知哉
 河々風寒曉の。ね覺に聞ば少夜千鳥の。岡部の松に積る雪の。雪よりしら
 む篠の目に。小野の舊道雪吹して。蓑浦返す旅衣。末野を廻ば伊吹山。差も
 牙暮す夕嵐に。氷やすらん佐目井も。櫛の葉柏はらくくと。霰の音立て。關
 の藤河波越て。水の柵行遣て。たれかは心を留む。不破の關屋の板廂。眞屋
 の餘に間荒なれば。時雨も月もたまらず。駒並て渡井せきの杭瀬河。雨に
 礙ば笠縫の。里にやしはし休む。己々契や結ぶの森。浦山布も立並て。枝差
 通す二本。水の流て川島の。若墨俣や替覽。危く渡す浮橋の。足重をこえ。
 早朝も池にや成ぬらん。初霜結ぶ絲薄。枯葉の尾花袖濕て。茅茨や切ぬ萱
 津の軒。軒も亂て吹風に。ひぢ笠雨の舊渡の。橋にとかゝる歩人。雲晴行ば
 夏の日の。熱田八劔逸早。恵に大鳴海瀉。干瀉も遠浦傳。天照神は星崎に。
 光も曇ぬ代にしあれば。願を滿の鹽風も。猶吹送二村山。打過ぬれば是や

此。又國越堺河。遠里遙に立上る。煙の末の一筋に。急は旅夕暮。

同中

唐衣着つゝ馴にし。着つゝ馴にし妻しあれば。都をさへに忘めや。外にのみ聞渡しを參河なる。蛛手に懸る八橋の。澤邊にさける花の色に。移安き人心を。隔て見る杜若。者武の持る矢作に取副。梓の眞弓。春の澤田を作岡の。苗代水をやらん。早藤澤に懸ぬる。宮地の山中中々に。問ば遙き東路を。渡津かけてみ渡せば。新今橋の今更に。立歸る橋柱を。嵐の音も高足山に。閑冷立る一松。眞下を見下ば鹽見坂。水はるかに連て。眼正に穿なむとす。濱の砂はかぞへても。白州が崎に居鷗。入海遠き濱名の橋。渚の松が根年を経て。誰主ならば不審。朽ぬる泉郎の捨船。岡部の若草春と云ば。引馬もさこそは斯らめ。水鳥の下居池田の薄氷。とけて臥られぬ旅の。夢さへうとくや成ぬらん。佐夜の中山長經ば。命の中に又も越なん幾秋と。君が疎

千とせを菊川の。流も久し大井河。歩より渡ば前島の。岸邊に浪寄藤枝を。手折や挿頭の花ならん。手向の袖の追風に。靡は神の木綿四手。

同下

山は青巖の形を。誰かは削成けん。巧に知れて。幾年月をしる谷の。磯路に凝敷岩根の。岩根傳薦蚊懸。宇都の山現とや云む夢とだに。思も敢ず昔みし。人にや都へ言傳む。書遺文の手越こそ。猶も心の泊なれ。今夜は是所に臥ぬる夜の。未夜を籠て芥家鶏の。鳴別ては背河の。背をば何所遣ぬらむ。彼昇遷橋に。肥たる馬に乗ずば。此高橋も渡じ。故郷も同じ月ながら。光は清見が關路より。向を遙に三穗が崎。磯邊の浪の立歸り。契興津の濱千鳥。跡をば忍さらめや。あとを忍も及ぬは。上宮太子の黒駒。蹄に知し不盡の峯の。其鳴澤の心地して。川瀬の水も早ければ。ふねさす棹の取敢ず。向の岸にや着ぬらん。鹿子まだらに降雪は。時しも夏とは知れぬに。早苗取

蚊ハ假借

□關字不明
司馬相如考
故事ヨリ考
ナクハ我ノ字

浮てやみゆ
るカ
何ニ伊豆チ
掛ク
問祭て旁訓
未勸

ゑるしハし
るし(記)ナ
鳥總立(ト
フサタテ)
萬葉集ニ證
歌アリ

臣ハ信(マ
コト)ナラ
ム皇不明

田籠の浦浪に。浮そやみる浮島が。原中遠行々て。抑此國は何ぞやと問榮
て。千双破神の惠の絶ずのみ。歩を運ば我も先。詣て三島の瑞籬。山又山の
雲を分て。くれば遙き箱根路の。山おろしの風も寒葦の海。吹けや氷らん。
朽残るなるゑるしをも。いざさは射てみん箭立の杉。鳥綱足柄山に。船木
伐。きるてふ山人の。入狭の道をや廻らん。是も湯桁はいざ不知。まだみぬ湯
元早河。早むる駒は大磯の。急て過る磯傳。寄來浪に袖霑て。磯菜摘て。此
泉郎の荻藻に住蟲の。我唐衣。日本には非ぬ唐の。原をば遠隔來て。鎌倉を
御輿が崎。越ては稻村稻瀬河。抑垂跡の源の。あの石清水を引導て。濁ず潔
き心以。言吉差給けむ。詞の花は櫻麻の。直を賞する榮にて。心の任の蓬
は更に有難や。御代なれば幾千年を送共。猶若宮の松に住。此鶴が岡の叢
祠にぞ。神留御座。粉楡知光の月は猶。曇ぬ政にかけをそへ。蕨蘂の禮奠の
風は又。忘ぬ信に徳を増。誠に文臣に武。皇の如にしくのみか。木と無草と

無。風のことくに靡して。賢く久敷君が代は。民の煙も稔りければ。九年貯
豊なり。

羈旅

山路に人希なり。耳に満物は。是青嵐梢に音信。野徑に煙たなびきて。眼に
遮類は。又白雲遙に聳たり。羈旅に鞭を進る。駒の振分吹亂。嵐に向曙。路
驛に鞍を解ては。野村の叢に宿せしめ。旅より旅に遷來て。花摺衣の袖の
色。結し露の情より。重き草葉の末までも。皆思出の妻なれや。凡旅客の
情。旅人の思は取々に。行も歸るも押並て。名残は誰もかはらねど。蘇武が
胡國の雁札。昭君が旅の馬上の曲。是皆餞別の色深。故郷を忍心有。かから
ずばかゝらましやは下野や。室の八島に絶ぬ煙。猶立歸りみて行。如何成
思の類ならん。草枕深行夜半の秋風に。床の狭衣宇都の宮。月に寢覺のす
さみならん。抑遙に傳聞。神護の古天應の。久しき昔とよ。照日の光を和げ

稜ハ岩稜カ

雲不明

て。塵にまじはる瑞籬に。普門を開つ。歩を運宮人の。絶ぬ誓の御注連
 繩。長契を結つ。今もかはらず呢言。勝此旅のうれしければ。幣も取敢ず
 袖に挿頭。紅葉の錦の色々に。手向て過る神垣。早霜枯の蘆沼の。氷汀に風
 冴て。閑冷さ増冬室山。音にのみ聞し計の心あてに。是や其と思奈須野の
 假枕。ただ一夜の小竹の庵も。忘ぬ節とも成ぬべき。行末はまだ我知ぬ白
 川の。關の稜踏鳴。己乗駒の爪だに浸す。名にし負淺香の沼の花籃。且見か
 らに戀しきは。猶故郷の面影。西渡月を慕ても。送る心は太に。其方の空に
 や通ふらん。雲なきは此行べき陸の奥の。終は何の旅ならん。立隔れど前
 垣の島。煙の末も隠無。見や千家の鹽竈。

留餘波

行人も留る袖も旅衣。馴來て後の悔さを。今更思ふも甲斐なくて。勝引留
 ばやと歎共。駒並て先前立は涙にて。足柄清見不破の關守徒に。肩は如何

無如或ハ無
始カ尙可勘

□闕字不明
答カ愛ハ哀
カ證歌アリ

に名のみなれや。しるても留ぬ別路に。人をば送さらめや。猶行末にも會
 坂は。有とこそきけ足引の。山より山のすゑ迄も。嶺の白雲外に頓。遠ざか
 り行ば如何爲む。

行餘波

熟とおもふも苦し入相の。兼ても名残の。をし明方の天の戸を。立別なば
 白雲の。知ずや何ぞ人心。無如の情もあだなれば。馴々て中々悔き契さへ。憂
 身を知ば晴やらぬ。涙の雨の故郷へ。又思立旅衣。袖しのうらを過難きに。
 浦山布も歸るか浪に。裳末は霑とも休む。小餘綾の急れ無に顧。肩瀨の波
 は行河の。早や三年を過ぬらん。草枕假初と念名残だに。旅臥の床の常磐
 に。濕るは別の袂なれど。終に稻葉に結ぶ露の。命の中にも忘すは。菟田の
 穠思出で。問ばいかに□らん。愛てふ事をあまたに思亂て。我黒髮の末ま
 でも。本云置し言の端の。替ぬ色の顯ば。東吹風の便にも。などかは傳の無

るべき。山越ても我のみぞ。東路はるかに宇都の山。夢にも通ふ心ならむ。

無常

眠は五更に醒ぬれば。情有爲の理を。思へば夢の他し世に。みし面影の一
 日の媚。千々の容貌も。刹那の生滅早別。幻夢影稻。乾闥婆城の變化は。諸
 執の終も無。流水歸ぬ老の波。越行末の松山の。松に齡を□ても。終には朽
 ぬる埋木の。莓の下にはたゞ其名をや残らん。若を送老の恨。老てはさら
 ぬ別の。千世もと祈人の子の。歎は憑影も無。枯葉の淺茅生と幾日は。結べ
 ば霜によはるむし。後先立夕煙。雲とやなると涙の時雨けん。哀は何も
 切なれど。取敢ざりし夕顔の。寢亂髪其ままに。短き契の終しなく。散に
 し花の玉かつら。懸てもさやは憑しに。育立けん清までも。憂かりし昔の
 形見とや。柏木の燃思の終。墓無跡にや残けん。岩根の松の若みどり。花戲
 る春の園。月に語秋の閨。身にしむ風に脆散。木の葉に替ぬ命持も。なにか

如夢幻泡影
如露亦如電
ノ意ニテ稻
ハ稻妻カ
不明契カ

清ハ情カ

花にカ

葉ノ下脱字
アルカ
□關字不明

は露の頼有む。凡三世の諸佛の勅。無常を發心の初とし。花は萌り菩提の
 樹。菓涅槃の山。さればにや證果羅漢も誓化城に留て。□寶所別命。釋尊八
 相の成道も。先其姿をあらはす。歸去來六の道に。やすらひ終ぬ身と成て。

宴曲集卷第五 附雜部下

朝

朝市テウシの榮花エイグワ盛サカリにしてや。君キミの恩オンも事コト繁シゲく。市イチを成ナスたのしレみは。仕道シドウある御ミ代ヨなれば。夙夜シツヤの功コウをや重カサぬらん。朝候アサムラヒ日ヒたけて出イデず。月卿冠グツクイカンムリをかたぶ傾け。雲閣ウンカク袂タテを連ツラるは。朝觀アサケンの其儀ソノギ式シキ。鳳闕ホウケツ仙洞センドウの春ハルの朝アサ。此朝餉コノアサガレヒに見ミそなはし。朝政アサツリゴトもおこたらず。春ハルのくる葛城山カツラギヤマの朝霞アサガスミ。かすみて出イッる朝日影アサヒカゲ。明アカるも著しるきあまの戸ト。露ツユとやいはむ。涙ナミダとやいはん歸カヘルさの。袖ソデうち拂ハラふ篠目シノメ。一人リヒト寢ネの夢ユメの名残ナノゴロなれば。おきう起憂き朝アサの床トコの上ウヘに。みるか見ひ有アリてうれし嬉きは。契チキリし今朝アサの玉札タマヅサ。除目ヂヨモクの朝アサの上書ウヘガキ。槿ハナの花ハナさく垣カキほの朝霞アサガスミ。朝置霜アサオクシモの朝アサじめり。朝居雲アサキルケモの朝アサまだ霧き。霧キリの間牆マカキの隔ヘダテは。衣キヌ々の朝アサやつら難からん。朝滿鹽アサミツシホの朝アサなきに。あ網子ご調アマる海士小船ウラシマ。朝立旅アサタツタビのゆく行末す。遠里遙トホサトハルカに見ミわたせば。

朝アサの煙ケリの。もよ競ひにはきはふ民タミのか竈まどは。さ榮かふる御代ミヨの印しるしなり。小泊瀬オホセノワカ稚武ニヒタケの尊ミコトい在ますかりき。泊瀬朝倉オホセノアサクラの宮ミヤに宮居ミヤキして。賢カシコき昔ムカシの御名ミナを留と古む。あの浦島ウラシマの子コがい古にしへも。この御時オノトキの事コトかとよ。

夕

夕陽ヒキヤウ西ニシに傾カタて。東ヒナガシに歸カヘれば。未未だ麓フミは霧キリの隔へたてつ。山ヤマより(を)遠おちの夕ユフ日影ヒカゲ。さ行合すがに暮クや終ハテざらん。松マツのゆ行合きあひの木コ枯カラシに。つ強れなき色イロをの残こしても。外ホカの木キの葉ハや時雨シメツルらん。夕ユフこ越えかゝる旅タビの空ソラ。か歎こつ方カタなき哀アハレは。夕ユフやわ分きてま勝さるらむ。夕鹽ユフシホ夕ユフなき夕波ユフナミ千鳥チドリ。鳴音ナクネさ寂びしき夕間暮ユフマク。夕ユフの月ツキに分わりなきは。野分ノワキの風カゼも身ミにし染みて。思オモヒみたれし節ナリかとよ。わ忘する。間マなく忘ワスられぬ。夕ユフの空ソラの村雲ムラクモに。猶ナホ立タチまよふ夕霧ユフキリの。籬マカキの花ハナの夕ユフじ濕めり。手折タナリし袖ソデやそ濡ほちけん。夕顔ユフガハの花ハナさく宿ヤドの主ヌシや誰タレ。た黄昏そがれど昏きの空目ソラメは。げ覺にお東ぼつ無かなく覺ぞお覺ぼゆる。夕立ユフダチの晴ハレぬる跡アトの夕ユフづく日ヒ。影カゲろふかたの方

涼しきは。雲間をわたる夕風。夕霜の晩田の稲葉うちなびき。風にたまらぬ夕露は。結もあへずみたるらん。墨染の夕の色イロのすまごき。しきみ摘山路ツミヤマチのそはづたひ。麓の野寺のはるとと。そこもみえぬ歸るさに。時しもあれや入逢イリアヒの。かねて思し有増アラマシより。猶心澄山陰オホコノスミヤマカゲの。五百イホの小田ホの夕嵐ユフアラシ。草の戸クサノトざしの明暮アケクレは。袖もほしあへぬ露ツユのまに。聲コエよりはりゆく故郷フルサトの。蓬ヨモギがツのノきりくす。暮行空クレユクソラの氣色ケシキ。誰タレも哀アハレやまさるらん。夕ユフベは脆き涙ナミダかな。

年中行事

大昊木徳の春の始。一天風のどかなり。千年をさして契は。霞イヅて出ルる朝日チカヒ影カゲ。四方拜ハツハヤイ小朝拜コチウハイ。あの白馬踏歌ハクバタウツカの節會セチエの儀ギ。子ネの日ヒの松マツを引ヒキてこそ。君キミがハ齡ヨハヒを祈イノリけれ。春日平岡カスガヒラノカ率河ソノカラカミ。園韓神大原野オホハラノ。此コノ日々ヒを定サて神事カミコト。皆二月ミナキサラキの事コト也。魏年ミカシの昔ムカシのなみ。周旦曲水シウタンクスイのふるき風カゼ。絶ぬ流タガレを留トメて。あまねきは是桃コレタウ花水クラスイホ。鶴ツルに乘ノリし仙人ニンの。花ハナにあそびし茅君洞オヨソノ。凡世間セケンの美景ビキは。春三月ハルサンを賦グツ

定て内閣本
さだむるニ
作ル

巧ノ字内閣
本ニ據リテ
補フ
本肩ニ作ル

せる詩。中天竺の藍毘園。卯月の八日は佛生日。其神山カミヤマのもろろかづら。誰タレか憑タノミをかけざらん。曙雲シヨウウンの外ホトの郭公トクキミ。鳴ナクや五月イツキのあやめ草アヤメクサ。長ナガキためしに引ヒキるは。郁芳門院ウツクハウモンケンの根合ネアヒ。六月ムツキの瀬セの聲コエの。晴ハレの雨アメに似ニたりしは。高山樓カミヤマの北キタの。此コノ暢師チヤウシが住スミし禪房ゼンボウ。螢火エウボウのかがやく神カミと。五蠅ゴエウなすあしきかみとを平ヒラげて。河瀬カハセにながす木綿幣キヌヌベ。歸カヘる袂タテに吹フク初ハツて。涼アヒしき秋アキの初風ハツカゼ。年々トシトシ渡天ワタルアマの川カハ。雲井クモキの庭ニハの乞巧キコウ奠デン。立宗皇帝タチムネミカドの。楊妃ヤウヒがかたちにかゝりて。比翼ヒヨク連理レンリと契チキリし。驪山リサンの昔ムカシぞゆかしき。秋アキの最中モトナカのかひありて。月ツキに心ココロのあくくがる。陽ヤウ明門メイモンの一廻イツクワイ。詩歌管絃シカクワンケンの遊アソビあり。都ミヤコの南ミナミに男山オトヤマ。神カミの誓チカヒの放生會ハウジヤウエ。上卿參議シヤウケイサンギ辨官ベンカン。諸衛シヨウエイの佐サまで供奉クワンブしけり。九日クニノカの宴エンは年トシふりて。久ヒサしき菊キクの盃サカヅキ。十三ジュウサン夜ヨの佳明カメイは。延喜エンキよりぞ傳ツタはる。神無月カミナヅキ十日トウジツあまりの比ヒなりし。朱雀院シヨウヤクイエンの映行幸ギヤウガウ。紅葉モミヂの色イロにうつろひし。青海波セイカイハの舞マヒの袖ソデ。朔旦サクタン冬至トウジツの敍位ジヨウイの儀ギ。五節ゴセツの舞姫マヒメの參マヒの夜ヨ。辰ツチの日ヒの節會セチエは。豊トヨの明アカリも面白オモシロや。月次ツキナミ神カミ今食イマシキ。内侍所ナイシドコロの

御神樂。あの雪も月日も積年。送迎ていく代共。此猶限ぬは。我君の御代なりけり。

山

五天竺國震旦國。浪をへだて、百萬里。其地はいづくもしらねども。傳て聞山々は。鐵圍山須彌山。王舍城の耆闍崛山。此觀世音の補陀落山。文珠の在。まします五臺山。悉達太子の修行せし。阿私仙人が檀特山。崑崙玄圃節風山。瀑布の泉は天台山。海中五の神山は。龍伯人につられて。蓬萊方丈瀛州の。三の山こそ残けれ。秦皇帝のやどりしは。泰山五株の松の陰。漢の武帝の上しは。萬歲呼崇高山。李將軍が隴山。嚴子凌が富春山。淮陽山の一老。商路山の夏黃公。匡廬山の杏。羅浮山の橘。紫容山の白雲。銅梁山の翠黛。元和九年の秋八月。この上弦白樂天のあそびして。玉順山ぞゆかしき。我國秋津島には。東山山陰山陽道。國々の名山。山又山の青巖。天武天皇大友の

高ハ衍カ

として疑ハシ

皇子を恐れて。芳野山に入給。清和天皇は。十善の寶位を振捨て。水の尾の山に住給ふ。前中書王の小倉山。惟尊の御子の小野の山。宇治山喜撰法師。花山の遍昭僧正。室の戸ふかき北山。この御門の西山。神社の勝て尊は。男山賀茂山稻荷山。春日熊野山。靈寺の殊きこゆるは。泊瀬山石山。比叡山書寫の山。弘法大師の入定は。紀伊國高野の山の奥。さても東の方にこそ。名高き山は聞なれ。相坂不破の中山。佐夜中山高足山。都良香が記をつくる。駿河の國の富士の山。在中將がふみ分し。宇津の山邊の蔦かえて。あしがら箱根の山こえて。道あるときの賢に。鎌倉山の榮ゆく。君御代こそ目出けれ。龜谷山巨福山。大樹營の幕府山。家の匂も紅葉々も。いつも常磐の色ながら。嵐の聲も月影も。いく萬代を契らん。

草

聞もやさしきさいたづま。春緑と。夏野の草の葉をしげみ。秋百草の色々。

家ハ花カ

さいたづまハ虎杖ナリ

すぐるの薄
合類大節用
集ニハ墨黒
薄ニ作ル
天門冬和名
抄ニ須末呂
久佐ト訓ス
菰不明歌謠
類聚ニ據ル

楓草ハ月草
(鴨跖草)ノ
假借

冬はさびしき枯葉にて。とりくくなる中にも。先は雪間の若菜卵杖つき。
摘まほしきに春日野の。飛火の野守出て見よ。すぐるの薄角ぐめば。駒い
ばゆなりや粟津野に。ほどろと折は早蕨よ。とりたがへたるはすまふ草。
あまのとの冬やこれならむ。御生所の葵のかつらと。五月に軒端に蓬あや
め草。五月雨すればしほたれぬ。いつかりほさん眞菰草。小菅の笠のひま
もがな。早苗を急ぐ御田屋守。若苗とらんさをとめ。かの岡に草苜をのこ
しかなかりそ。有つゝも君がきまさん。御馬草まうけんにせんやな。奥山
の岩本小菅ねふかめて。思ふ心よ君がため。色どり衣する楓草。うつろひ
ぬるか何の間に。人の心は秋の露の。色々ををけげこそ。千種もひもど
け。さいたる花を手にとりて。かきかそふれば七種。萩のはな尾花葛花な
撫子。このはなをみなへし藤ばかり。たゞ借初に結ぶちぎりかは。小野
の草伏草枕。あだなる馬の草ぐき。あの壁におふる草の名の。いつまで草

君の君たる

上下

のいつまでか。古屋の垣にしげらん。瓢箪屢空ければ。此又げにさは。草顔
淵が巷に滋かんなるものをな。何とかや忍には非ぬ草の名に。軒端にしげ
るわびしさ。かき絶ぬるか水莖の。岡邊のまくす恨ても。良枯まさる冬草。
上下
上として哀むは。君たるおもひなり。下として仰ぐは。あの臣の臣たるみち
とかや。かたじけなくもすべらぎは。雲上階下の御名にいます。天地もこ
れを司どり。あらゆる世の態。皆上下の字に治まる。先は青陽の始に。此
上の子の日を定て。若菜を奏する政。下の卵の日は。必卵杖を獻ずとかや。
或は上東上西門。上鸞樓。上の戸上の御局。或は殿上の下侍。此掃部寮に仰
て。垣下の座を敷なるは。臨時の祭の庭の儀。上達部のなみ立て。連ぬる袖
の色々に。思々に手折は。かざしの花の下枝。晋の王羲之が垂露の點。書流
しけん水莖の。上下の字に任つゝ。逆卷浪の立歸る。にこらぬ泉のながれ

赤人不明歌
謠類聚ニ據ル

は。げに有難かりしためし哉。齊の威王は。隣國の民に禮をなし。我座の上
 をあたへき。孟嘗君が砌には。三千の客を賞しつゝ。わが座を下にあらた
 む。文集の調はひろけれども。上下の巻につゞまやかに。柿の本のまうち
 君を。上とも更に云難く。此赤人を下とも定ざりける。古今集を撰れ。千歌
 甘卷なれども。上下に是を分たる。内外の縑細おほくは。此字に卷を名付
 也。光源氏のわりなきは。若菜の上下なりけり。あはれをかけし小萩がも
 とに。露置そふる雲の上人。下人して問けるは。伊勢より須磨の便とか。家
 々に替て引は。ひらやなぐゑの上帯。人にしられて解なるは。契を結下帯。
 うはものすそ下重。袖のうは露の下ひもの。せきとめがたき涙を。上には
 つゝむとすれども。下には通ふ思の色を。誰かはとがめざるべき。吹下嵐
 の山の麓の。其水上はとなせの瀧。筏を下す大井川。下は名に流たるや久
 方の。月の桂の川淀に。影さえわたる冬の夜。岩間傳にわき歸り。下行水も

口ハ術カ

うへこす浪も。氷をくだく心地して。拂もあへぬあし鴨の。上毛の霜は結
 べども。をのが青羽はつれなくて。つらゝの下にや朽ぬらん。入江の波の
 下草。抑上は三世の諸佛。下闡提に至まで。上求菩提の月の光。下又衆生に
 影をたる。されば兜率の雲の上を分。彌勒の下し阿輸舍國の。輸闍那講堂
 の御法をも。上古無著世親と。此護法戒賢論師より。下末代に傳る。如來は
 金剛座の上。あの菩提樹下を定て。正覺をととなへ給ふとか。

心

明王孝をもて代を治。功臣忠あれば國を守。忠孝ともにいさみある。心を
 前とするや。是周公孔子の教ならむ。壁に納し箱の底。ふかき心は玉くしげ。
 明暮心を整つゝ。百鍊くもらぬ政。凡心を法として。心すなほに仕れば。賢
 き御影を仰つゝ。あまねき雨露の恩をうく。されば戴淵心をあらため。周
 處思を翻す。誠なる哉。彼是同心を直からしむ。綠竹紫藤の春の雨。黄葉

前内閣本先
ニ作ル

誠内閣本實
ニ作ル

節内閣本折
三作ル
蛙内閣本蝦
三作ル

は木々内
閣本母木々
三作ル

心内閣本意
三作ル

身づからぞ
カ
道カノ行
カ内閣本無
シ
諸徳内閣本
諸法トアル
ニ從フベシ

梧桐の秋の露。皆節をしれる情有。誰か心なしといはむ。いはんや花に木
 傳鶯水に住てふ蛙の聲も。其心を動す理あり。いざやさは心づからの
 色もみむ。移ろふ花をばよきてふけ。治れる御代の春風。その原や道に綾
 なく迷ひつゝ。心をしらぬは、木々に。さまぐなりしあらそひの。上品
 上より下れる品のしかすがに。此七夕の手づかひ賢き態までも。猶捨はて
 ざるたぐひなれば。心を前とや撰けん。抑心を徳として。其形みにくかり
 しかど。賢女のきこえ有しは。彼梁伯鸞が孟光。項羽が勇める兵。勢おほ
 しといへども。陳平張良が。心の道にはせかれき。此山は關に心をかず。海
 又浪おさまる。かゝるのどけき御代なれば。心に愁ふる事もなし。戀ぞ心
 に任せねば。おり立田子の身づからと。かこたむかたも覺ぬ。よしさらば
 思はじ。よしなしとにかくに。心ひとつの心なれば。心のほかの法の道か。
 筏の棹のさしてしも。げに彼岸をや求べき。諸徳は意識のなす所也。心地

真内閣本信
三作ル
悟内閣本覺
三作ル

あらはすカ

かれハヤナ

觀經心地品。あの般若心經心月輪。心の眞を悟えてぞ。是等の御法もくもり
 なき。

顯物

佛陀の善功方便は。あの慈悲の實を顯す。賢人の忠を顯すは。此國の政によ
 る。政陰ねば。明王の徳をあらはる。詞をのぶる筆跡は。思の色を顯す。ぬ
 ぐ沓又かさなり。いもりのしるしも隠無は。あだなる契をあらはす。いか
 でか顯ざるべき。筑磨のなべの敷やれ。螢をつゝむ袖の色。款冬の花色衣
 のたもとにも。涙は顯れけるや。思ふ心も淺からず。淺緑の薄様の。いとし
 みふかき玉章の。あらはれ初ししとねの下。此柿の紅葉をながしけん。其
 水莖の行るも。火とりをかつけられしわざと。うつ蟬のもぬけの衣も。終
 には主をしりにき。衣の裏に顯しは。一乘無碍の玉とかや。

酒

□ハ衍カ
あらはひし
もカ

酒に名徳の譽あり。しかも百薬の名を獻ず。萬年を延る翫び。皆情を催す
中だちたり。花の春の木の本には。歸らむ家路も忘れ。紅葉の秋の林に
は。酒をあたくめて日をくらす。南樓の秋の夜もすがら。光をさしそふる
盃の。かたぶく空を猶したひ。香爐峰の雪の朝。簾をまきあげて。誰かは是
を勸さらむ。されば唐の太子のひん客も。あの酒功讚に徳をのべ。晋の劉伯
倫は又。常に一壺の酒を持し。戰場に望ても。勇める色にはこるとか。古徳
もおほくあひらしき。賢人もさすが捨ざりき。いはんや興宴の砌には。な
んぞ必しも。人のすゝめを待んや。身づからこの邊によらむ。鸚鵡盃のた
はぶれ。みな其昵なつかし。酒の香はしきのみならず。誰かは徳にきせざ
らん。百敷には酒殿。酒司の事態。酒をたうべてとうたふなるは。催馬樂の
歌の詞なり。樂には酒胡酒清子。皆舞曲は無れど。飲酒等勅を重とも。猶輒
からずきこゆる。胡飲酒の曲ぞすぐれたる。孝行の實をあらはれしも。養

支字去ニヤ
トモ疑ハル

老の瀧のいにしへ。いかなる酒のながれならん。げにありがたかりしため
し哉。
老ラウの瀧タキのいにしへ。いかなる酒サケのながれならん。げにありがたかりしため
し哉。
例

扇ハ祠ハホ
コラカ

遠立

凌雲臺の春の霞。浪を凌て幽々たり。高樓の秋の月。霧へたて瑤々たり。
遠きは雲の外なれや。青嵐遙に音信て。曉の夢すさまじ。遠く往事を思へ
ば又。あの堯女扇の春の竹。いくよの昔を重ぬらん。除君が塚の秋の松。三
尺の霜ふりんたり。波の上に幽なる。此漁舟の火の影は。旅泊の哀や増ら
ん。□旬鶴が監江徑に宿せし夜。山を過る驛路の鈴。ね覺の枕に遠ざかり。
然。さこそはさびしかりけめ。山より山を隔るは。峯より嶺にかゝる雲。とを
里。さと小野のみちとをみ。行かふ人や稀ならん。遠津浦はにやほのみゆる。
蘆。あし分小船のさはりおほみ。浪は高津の難波がた。行末遠き磯傳。尋ばや
未。まだ我しらぬ。遠山鳥の遅櫻。青葉にまじる一枝は。春のかたみにのこり

杜荷鶴カ
監江徑ハ臨
江驛カ和漢
朗詠集參照

□関字不明
きて此くカ

たり。思へどもいはでの關の戸さしき□。□くつれ無は。遠ざかり行人心の。おくにありてふみちのくの。忍の里ぞはるけき。

閑居

廬山の雨の夜の。草庵の窓の灯。かゞげ盡して懷舊の。涙を催すは。夜を殘ね覺の曉。夢か夢にあらざるか。くらきよりくらきを厭こし。實の道のしるべは法の教にて。厭離は穢土の春の花。他成かや匂らん。欣求は淨土の秋の月。陰らぬ影をや照すらん。聞も浦山布ゆゝしき。あとは流沙を隔り。月氏の外の嶺に近き。震旦の中にも勝ておほゆるは。釋尊説法の耆闍崛。沙羅林の雙林。鹿野苑。三世覺母の般若の室。解脱の風も涼しきは。清涼山の竹□。終南山の月の光。悟眞寺の水にややどらん。瑤池の正觀便を得て。さこそは心澄けめ。閑居は大原小野の里。芳野の奥小倉峯。喜撰が栖し宇治山に。優婆塞の宮の移ろひて。うき水鳥の音になきし。その面影の今

□関字不明

もるハト
(シム)るカト
□関字不明
穗ナドカ

更に。又立歸る哀は。川瀬の波にやそぼちけむ。人に知れぬ山陰の。岩根をもる松の門。さすや岡部の夕づく日。ほのかにみゆるすゝきの□。しのに露ちる篠の庵。誰又爰にふし柴の。しばし夜をも明さん。手向る花の花かつみ。且みる人も稀なれば。ひとり念誦のや聲澄て。例時散花梵音。例時散花梵音。九條の錫杖。深山をろし瀧の音。涙を催す便なり。空山にさけぶ猿の聲。梢のよぶこ鳥やな。目にふれ耳に遮る類。あはれをそふる住家也。

閑居釋教

狂言綺語のあやまちをも。漏さぬ御法は在明の。月待程の手すさみに。結し水の淺より。深きをいかでか□くしらん。寂寞の夢の岩戸のしつけさに。倩思つゞくれば。衲衣のたもとを潤す露の。適かゝる身を受て。誰かはこゝろを瑩ざらん。繩床正にうけぬとも。空布眠事なかれ。兎に角に何かは歎く何か思ふ。此眞如外にあらざれば。身を捨ていつくを尋ん。空假の二

□関字不明

圓宗カ山寺
ノ曲ニ一乘
圓宗ノ英ノ
語アリ

震のハ振鈴
のハ

峽ハ巴峽カ

速ハ迹カ

□闕字不明

の中なる道。圓頓圓□の花の色。初縁實相の匂ひをほどこす。春風心深。空
 寂の空晴て。のこれる雲の跡も無。煩惱眠はや覺て。後夜の成道に異なら
 ず。曉ふかさ震の。をとすみ増る峯の嵐。窓打雨のさめくくと。老の涙を催
 すは。僧年ふりぬる念誦の聲也。峽の哀猿の三叫。栖ばすまる心なれば。
 山陰ふかく結庵に。谷の岩かど踏ならし。闕伽汲水の絶ずのみ。流の末も
 濁なき。水上清き法の水に。光を浮べて陰無。秋八月の月影。霧をかけしい
 にしへ。なを昨日の夢の速ならむ。抑さてもあらまほしく。浦山布類は。須
 陀□斯絶舍阿那道阿羅漢果。菩薩の位を證すとも。此獨處仙林阿練善。樹
 下石上の住家也。

宴曲抄上

熊野參詣

八相成道の無爲の城。眞如の臺は廣けれど。和光同塵の月の影は。やどら
 ぬ草葉やなかるらん。さればや景行賢御代の事かとよ。南山の雲に跡を垂
 て。星を連ぬる瑞籬に。誠の心をみがきつ。誰かは歩をはこばざらん。或
 は五更に夢をさまし。夕陽に眼を除て。煩惱の垢をやすくくらむ。宵曉の
 去垢の水。所をいへば紀伊國や。此無漏の郡彦の山路の。雲の濤煙の浪を
 凌て。思立より白妙の。衣の袖を連つ。都を出道すがら。あの北に顧れ
 ば。又大内山は霞つ。へだつる跡もとをさかり。淀の河舟さしもげに。急
 とすれど在明の。名残はしるて大江山に。かたぶく月やのこるらん。行末
 をはるかに美豆の浪よする渚の院。此男山につゞける交野禁野の原。向の

城京都本都
ニ作ル

あの京都本
かの京都本
願レバ京都
本歸みれば
ニ作ル

しむ下阿類
従本及下阿
波本共ニ錯
簡本據リ京
訂正ス

ハマホシキ
所ナレド諸
如本本文ノ
なをノな京
都本阿波本
フニ據リテ補

歌京都本哀
ニ作ル
柳京都本楠
ニ作ル

坂をこえてやすらへば。手向の王子の御注連繩。なをくりかへし願。渚に
つゞく和歌の浦の。干潟に並立る。蘆邊の鶴も鳴わたる。汀にくだくる空
貝。浪に沈める玉柏。玉津島の明神。玉藻の塵にまじはりて。吹上の濱の濱
風も。神冷まさる音涼し。夏山のしげき軒端に薰橘。本の家主や袖ふれし。
さもなつかしき夕風。梓弓入狭の山の鎬坂。分くる山路はしげけれど。流は
かはらず在田河。々より遠や名草の濱。々路はるかにとをければ。ほのみ
の崎をやへだつらん。青柳の絲我の山のいとはやも。はこぶ歩の日を経て
は。道もさすがにしられつ。湯淺の王子がうのせ。由良のみなとも程ち
かく。紀路の遠山行廻。鹿の脊の山名にし負。鹿のしがらむ萩原。寶富安千
年ふる。様にひかる。小松原。愛徳山をばよそに見て。永高の河の川岸の。
岩打越浪よする。浦路にかゝれば愁を。垂る鹽屋の神なれや。此いなみ班
鳩切目の山。惠もしげき柳の葉。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

田の部京都
本田部ニ
作ル

田頌京都本
田面ニ作ル

水の上海本
本阿波本共
シルニ從フベ

頼母敷京都
本阿波本共
ルニ憑敷ニ作

南無日本第一大靈驗熊野參詣

秋の夜の曉深立こむる。切目の中山中々に。月にこゆればほのくくと。天
の戸しらむ方見えて。横雲かゝる梢は。そも岩代の松やらん。千里の濱
をかへりみて。皆へだてこし道とをみ。万山行ば萬の罪きえて。今はや出
立田の部の浦。砂地白くみゆるは。白良の濱の月影。陰ぬ御代は秋津島の。
神もさこそは照すらめ。萬呂の王子の神館。見すぐし難き稻葉峯。穂並も
ゆらとうちなびく。田頌を過て是や此。岩田の河の一の瀬。きゝのみわた
りし流ならん。倩其水の上的。深誓をおもへば。浮たる此身のさすらひて。
無始の罪障は重とも。さも消やすき泡の。哀あひがたき道に入ば。岩こ
す浪の玉とちる。涙も共にあらそひて。幾瀬に袖をぬらすらん。山河の打
漲て落瀧の尻。渡せる橋も頼母敷。彼岸につく心ちすれば。誰かはたのみ
をかけざらむ。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊。

南無飛龍權現千手千眼日本第一大靈驗

善行寺修行

濱ノ下類從
本阿波本共
ニ錯簡アリ
京都本ニ據
リ訂正ス

信濃の木曾路。甲斐の白根。思を雲路にはこばしめ。旅客の名残。數行の
涙。情を餞別の道に顯はす。穗屋の薄のほのかにも。伏屋に生る。筥木を。
有とばかりもいつか見む。吹送由井の濱風音たて。しきりによする浦浪
を。なを顧る常葉山。かはらぬ松の緑の。千年もとをき行末。分過秋の叢。
小菅苜蓿露ながら。澤邊の道を朝立て。袖打拂唐衣。きつゝなれにしとい
ひし人の。干飯たうべし古も。かゝりし井手の澤邊かとよ。小山田の里に
きにつらし。過こし方をへだつれば。霞の關と今ぞしる。おもひきや我に
つれなき人をこひ。かく程袖をぬらすべしとは。久米河の逢瀬をたどる苦
しさ。武藏野はかぎりもしらず終もなし。干草の花の色々。うつろひやす
き露の下に。よはるか蟲の聲々。草の原より出月の。尾花が末に入までに。ほ

巽明京都本
在明二作ル

さびしく京
都本冷敷
(スバシク)
ニ作ル

のかに殘晨明の。光も細き曉。尋ても見ばや堀難の。出難かりし瑞籬の。久
跡や是ならん。あだながらむすぶ契の名残をも。ふかくや思入間川。あの
此里にいざ又とまらば。誰にか早敷妙の。枕ならべむとおもへども。婦に
そはずのもりてしも。おつる涙のしがらみは。げに大藏に槻河の。流もは
やく比企野が原。秋風はげし吹上の。梢もさびしくならぬ梨。打渡す早瀬
に駒やなつむらん。たぎりておつる浪の荒川行過て。下にながる。見馴川
見なれぬ渡をたどるらし。朝市の里動まで立さはぐ。是やは兒玉玉銚の。道
行人に事とはん。者の武の弓影にさはぐ雉が岡。矢並にみゆる鐺河。今宵
はさても山奈越ぞ。いざ倉賀野にとゞまらん。夕陽西に廻て。嵐も寒き衣
澤。末野を過て指出や。豊岡かけて見わたせば。ふみとゞろかす亂橋の。し
どろに違板鼻。誰松井田にとまるらん。

同次

號京都本阿波本共二作
そは傳京都本阿波本共二作

京都本道行
ぶりに二作

楚交京都本
違(ソカヒ)ニ作ル

野邊より野邊を顧て。野外の煙片々たり。山より山に遷來て。重山はるか
によち上。雲雀は翅を雲にかくし。哀猿は號で霧にむせぶ。苔踏ならずそ
は傳。向へる尾上の盤折。椎柴慘柴檜柴に。枝さしかはす白樫。かぶろなる
樹するどなる。楨の立枯陰さびし。岩間に漲る瀧の音。巖洞に響松嵐。取
々なる哀は。山路の旅の秋の暮。青葉こそ山のしげみの木陰なれ。いざ立
よりてかさしとらむ。一むら雨のやすらひに。まだ染やらぬ紅葉はの。薄
紅の白井山。おもふどちは道行ぶりもうれしく。いかでわかれなむ離山
の。其名もつらし過なばや。雲間にしるき明方の。淺間の煙にまがふは。高
根にのこる横雲の。跡よりしらむ篠の目。日かげのどけく水葱の松原。遙
々とへたつる方や葛原の。里より遠の程ならむ。深さはしらす櫻井に。花
の白浪散かゝり。霞める空ぞおぼつかなき。望月の駒引かくる布引の。山
の楚交にみゆるは。海野白鳥飛鳥の。飛鳥の川にあらねども。岩下かはる

普京都本阿波本共二作
波本ニ據リテ補フ

太山京都本
深山ニ作ル
名たるノ名
京都本阿波
補本ニ據リテ
べきものも
京都本はニ
作ル

落合や。淵は瀨に成たぐひならん。富士の根の姿に似たるか鹽尻。赤池坂
木柏崎。同雲居の月なれど。何の里もかくばかり。よも佐良科とみゆるは。
姨捨山の秋の夜。筑摩篠の井西河。さまざまの渡を越過て。既に彼所に詣
つ。倩思つゞくれば。かすかに傳聞。西天月氏の古。信心の窓を照して
は。三尊光を並つ。紫磨金の尊容。東土日域の今。眼前結縁絶ずして。利
益を普施す。かたじけなくも十萬億刹の堺を過。妙覺果滿の臺を出て。粟
散邊地を尙捨す。濁世の塵にまじはる。故有哉や本願の。あの難化難度の誓
ならん。

道

道の道たるは。常の道にはあらざれば。跡なき太山を踏初て。尋やせまし
花櫻。名の名たるべきも。此常の名にはあらざれば。明行月のほのかにも。
待れてぞ名謁郭公。孝悌仁義禮忠信。分てもなぞやわづらはしく。是を一

上徳の阿波
京都本阿波
補本ニ據リテ

字引ニ集韻
ナ作キテ糾
或京本ハ
假名ニテ書

に惣成て。要道とたゞにやすくいはん。三皇の昔も昔なれば。少昊の道を
 ばしらじ。はや五帝の遠もとをからじ。大同の門をや尋まし。身こそ憂世
 にさすらへども。心を虚無に任つゝ。むなしき空を詠れば。たゞ秋風の過
 る聲に。妙なる響のある故も。橐籥のためしなるべし。上徳の濁は誰かし
 らん。夕立過る谷の水。大白のけがれはさもあらばあれ。村雲かゝる秋の
 月。いへば執着恐あり。いはねば無明に落ぬべし。すべて此世の有様は。
 思さだめん方もなし。たのしむ時は樂もあり。愁ふる時は苦ともなる。野
 原に馬を失て。いと愁ざりし老翁。籬の蝶を夢にみて。こはうつゝとおも
 ひし真人。糾れる繩とけやすく。昨日の山に今日の海。深もおもひしづま
 され。浪路のどく浮る世に。たかくもおもひ登され。山路は苦しき坂なれ
 ば。あだに結ぶ蓬が庭の朝露の。宿をいつも捨やらで。此名利貧心たえず。
 槇立山の夕日にも。子をおもふ闇路は晴やらず。いはんや陰陽の道ぞげ

ぞくヨリ
類本脱マ
阿波京都本
補本ニ據リテ

實京都本誠
ニ作ル

に。哀といふもおろかなる。或はなく音を忍わび。涙ゆるさぬ袖もあり。
 或は別に又寝して。かたみをしたふ夢もあり。涙も我をすつるやらん。お
 さへんとすればわざともる。夢路も我をまよへとて。さむる枕は跡もな
 し。戀しやなこひしくのこの葉は。我言種にいひなれて。馴よとおもふ
 面影の。などかくよそに成ぬらん。やらこは何事の様ぞとよ。此世縁俗念
 ふつと捨てば。散亂塵動も止めべし。世にたゞしき聲なければ。あの是にもあ
 れ非にもあれ。耳に悦を聲と聞。物に實の色なければ。邪ともいへ正とも
 いへ。目に悦を色とみて。中正通知の身とならば。酔ても醒ても聖ならむ。
 此事金玉にまされり。醉吟先生が心なり。江南の屈平よしなしや。林下の
 劉伶たよりあり。人間の榮利をば。泥塵の如輕して。枕の上の仙となり。無
 疆の郷に入なんぞ。賢道とは云つべき。

十六

古京都本
二作ル本
天の波本
本阿波補
フニ

折京都本
波本共ニ
二作ル節
阿

人に定れる盛有。十六を以て盛年とす。物に必故有。數十六に徳おほし。粟
 散廣しといへども。先は十六の大國。々又無量にきこゆれど。天照日次を
 受傳。古ぬる磯の神代より。天の逆鋒を立初し。我國は賢境なれば。人代
 十六の皇。應神の御宇の榮より。色々の寶を送りつ。百濟經典を奉。芳
 野の國栖を奏せしも。此御時にはじまる。其より又十六世。用明の陰らぬ
 御代かよ。厩戸の王子世に出て。終に法燈をかへ給ふ。則逆臣を平
 しも。十六歳の時なりき。累代の善政は。折にふれ時にしたがふ。踏歌は正月
 の十六日。霰走の節會は。和暖を奏る政。朱雀は明主の譽有。御在位十六年
 の間。さまざまの政徳を施す。御手洗河の瑞籬に。鳳輦光をかやかし。
 轅を北に廻しめ。又男山の峯には。大宮人の頭插折。歩を南に運つ。雪を
 廻す花の袂。山藍もて摺れる衣の色。並立る袖もうちみたる。求子駿河
 舞の其品。勝に故々敷ぞおぼゆる。東遊の追風。々おさまれる御代なれば。

廣京都本
波本共ニ
ルニ從ベシ
知本共ニ
波本共ニ
トアルニ
フベシ

觀蜜京都本
作ルサツ
又ノ下京
本阿波本
據リ第ナ
フ補ニ

なびかぬ草木やなかりけん。十六拍子の舞曲は。三臺鹽團亂旋。此陵王の
 半帖よりの亂拍子。取々なる曲なり。源氏のわりなき節には。十六乙女の
 巻とかや。古世の友よはひ經て。神冷まさる天津袖。豊の明の面影を。いつ
 かは思わすれん。紅顔の粧にほひやかに。花の容貌妙なりし。上陽人が
 古も。參し時は十六。三千の鍾愛の其中に。十六人を撰て。猶又勝たりし
 は。光明夫人摩尼仙女。二人の嬪を調て。三十二相とさこえしも。各一十
 六かよ。抑遣教流布は皆。十六羅漢の擁護なり。大通知勝の往年。二八
 の王子の末なりし。第十六の王子も。今の釋迦牟尼如來是也。壽量は第十
 六品。如來の久遠を演らる。般若の十六善神は。文殊の利劍いちはやく。覺
 母の梵筐を圍遶す。彼土の相を修するも。十六の觀蜜にしくはなく。遠離
 不善の願も又。第十六に當とか。十六の章段を連ては。淨土の宗旨を顯は
 す。末代濁世の根機には。是又要路とこそきけ。十六丈の盧遮那佛。我朝第

故ある京都
本波本共
ニ故ある
作ルなる

雙六

一の大伽藍。外朝にも並なし。迷盧は十六萬由旬。十六丈の寶塔も。皆故ある物をな。かたじけなくぞおぼゆる。一字頂輪王の三摩地後十六生。菩薩の十六分の種姓は。正覺の月圓に。残れる限はなけれども。蜜教の嶺はるかなれば。顯乘の雲をやへだつらむ。

あの京都本
ニ據リテ補
フ類從本阿
告類從本阿
波本共ニ各
本ニ據リテ
訂ス
酬ノ傍訓ハ
京都本ニ從
率類從本阿
字ノ形ナ成
セドモ明カ

夫雙六の基は。遠西天の古より。近く東土の今に至。傳て絶ざる翫。様々の品を顯はす。穆王も是を興じつ。井公とたはぶれ給ひき。されば孟嘗君は。あの咎を酬理。犯を辜諭とす。是を陰陽に掌。盤の局をきざみては。此十二廻に象。かるが故に則其名を双六とよぶとかや。三十石を並ては。黑白月の一廻。十五の石を分立。賽に又十二の目を定。十二時に擬して行度有。筒の中をば夜とし。外に出ては晝とす。倩其風を思とけば。勝負を互にあらそふ様。世のわたらひの端も皆。浮も沈もとにかくに。あざなは

ナラズ京都
本ニハ古年
トニハ固ヨ
リ從ヒ難シ
タリ其傍訓
ニナツ
假名チ送レ
トヨリ率字
ト推定ス
局京都本阿
波本共ニ面
ニ作ル
きざみてノ
波本ニ據リ
テ補フ
口ハ術カ京
都本阿波本
無シ
擬京都本ニ
據ル類從本
不明
阿波本共ニ
京平王ノ平
京本據リテ
補フ
およぼしめ
都本及しめ
ニ作ル
競テ京都本
ニトアルニ
據リテ訓ス

れる繩の一筋に。思さだめん方ぞなき。凡此道に名を得たりしは。殷の目楊と漢の蘇師慶子。豹の劉平王。此宴賀道虚豊藤丸。此等は雲煙の浪の外霞をへだてし古なり。我朝の近比。道々に長ぜる人を得給。一條の院の御宇とかや。主殿寮に侍し。丹治の比手勝は。双六の譽世に勝。名を又異朝におよぼし。藝を化人に感ぜしむ。時は南呂無射かとよ。此正に長夜もすがら。獨明月にうそぶき。大内山に木隱。彼方此方にさすらひて。右近の馬場を行過。縁の松原にたゞずむに。松嵐梢に冷敷。蟲の音叢にしげくして。五更に夜閑なりしに。松の上に聲有て。汝が好長ずる道を感じて。昔の殷の目楊。今こゝに來れり。恐るゝ事なかるべし。雌雄を決せんと望しかば。比手勝更に恐ず。則勝負に向て。はるかに時をうつすまで。數を競て良久し。夜既に明なんとせしかば。日比の執心是なりと。慙にかたらひを成つ。紺碧瑠璃犀角の。調度をかたみとおぼしくて。天の戸の明行空の横雲に。

いずへ京都
本ぞへニ
作ル

叶ハ叩カ塵
添盛抄ニ
ハ扣子ニ作
居ハ据ノ假

のこひが不
詳ニ「マカ
彌訓アルカ
ノ訓アルカ
聖彼類從本
正シカラズ

入にし事ぞ不思議なる。中にもやさしくおぼゆるは。光源氏の方違に。其
 かとばかりの垣間見に。湯桁の数もたどくしからず。三十廿四十とかず
 へし碁の。うちある翫も故々敷。いづ方と思分ざりし。移心ぞ透々敷。移菊
 の紫の。ゆかりの色も淺からず。御碁の相手召て。一枝手折し薫の。思心や
 故ありけん。近江の君の双六ぞ。最太なるこの葉の。様殊なりし態ときく。
 抑博奕品々に。謀計術を究つ。あの語條言を盡せり。五四尙切目振返し。
 相見立人品態。四三小切目の。一六難の吳流。叶子平賽の接馴し。要筒金賽
 金頭。定筒入破探居。乞出透筒袖隠。竹藤丞が手仕。負博のおかしきは。集
 居の言種には。各利賽を取々に。我先前にと争敷の下に。敷つめられて
 は古薦の。そも輔よはげにみゆれば。九條筵の打ぼうけ。差違をや構まし。
 靈佛靈社は多けれど。象王權現の氏子とや。三たけのこひが博堂には。鎮
 守に祝道祖神。勝手宮をや崇らん。住持供僧借住は。此五四多法師彌多房。

京都本阿波
本ニ據ル
抛京都本投
ニ作ル

三明房の筑紫聖。彼所に歩を逆人。誰かは珍財抛ざらん。抛てもくよし
 なしや。負ては積借錢の。子はいかにして送やらん。

宴曲抄中

郢律講物禮

敬禮妙音諸聖衆。哀愍道場結緣者。願此功德無邊にして。普からんとな
 り。凡郢律様くくに。絲竹の調を調へ。音曲殊更に濃に。眞俗二諦を兼と
 かや。さればにや外に出ては。清濁を分て國を治。あの政を象る。内には又
 をのづから。聲塵得道の境なれば。聲字實相の。其理に叶り。先は青陽の
 名に負。春の春庭樂や。柳花苑は雙調。霞る春の曙に。のどけき調を勝たる。
 桃李花の粧。花芬馥の氣を含は。此風香調の曲とかや。石河竹河鈴香川。
 流れてはやき走井に。篠浪越音涼し。時しもあれや秋の夕。身にしむ聲を
 吹立る。秋風樂の笛の音。春はさながら淺緑と。見へし草葉も庭に生る。淺
 茅色付冬枯の。さびしき物は東屋に。片敷床の席田。閑野の小菅薦枕。西寺

篠ハ假借

におこなふ道は安名尊。菌韓神に手向やせまし梅がえ。古小柳の強引。と
 さむかうさんとうたひても。なを又さかふる我門。雜藝風俗の郢曲は。其
 家々に残つ。こと葉の花鮮に。いく春秋を重らん。これ皆哥詠の類なり。
 妓樂の薩埵を友とせん。一色一香のかさりは。中道の妙理に答つ。花は
 花慢帝網。互に句をほどこし。香は香雲と立上り。供養を遙に。梵釋四禪に
 をくるとか。誓願ともにもまことあり。證明知見たれ給へ。

三島詣

和光同塵は利物の謀。法性の海とこしなへに。不變の波を湛。垂跡は化
 儀に隨て。方便の舟を浮つ。渡に信敬の實依。夫三島明神は。かたじけな
 くも磯の上。ふるの神代の天にしては。第六代惶根の尊の御子なり。化儀
 を彼所に調。利益を是所に待しむ。豫州と當國の本末も。時の宜にや任せ
 ん。されば或は海中に。樓閣玲瓏の奇瑞をなし。或は夢の告ありて。本地醫

事かよふ
據りて種本ニ

不不明阿波
本ニ據ル
八幡ノ八類
從本はトア
從り阿波本ニ
誓阿波本憑
作ル
御社戸の
據りて種本ニ

王の誓約。十二大願を顯す。豊崎の宮の古は。興津島根に跡を垂。文武の賢
 き御代には。幼稚の童男に託して。暫賀茂の郡に鎮座す。其より以來。あの
 つるに聖武の御宇には。天平聖曆の事かよ。叢祠を府中に遷され。粉楡
 の景を仰しより。神德年々に威光を副。感應益々盛なり。然ては社壇藁を
 並て。此玉の御籬鮮に。朱丹軒に暉き。御正體の聖容は。星を連て赫奕たり。
 廻れる廊廡の宮柱。太敷立て彌榮。功德池の浪をたへては。苦空無我の
 響あり。水鳥樹林交て。常樂我淨の風冷。七寶の橋烈ては。金繩界道に異ず。
 歩を運人も皆。行通道の萬度。千度を重ても猶。進心を陰なく。見目は賢き
 調御の師。三世の佛の母の。子を思ふ道にかはらねば。我等に一子の慈悲
 を垂。阿遮一睨の眸。吠戸羅增福の掌。彼は四魔を退。是は寶塔を捧つ。
 飯酒の王子と號せらる。十種の願王文殊師利。定惠の二を分ては。大楠小
 楠の陰陽。八幡勸請の砌には。十念不捨の誓あり。御社戸の六體は。六觀

誓數阿波本
憑數(タノ
モシク)ニ
作ルニ從フ
ベシ
「ヒロキハ
「ヒロクシカ

音の化現にて。普門の誓にこたへつ。各極に立舞。第二は后妃の昵なつ
 かし。十一面の笑を含。第三は王子の嚴。六道能化の姿にて。忍辱の巷に
 出つ。衆苦に闡提の身を任す。此等の結縁誓敷。閑に思つ。くれば。此般
 若惚持の法施には。内證の月朗に。外用の雲をや拂らん。夜の嵐に吹立る。
 龍吟に響笛の音。深更に雪を回す。霓裳羽衣の袂に。霜を重て白妙の神
 さび増三島木綿。凡勝地を卜給ふ。神慮も争か淺からん。後をかへりみ
 れば。あの北嶺高く聳て。富士の明神に鳴澤の。深き契や故あらん。其名も
 賀茂の御手洗と。おなじ流は瑞籬の。久き代々の様も。由あなる物をな。西
 を遙に望ば。田籠の浦波に。浮島が原の磯傳も。道ある御代はのどかにて。
 浪おさまれる船寄の。汀の松も廣攘て。榮る梢は高道祖の。神の惠の普き
 や。法界體性の誓ならん。抑。倩思解ば。大通智勝のその昔。東方阿闍と
 聞ゆるも。此今の醫王善逝かよ。十六沙彌は則。十六王子と顯れ。互に行

化を助つ。共に主伴の昵あり。一乗化城の妙文。誰かは是を仰ざらん。

理世道

夫天命を全するは。必明王の徳に應。理世のすなをなるは。是忠臣の諫に依とかや。上下を治て。下又上に叶つ。浪能船を浮れば。船即のどかにて。其譽に歸せしむ。海は廣き惠邊もなくや。深き哀人を分ず。されば明主として。此賜を與つ。子を贖て父母に賜。僂役の大燒事。々繁からずはかりては。國を治嚴み。蝗を吞し政。自畝におり立て。くるに連る事態。農業を天下に勸つ。民を撫るはかりごと。かたじけなくぞ覺る。凡仁を施て。咎を求ざるは。是陛下の好する所なり。才藝を專に賞するは。功臣の營道也。秦の二世皇帝。梁の武帝の古の。其謬を編すべし。二世は深宮に居しつ。此政普からず。武帝は朱異に隨て。聞事を四方に告ざれば。愁を外に殘せりき。奈ぞ必しも。獨を用るは。明ならざる君たり。しかれば毛詩には。

即類從本はトアリ阿波本ニ據ル

陸類從本階ニ作ル阿波本ニ據リテ訂ス
すへし阿波本すくしニ作ル或ハすらしカ

忘されノざリテ補フ
阿波本ニ據

仙人云る事あり。詢て賤きに聞べしと。教る道を忘ざれ。廣く伺て謬さらむ爲也。豈一日の萬機を。一身の慮に定ん。しかじ普く賢良の。臣に任て身づから。是をはからずとも。法令空からんや。太宗の至て重くせしは。魏徵房玄齡二人の臣。彼は天下を靜つ。あの政を諫き。是は萬度命を捨一たび生ずる代に逢り。須く賢を學ては。愚を伴ことなけれ。一官の小情に憚て。萬人の費を成ことなく。道を直くして私を顯す。諫の言を恐ざれ。賞の疑しきをば。二度問事なけれ。咎の定らば。屢不審がれとなり。抑異朝の古は。波を凌て傳聞。霞をへたて。遙なり。我朝の天照神代より。神武綏靖かたじけなく。代々の明君時遷。代は又今にかさなれど。流久き瑞籬の。濁ぬ末を受傳。累代の政は。天の下にくもりなく。野澤の草のしげれば。其の葉も及れず。久方の月のあきらかに。たれかは是をしらざらん。倩思解ば。天下靜謐にや。物を利する謀。皆自性法身の内證よりや。應化等

等類從本寺トアリ阿波本ニ據ル

流の外用の。慈悲眞實の姿なれば。或は君と成。或は臣を掌どり。眞俗一を分つ。心王心敷の臺を出。百姓撫民の柴の樞。賤き土生の小屋までも。漏ず賢き詔。紫泥の尊きを仰つ。太平の徳に誇なり。

夙夜忠

湯するは汗ナリ 夜阿波本間ニ作ル 御膳をノを阿波本ニ據リテ補フ

道を傳。家を起。名を後の代にとゞむるは。此君に仕る忠臣。々々の譽を顯すは。夙夜の忠を重つ。賢き恵を仰也。凡夙夜に隙なく。風に髮梳。雨に湯するしてや。曉に出星に入。屢壁に背る。燈を挑といへども。夜の床を暖ず。閑に枕を傾ず。宮司の勤に忙しく。三度食を納ず。三度髪を上るは。功臣の忠勤に依てなり。朝政にま見へつ。朝に雨露の恩を受。夕に御膳を備ては。霜雪を戴て。夙夜の功や積らん。されば上は三公輔佐の雲の上。景靡月の都より。百の務ことごとく。其品々に隨て。緋も緑も色く。衣の袖を連つ。仕る道に物うからず。掃部寮の筵道。此衛士の焼火の庭もせ

由良ハ假借

虎牙類従本 不明阿波本ニ據ル

に。大宮人の朝清目。塵に交態までも。夙夜の忠にや備らん。光源氏に仕し惟光義清は。霞の内のかくれ家にも。立をくる事なく。霧の籬の隔なく。里をもわかず隨て。花の宴紅葉の賀。あの春の遊秋の興。夕顔の宿花散里。六條邊の通路。須磨明石の浦めしかりし旅寢の床。磯間傳や彼岸に。年經海人の栖家までも。見るめの草の假にても。こゝろに違節もなし。舊臣の勝て哀なりし様しの。衣の色の深きは。延光の大納言也。顯基の中納言。彼は天曆の古を忍つ。近臣の昵なつかしく。菩提の道の縁と成。是は夙夜の昔の面影を。故宮の月に思出。秋の心を傷め。浅茅が露の玉由良も。忘る。隙ぞなかりける。是皆夙に興。夜半に寐ざりし。懷舊の思や切なりけん。

文武

學は鱗角を抽で。此文章を味ふ。識は虎牙に連りて。又正に武勇を拉ぎ。文

拘不明阿波本二據ル

は民を撫る謀。武は國を治警也。されば或は二八の文士を撰れ。或は四七の武將を定置。守文章創の二の道を分し。魏徵玄齡が諍。いづれも進退す。呂尙周文の。車を許れし賢才。拘らざる故とかや。楚の軍戦に。あの革車に乗し忠臣。思慮の武きを顯す。蘇武は是麒麟閣の兵。田邊のおく露の命。稻葉のすすにかゝりて。多の秋を送し愁書を。雁の翅に付。野相公は即仁明の朝に仕き。松嵐冷き月の夜。悲歎を蔓草のよばに載。彼は武功ありしかば。塞垣に囚れ。是は文藝巧なれば。勅答に預る。蓮府僕射亞相は。文を掌て。律令を正。翰墨を前として。君を助る勞深く。幕下都護大理は。各武に象りて。兵杖。牛車の粧。帶劔を給て。あの國を守る功厚し。漢家の四皓にはちざるは。我朝の四納言とかや。才を雲上に施し。藝を都鄙に感ぜしむ。樊噲豫讓に及は。源平兩家の良將よりや。田村保昌に至まで。古今殊なりといへども。忠を天朝に盡して。名を後の代にとゞむるは。たゞ此

「タマシクハ」タマシクハ

朋友

道の譽也。凡北關彌安全に。東關益治て。武威重く。文道すなをなりければ。四夷又起事なく。此三韓早く隨はん。

「肆ノ古訓」肆ノ古訓

夫與善の人に伴て。芝蘭の室に交。與惡の友を厭て。鮑魚の肆に入べからず。子猷は雪月にあくがれて。遙に安道を尋き。劉愼は清風に。玄度なき事をや恨けん。伯牙は鐘子なかりしかばや。永琴の緒を括し。樂天は又遺文に。金玉の聲を増とかや。立まよふ夕の霧の絶まにも。烈を亂ぬ雁がね。鏡に向山鳥の。影をや共と鳴つらん。友とする人のすくなき。東の路の宇津の山。山腰雲暗してや。猿の叫すくなく。淵底嵐深して。此鳥の聲幽なり。葛も鷄冠木も色を染。檜原眞木の葉露滋く。夢にも人のと言傳しも。都の友の行あひ。彼常陸の宮の栖家を。里わかぬ月に遷來て。入方見せぬと疑しも。深き情の友なれや。凡君臣合體のことはり。夫婦同穴の契も。皆是

葛ハ葛カ 滋ク阿波本 滋シトアリ

ともになすらふ。中にも梁伯鸞が。此コノ霸陵山ハレノリツサンにおくれざりける。孟光多年マウクワツタネンの遊アソビを忘ワスレざれと。契チキし儲君チヨクンが製作チヤク。影カゲさえ見ゆる山ヤマの井イ。此コノすみはてぬ飛アス鳥井トビイ。深フカき思オモヒの程ホドは猶ナオ。此コノ世ヨ一の酬ムクヒかハ。淨德夫人ジユツトクフニは即ス。妙莊嚴王メウシヤウオンを諫イサメて。ついに善趣ゼンキョクにおもむかしむ。無着世親ブチヤクセチンの其ソノ昵ニヒクなつかしく。名ナを千古コノコトに飛トビしめ。春ハルの蘭ランあきの菊キク。句クを普ニホヒく施ホドコして。互遷化タガヒニを兜率トウソツの雲クモに顯アハし。満月マンゲツの光ヒカリ圓也ナリ。彼是カレコレとも共に勸スて。得道トクダウに向ムカフ謀ハカリゴト。是コノ皆ミナ朋友ホウユウの德トクなれや。

山寺

千株センの松マツの下シモには。青嵐セイラン窓マド冷サマしく。雙峯サウの軒ホウの間マには。白雲ハクウン隣トナリを卜シメたり。晚鐘バンシヨウ霜シヨウに響ヒキ聲コエ。曉月ガウ露ツツに寒色サムキイロ。聞キクに哀アハレを催モトメし。見ミるに心ココロを傷イタしむ。抑天ソモク智チの草創クサソウは。園城エンジヤウの舊院キウイン。百年ヒヤクネン餘ヨの經行キョウギョウ。其ソノ名ナを三井サンキの水ミヅにやながすらん。桓武クワンブの建立ケンリツは。あノ叡山エイサンの靈窟レイクツ。七社シチヤの誓願セイヤク新シンに。其ソノ威イを四明シメイに及イず。一イチ乘圓宗ジヤウエンシヨウの英エイ。吾建ゴケン杣ササにかう芳ばしく。一心イツシン三觀サンクワンの月ツキの影カゲ。比良ヒラの高根タカネにかダ

「ヒビキルハ
「ヒビクシカ

鳥或ハ鳥カ
然ラバ旁
訓「チウシハ
テリ「ノ誤

竹にノに阿
從本ニ據リ
テ補フ

やく。麓フミを遙ハルカに望ノゾミば。白波ハクハ湖水コスイに連ツラナり。後ウシロを顧カヘリみればまた。紅葉コウエウ巖上イワンに色イロを添ソソふ。古松コソウは瓦カワのひまヒマをかくし。老杉ラウサンは門カドをふさ塞げり。霜深シヨウシン庭ニハの叢重クサムラシメれた只。う浮き世ヨに還跡カエリもなく。霞行カスミユク檜原ヒノハラを分入ワクイル泊瀨山ハツセヤマ。人ヒトの心ココロをしらねども。花ハナは貞サダにさ咲きけるは。泊馴トマナレにし宿ヤドの梅ウメ。音ネに聞キク其名ナも高タカき高野山タカノヤマ。深御室フカキミムロの遙ハルカくと。星霜セイサウ舊フルき松マツの戸ト。さ鎖していくよ幾の曉キョウに。出イべき光ヒカリを契チキルらん。堂塔ドウタク叢ツツを連ツラナて。佛像ブツゾウ鳥瑟ウシツの影カゲを副ソベ。坊舍窓ボウシャマドを並ナラバて。經論キョウロン玉章ギョウショウの文モンを磨ミルきても承和セウワの比ヒかとよ。梢コノエの雪ユキも寒サムき夜ヨ。靈鳥レイウ來キタリて鳴ナキしは。いかなる告ツゲなりけん。延喜エンギの朝アサには即ス。御衣ミイを送給オウクリタマヒしに。様々サマサマの瑞相ズイサウをあらはす。

松竹

綠松リョクソウは貞木テイボクの號ガウ有アリて。霜シヨウの後に露ツツ。素竹ソシヨクは錯午サクゴの風カゼ吹フキて。此コノ夏ナツの天テンに響ホムレあり。されば忠臣チュウシンの道ミチをも。此色コノイロに喩イヒたり。鳴鳳メイホウの管クワンにも。あノ其聲ソノコエをや装ヨソふらん。さ櫻くらチウシンを分ワケて。樹ツキとはせぬ鶯ウグヒスも。軒端ケンタンの竹タケに臥馴フシナレ。三月ヤヨイの空ソラのくれつ

かた。花は残ぬ嵐に。散ぬ翠の松の葉。風の竹に生夜の。あの窓の間の假寝。
 松の響に通は。班女が夜の琴の音。陵園妻が松の門。晋の七賢が竹林。
 臨時の祭の試樂に。竹をかざし、始も。よし有てぞやおぼゆる。瀬戸に鳥
 の歸る時や。竹の煙たち増。除目の中の夜半の天。松明の炭や積らん。松
 の尾の明神は。王城ちかく鎮座し。竹生島の天童は。湖邊遙にあとをたる。
 松の柱竹の垣。疎なりし家居は。海面遠き山里。さこそは冷しかりけめ。

名取河戀

云ば縁にいはいはねば胸にさはがる。心の程を堰返し。つゝむとすればおも
 ふには。忍ぶるこそ負にける。さもあらばあれ惜からず。なにぞは露の
 あだ物よ。かへてもかへて捨ぬべし。たへてしなくば中々に。人をも身を
 もとばかりに。うれふる隙こそ安からね。涙に滅てども消もせず。胸の邊
 に立煙。靡き初にし一方に。亂終ぬれば陸奥の。しのぶもぢ摺いかせん。

減不明阿波
 本ニ據ル
 「ミチオク
 ハ「ミチノ
 クレカ

湘浦に竹斑か也。涙に染し色ながら。鼓瑟の跡露深し。秦臺に鳳去ては。此
 翅のかへらぬ道なれば。吹簫の地には月空。行衛もしらず終もなし。あふ
 を限の戀路なれば。迷心の終ぞうき。夕殿に螢亂飛。思の炎焼まさり。
 空窓に燈残ども。なげく命は甲斐ぞなき。玉殿松花の觀。あの時移こと去
 ぬれども。三十六宮の秋の月。我身一の袖にのみ。ちりしまゝなる涙さへ。
 今は他なる記念かな。佐野の船橋懸てだに思はじ。よしなしとても又さも。
 文悪なる名取川。瀬々の埋木あらはれば。其も我身の心から。いかにせん
 とか浦みけん。

曉別

逢に別の有世とは。知がほにしてしらざりけるこそはかなけれ。曉思はで
 何か其。あひ見る夢を誓けん。病鶺鴒の寡鳥。稀に逢夜を驚す。情もしらぬ
 狂鷄の。未明ぬに別を催す。又何とだにもなきなかの。むつ語名残おほか

誓阿波本葱
 ニ作ル

忘なよ不明
阿波本ニ據

更だに不明
阿波本ニ據
託類從本阿
波本共ニ不
明阿波本ノ
旁訓ニ據リ
充テ此字ヲ

るに。逢人柄のつらさなれば。秋の夜短く明なんとす。程は雲井に別とも。
空行月のあふせまで。忘なよ契は在明の。つれなくみへし曉。後會其期遙
にして。袂を鴻臚の露にぬらし。名残をしたふ涙さへ。とまらぬ今朝の面
影。一夜の夢の浮橋。渡絶る峯の横雲。其さへたえなく立別て。鶏籠の山ぞ
あけぬめる。おしからぬ命に更だに。とめん方なき衣々の。其袖のなか
にや積るらん。もろき涙もなく。歸る道芝の。露をたくひに託ても。又
夕暮や憑まし。
懐舊

閑に曉の夢に語へば。懐舊の露の手枕に。結や老の涙の。古にし昔ぞ戀敷。
深更に残る燈の。ほのかに往事をかそふれば。霜をかさねて消なんとす。
此秋の閨冷。朝に聖代の昔を學。家に忠臣の跡をしたふ。是皆懐舊の思あり。
り。されば詩編に心を演や。和歌に詞を顯す。王子晉が珠の床。空き洞に留

舜をノ阿
波本ニ據リ
テ補フ

植阿波本ニ
據リテ補フ

り。羊太傳が碑の文。主なき宿に残れり。吳竹の斑なりしは。舜をしたひし。
餘波の涙なりけり。古宅の梅をさそひしは。昌泰の昔の詞なり。親故は駕
を廻し。妻努は都を出ずして。鳳凰池上の月におくられしも。いまだ關を
越ざるに。いつしか古郷をや忍けん。梓弓引野のつゞらくりかへし。猶古
をしたひつ。春を忘れぬ記念は。舊野に植櫻花。昔べや汝も戀しく郭公。
鳴音よいざ。は我に借ん。今までは心ながきは秋の夜の。月の光にさそは
れて。恩賜の御衣と詠じつ。詠明石の浦傳。波の立居に古郷の。面影いか
にうかびけん。分て又昔をしのぶ翫の。其手習のなかにも。思出る事おほ
く。秋に成行空の化粧。山形懸たる家居の。門田の稻のいねがてに。ひたひ
きならずをとまでも。見し東路の心ちして。時を分ぬ夕の露。さこそは袖
に亂けめ。小野山や深き浦見の雪の朝。踏分て問し情に。家主も更に昔を
戀。客又懐舊の切なる事を勧めき。さても文武の御宇かとよ。達く唐のや

文の道を忍つゝ。孔子の報恩に日を點じて。釋奠を大學寮に始。近く建久の治天には。日本歌の情をすてざる餘。柿の本の影供を。和歌所に行はる。抑法華説期の砌。燃燈佛の古を。今の瑞相にしらせしも。懷舊の誠を顯はす。

宴曲抄下

内外

尊むべき禮あり。憐べき信あり。是を兼たるは内外の徳。眞俗二を掌。陰陽皆おさまる。一も闕ては道をなさず。函蓋則かなへり。されば先は。三聖震旦に出つゝ。外典の風塵を拂ひ。如來月氏に道を得て。内典の月くもりなし。九十五種を外にさけ。一乘眞實の内に歸す。我朝の起を思にも。天照神の古。五十鈴の川上を卜つゝ。あの今も絶ず栖給。長誓の玉鬘。惠は替ぬ瑞籬の。久き榮の宮造も。内宮外宮と祝れ。法身和光垂跡の。内證外用を顯す。遙に傳聞。兜率の雲の上。無差平等の花の園。共に快樂の境なれど。内院外院の位あり。法華の妙文の尊きは。此内秘菩薩の行のみかは。外現是聲聞と説る。火宅の内を導引。在門外立大白牛車のはかりで。とりく

栖前田本住
ニ作ル
久しノき前
田本ニ據リ
テ補フ

房前田本坊
トアルニ從
フベシ
そも前田本
字トスリテ小
入ぬノテ前
テ補フ據リ
前田本由書
スる物ト書
前田本鳥曹
子ニ作ル

にぞ覺る。さても胎内五位の始より。外に養育のあはれみふかき。内外の
 父母の恩徳。諭ていはん方ぞなき。大内にとりても。内侍所は温明殿。内教
 房は雅樂所。宮内省内藏寮。内記の戸を出ては。そも敷政門をや入ぬらむ。
 外記の廳の有様。由あなる物をな。内辨の上卿の。二なくみゆるよそほひ。
 外辨の上達部は。鳥曹司にやすらふ。又外朝外都は遠き境。雲霞の外也。雲
 外の郭公。野外の鹿の遠聲いくへの霧の外ならむ。雲のいつくを過ぬらん。
 光源氏の大將の。都の外の浦傳。年月次の程もなく。敷の外にくはりて。
 いつしか參内ありしも。あのいかに珍かりけむ。誰かは思の外といはん。
 識盡の巻かよ。内大臣ときこえし後。牛車を許され給しぞ。ことわりと
 はや覺る。内親王の始は仁子。嗟峨の御女。長爪梵士舍利弗。本是外道の友
 とかや。我等理世安樂の。のどけき御代にあへるかな。内には柔和の室深。
 外には五常をみだらざる。内外の徳用普くして。仁たり主たる慈。是をそ

跡前田本威
トアルニ從
フベシ
紐をノを前
田本ニ據リ
テ補フ據リ
嚴前田本筋
汗衫不明阿
波彩不ハカ
前田本ハカ
ざみニ作ル
前田本下さ
れトアリ

むく族は。天命の外にやしりぞかん。目出かりし様は。上東門院の御入内。
 外跡の重臣輕からず。博陸三公の傳き。前には玉の轡を並。後には花の轅
 を廻す。車は錦の紐を嚴。遣つげむもてなし。汗衫の袖もなよびかに。
 外に見えたる出衣の。かさなる妻の色々。八重さく花のいとこよなく。梅
 花の方の染深も。さこそは世にこなりけめ。外祖は戚里の臣として。内覽の
 宣旨を下れしも。長徳の賢き恵なり。
 筆徳
 夫物を賞するは徳にあり。此徳は名に顯る。鶏距を馬蹄に交ては。筆を馳
 て志を顯す。普く文の園に遊て。あの春の花匂を増。廣くと葉の林をか
 ざりて。此秋の菓色を益。是みな筆跡を本として。其徳一にあらざとか。さ
 れば遠く月氏の雲を隔。多羅葉の梵本。震旦の霞の底には。蒼頡が漢字を
 書傳。近く日域の霜を重ねし古。天の浮橋のこの葉を。きわたりし態

家々の類徒
本阿波の本共
ニ家この本ト
アリ前田ス
據リ訂ス

別類徒
阿波本共
然レド前本
本レバ前田
作ルニ從フ
ベシニ從フ
握前田本取
ニ作ル

袖の阿波本
前田本據
リ補フ

阿波本前田
一據リテ
補フ

調へし前田
本とし故
しニ作ラベ
シニ作ラセ
ズニ作ラセ

までも。 宛然 さながら朽せぬ筆の跡。書死風死ざる道。家々の風にや傳らん。
かたじけなくぞ覺る。優曇喩とする。 チ(オ)ボユ 逢難き御法の教文。 イチ 一乗妙典の五種
法師の中にも。 コソ 此書寫の功德猶勝。木を刻石の面に墨を染。 モ(ジ)ヨシワメウケン 苦海の群類を
救なるも。 ホウシ(阿波本) ホウシ(前田本) 魚網に寫す筆の跡。 キヨバツ 哀なりし様か。 キヤミイシ 網代木の浮瀬の波に捨
し身の消もはてなで泡の流。 キ(エ) 知 流てつれなく年やへにけん。 アジロギ さても世にあり
とも人にしられねば。 ヒト 小野の山里尋ても。 ウツカク 誰かは問む古はてし。 ナガレ 身をしる
雨のおやみなく。 (を) 歌 無 昔を忍なくさめとや。 ムカシ たゞさばかりの手習の。 テナラヒ 筆の旨に
書暮し。 ガキクレ 涙や時間もなかりけむ。 ナメダ 凡好色優人のなからひ。 ナ(オ)ヨシワシヨクイウツシ あの妻を重ぬる
衣々の。 キズ 婦 別をしたふ朝に。 ワカレ 薄墨に書亂たる水莖の。 ツマ ねくたれ髪の手枕に。 カサネ 見
るもうれしき玉章。 ナメダ 此荒夷の白眞弓。 アサキヒス 強き心を引更て。 ツヨ 別は本末。 モトス(ヘ)エ よりくる
ばかりの。 理(わ) ヲツ 只一筆の跡にこそ。 アツ 情の色もしられけれ。 ナカケ 管を握門
庭。 フデ 筆を含山水。 フクムサシイ(セ)リヨツ 龍池にひたす墨の色。 イロ 碧丹をまじへて紅也。 クレ(レ)ヒ(キ)ナリカタチ 形は石岩を帶

て圓なるも。是皆筆をもととす。 本

狭衣袖

そよや狭衣の袖の涙の。 サゴロモ 雨と古にし昔の。 ア さまぐなりし事態を。 包 つむ
とすれどいざやさは。 然 誰かは世にはもらしけん。 ナメダ 少年の春の始より。 セツ 此首
夏の夏に遷きて。 ナツ 蟬翼の薄き。 ウツリ 袂に結菖蒲草の。 ナツ ねにのみなかれて浮沈。 ウキシヅム か
る戀路と人はしらし。 コヒ(ヒ)チ 太山の里のさびしさは。 ミヤマ 棹鹿の跡より外の通路
も。 アキ 希なる秋の氣色に。 オモ 物思ひの花のみさきまざりて。 ササシカ 汀がくれの冬草の。
枯行哀に至るまで。 マレ とりぐなる中にも。 ナカ いかにせんいはぬ色なる。 オモ 八重
款冬の一枝を。 カレ 手折し心をしらせそめて。 カレ へだてなかりし古も。 ミキコ(ハ) 今更いか
おぼしけん。 オモ あのさもこそあれ。 オモ いかでか色にも感ざらん。 オモ 節に付たる花
紅葉。 オモ 霜雪雨にそぼちても。 オモ えならぬ情のこと草に。 オモ いなにはあず稻淵の。
瀧津心ぞ騒まざる。 オモ 抑百城の雲の上まですみよる。 オモ しなくの曲を調へ

波代不阿 前本ハ身 波本ハ身 前本ハ身 波代不阿 前本ハ身 波本ハ身 前本ハ身

し。絲竹のねにやめでけん。天下袖なつかしくしたはれて。此遙にわたせ雲の梯とうきたちしを。かたじけなしや蓑代も。我ぬぎ着は勅なれば。いと賢しとあふぎても。げに武藏野の紫の。ゆかりの袖やなつかしき。よしさらば我のみ迷ふ戀の路かは。古もかゝる様は在原の。古にし跡にやよそへけん。さてもいかなる垣間見のたよりにか。待に命ぞと託ても。猶又思や出けん。室の屋島の煙に。立も離ぬ面影。後瀬の山もしりがたく。すゝむ心の程もなく。早衣々の恨は。我にもあらぬ心ちして。絶間やをかむ葛城の。神の誓をたのみても。明る朝の眞木の戸は。さこそはくやくしくおほえけめ。夢かとよみしにもあらぬつらさかな。うき名をかくす限もあらせよとぞおもふ。四方の木枯心あらば。神代より注連ゆひそめし榊葉を。及ばぬ枝となげきしぞ。せめて心やましき態なりし。

狭衣妻

始前田本初ニ作ル

明暮前田本 分過のノベ 前田本ノベ 分過のノベ 前田本ノベ 分過のノベ 前田本ノベ

思遣べき方やなかりし小車の。我かもあらぬ始より。深き思は飛鳥井に。やどりはつべき。影し見へねばと恨しに。御馬草がくれの人目よきて。げに珍しき草枕を。幾度結重けん。馴行まゝの哀に。行末遠くたのめをけば。こはかゝるべき契そとも。さこそは思あはせけめ。行方しらぬ蚊遣火の。煙の末の菟に角に。思ひみだるゝはてもさは。つるのよる瀬よいかならん。飛鳥河明日渡らむとおもふにも。今日の晝間の戀しさに。語あはせん見し夢の側去ぬ面影。未夜をこめし明暮の。心迷ひの苦しさを。木綿付鳥にやとつてん。やすらひかねし天の戸。明ぬと急別路に。淀の河舟指うけて。梶を絶命もたゆと。いかでしらせんはるゝと。幾重の波をか分過ぬ。心つくしのはてそうき。今ぞきく未我しらぬむしあけの。浮津の波は深海の。みるめかなしくおもふにも。君が記念に扇の。名残も惜く身に副て。今をかぎり早き瀬の。底の水屑と書付し。其浦風の便までも。いかなるたよ

翠前田本
森前田本
二作ル
ながさむ
が阿波本
據リテ補フ
前田本ハ流
さむニ作ル
梁不明集カ

鷹徳

りにしられけん。なき跡までも呢じく。尋し宿の横柱。忘なはてそといひけるも。是や朽せぬ記念ならむ。種蒔をきし姫小松。つるに木だかき色みえて。翠に榮る梢は。常葉の森にやそだちけん。世々経て後にしられつ。哀を猶も重しは。澤邊の鶴の毛衣。よしやげにさのみはいかゞかきながさむ。こと葉の花の梁にもる。水莖の跡も及ねば。夏草のしげさこの葉の露をもみがくことなかれ。此等やさは狭衣の。わすられがたき妻ならむ。

旁訓
下本ハ前田
しどトア
ニ據ル

青鞍ノ下前
線本從本阿
波類從本阿
據ル前田本
文選ノ注ニ
青鞍鷹青
者韓盧犬謂
黒色モトア
鳥柴前田本
外柴ニ作ル
峯前田本
小鷹前田本
二作ル
あるはノ
阿波本前田
本ニ據リテ
補フ前田本
大鷹前田本
鶴ニ作ル答

な。左右近衛の節々。隨身の狩装束。殊に美々敷ぞや覺る。犬飼鷹飼の其色々に見ゆるは。緋の袂袴結。下濃の袴革の袴。錦の帽子やきたる。笠の端になぞらふる狩杖も。つきく敷ぞ覺る。緑の講は。雪の朝に色榮て。興ありてぞ見ゆるなる。梁の昭明の撰せし。西京賦の詞にも。青鞍鞬。韓盧之線とか。いざみに行む狩庭の小野。鶉の床も深草の。露分わぶる狩衣。人なとがめそといひしは。流たえせぬ芹河。御幸古にし大原野。小鹽の山小野の渡。宇多野淡津野嵯峨野の原。交野の御野の三柵。並る禁野の歸様に。見るに付て鳥柴の雉。餌袋の鳥もさすがに。故々敷ぞ覺る。紫の行志目の行。雪打拂ふ手前の。斑の雪の明ぼのに。身寄の方を身にそへて。風いとほしき嵐山に。向る小倉の峯つゞき。そよや朝きりに立おくれじと久方の。月の桂の里までも。尋し野原の小鷹狩に。小鳥を付し萩の枝ぞ。わりなくはきこゆる。鷹の興あるは大鷹野。曝の鬘羽と山歸の上羽。峯飛渡箸鷹の。谷越

おかしき前田本
兄弟前田本
鷗羽前田本
指羽前田本
柄局前田本
唐前田本
政類大
節用集類大
齊頼二作ル

の羽ぞおかしき。窮を擲草執。木居に懸る鈴の音。落羽も早隼。兄鷹鳥屋歸
屋形尾。鷗兄鷗と。此差羽雀鷗雀賊。眉白の鷹眞白符ぞ。げに面白はみえけ
る。羽白ふぢさは柄局。廿鳥屋は希代の鷹也。抑政頼は。あの鷹の道に響有
て。是を傳し餘かとよ。胡竹てふと難からばとなげきても。音にこそたて
ね笛竹の。一夜の節をや忍けん。鷹山鷹の子は。催馬樂の歌の詞なり。

馬徳

光ぞ前田本
田本を二作
詢前田本訪
二作ル
獻前田本現
二作ル

教月西天に朗に。佛日東漸の光ぞそふ。倩其ことほりをおもふにも。經典を
白馬に荷しめ。轡を流砂に促がし。蹄を葱嶺に奈せず。傳し道ぞ賢き。凡馬
に眞俗のや徳多く。號して其字に故あり。七寶のなかにも。あの正に馬を
寶とす。龍樹菩薩の論釋に。隔檀往向を分つ。圓々海徳をあらはししも。
起信大乘によりてなり。是又馬鳴の製作。されば此論師の名字の。其古を
詢ば。過去の輪陀の在世かとよ。千の白馬を獻じつ。千の白鳥を鳴しめ

蘇我前田本
蘇家二作ル
愛する前田
疑ハシ前田
讀本得然ラト
詞ナリ

鶴毛前田本
月毛二作ル

て。正法を紹隆せし故に。即馬鳴の名を得たり。佛法最初の執政も。驛の王
子と號せらる。蘇我の馬子の大臣も。此御時の人とかや。穆王八疋の天の
駒後の人は愛する。背は龍の如し。あの頸は鳥のごく也。累代の政は
白馬の節會駒引。馬形の御障子は。九重に是を立らる。左右馬の寮頭馬司。
國々の厩々の長に。口詩とらせし態までも。よしあなる物をな。都の路や
まよひけん。黒駒を引し明方。雲井に翔とぞおふ。秋の夜の鶴毛の駒をば。い
かなる馬なるらん。甲斐の黒駒と鶴駮の駒と。望月桐原の御牧に立駒。いで
我駒はそやく行。待らん婦をはやみん。此げにこふらしやれ駒の躰やな。
檜の隈川に駒とめよ。しばし水かふ影をだにみん。霞る春の花形。くもら
ぬ秋の望月は。我朝に名を得し名馬也。竹馬は幼稚のたはぶれ。老馬は雪
にもまよはず。胡馬北風にいはゆなるも。いかでか心なかるべき。觀音の
形像には。馬頭の形をあらはし。神には生馬の明神。駒形の利益ぞ掲焉。馬

櫛神の誓は。馬を守靈猿。憑敷ぞや覺る。郢曲にも催馬樂。御馬草白馬其
 駒。司馬相如が琴の音。牡馬といへるは琵琶の名。抑様々の御法の教は多
 けれど。心の馬をしづめずば。誰かは實の道に入らん。

靈鼠譽

東方朔が虎鼠の論。用る所には勢をなし。此虎牙は雲に嘯ぶき。大虚に風
 を動す。靈鼠は其品賤けれど。名は月宮に上れり。四維上下の中にも。北
 を以て掌る。子の方即是也。陽春初月に。若菜を備る政も。子の日を先賞せ
 らる。凡其身の體たらく。かたじけなくもやたへ也。東方醫王善逝の。十二
 神將に連りて。形を毘伽羅の頂戴に顯はす。是又本地釋迦牟尼。されば我
 立柚の麓の。七の社の木綿禪。掛も賢き瑞籬の。あたりを去ざる叢祠にも。
 其名をあらたにとゞむなり。心賢く故あれば。月をも感花紅葉の。色にも
 心やうつりけん。梢を傳木鼠。三日月弓張居待の月。伏待朧夜在明の。月の

虎牙ノ牙前

掌前田本司

波類從本阿

本二據ル前田

類從本阿

前田本二據

うつりけん

るらん二作

廂前田本庇
二作ル

「ホムラ」ト
汚訓スベキカ
二作ル

弓弦前田本
族二作ル

おほ大和
田本大和
催馬樂ニ
けんもつ
トアルヨ
ハ御の誤
字音カ

鼠の名にしおへば。影をも今更誰に恥む。夜はすがらにねられねば。軒も
 る月にあくがれて。板間を求る板廂。桁梁の通路に。いそがはしくや鼠走。
 妻戸の透間まきの邊。古屋の壁に年を経て。すむてふ鼠のあなか猫にし
 られじ。はやさばかりやさしき柏木の。なれよなにしに手にならしけん。
 冷じく鳴音を聞も胸さはぎ。心迷ぞ由なき。かゝらん時の隱家をば。堀求
 ても穴鼠の。そことも姿をいかぐみせん。火鼠は火叢にも侵す。猶其汚を
 きよむとか。遙に傳聞。異朝の波の外とかや。雲南の軍におもむきて。凶徒
 の陣に交。あらゆる弓弦を滅て。王事もろき事なかりしも。靈鼠のなせるは
 かりど。さても我朝三十七世かよ。孝徳の御宇豊崎の宮の古。おほくの
 鼠むらがり。おほ大和國へ渡つ。あの都遷をしめしけるも。不思議とかや
 覺る。おのが習の爲態なれば。引手あまたの心癖に。いかなる方に寐住て
 か。琴腹に子をば設けむ。西寺の老鼠。えむしやうつみ又けさつみけるや。

刷阿波本ノ
旁訓一ツク
ロヒト本
文ニハいつ
ルニ従フ
此前田本ニ
據リテ小字
トス

き。岩根の瀧の白玉は。幾萬代のかずならむ。人ごとに昇はうれしき位山
の。道ある御代はおさまり。代々経ても彌榮行。竹の園生に遊なる。鳳は翹
を刷。明王の徳を待出。幕府山の春の梢。枝を連てのどかなるや。天下静謐
のしるしなるらむ。千年の松の翠も。萬年の苔の色までも。鶴龜の名をあ
らはせば。此砌にやさかへむ。龜谷山巨福山。嵐萬歳を呼なり。

眞曲抄

對揚

陰陽萬物を養育し。天地に是を育。日月光を和て。風雨又寒暑をたがへず。
君臣代を治て直なれば。文武の二を賞せらる。詩歌は風月にかたどりて。
和漢に詞の花を飾り。管絃は絲竹に呂律を調。高麗唐の曲を分つ。成王を
助し周公旦。自貴事を知。漢高を守し張良。立所に師傅に登き。瀧山雲暗
して。李將軍が家に有。勇士のいさめる謀。三尺の劔一張の弓。其勢を施
す。あの父母は恩愛徳高く。愍ふかく際もなし。婦夫は語ひ濃に。蘭麝の匂
なつかし。勝其名さへ昵じき。いもせの山の中に落る。よしや吉野の河浪
の。立歸るもつらき瀬に。袖ひたすらにぬるとても。哀を懸る身とならば。
思へかし何に思はれん。思はぬをだにも思ふ世に。聞も尊は二佛座を並し。

瀧山ハ瀧山
トスベシ
和漢朗詠集
參照
婦夫本ノマ

紙阿波本終
ニ作ル

寶塔涌出の稱名。妙莊嚴王を導し。淨藏淨眼の二人の子。江南江北の流
 には。維摩大梵の不思議。解脫空惠の二の諍ひ。抑觀佛念佛の。兩三昧を宗
 とする。彼觀經にや説る覽。韋提の愁の窓には。目蓮阿難の二聖來り。阿闍
 世の弑母をいさめしは。耆婆月光の二人忠臣。王宮者山の砌も。兩會の正
 説とこそ聞。阿遮多齡の二明王。兩部の外部を司どる。明王に左右の二童
 子。定惠の法を顯す。節にふるゝ情の。様々なる中にも。閑き春の朝霞。身
 にしむ秋の夕風。上陽の春の谷の戸に。明れば出る鶯。濃香芬郁の。句を
 誘ふ梅が枝。麴塵の絲を宛たる。柳をはらふ春風。碧浪金波三五の初。始て
 露の結ぶより。光をみかく玉篠の。葉分の風にや亂るらん。雲收盡ては。行
 事遅き夜半の月。秋の水漲來ては。船去事速也。唐櫓高く押ては。雲井を渡
 雁金。碧玉の粧成る。此。箏の柱に。斜に立るかと思ゆ。

遊宴

麴類從本鞠
本ニ據ル

觀ハ歡カ

四禪高臺の閣の裏。喜見城宮の玉の樞。初利の雲の上。遊覽の花の苑の邊。
 出車の轅を廻しつゝ。觀喜臺を並ても。遊宴は勝妙の快樂也。愁を忘て日
 を送。さればや琴詩酒の戲。雪月花の翫び。皆其事態を先とす。詩歌の筵に
 は。金玉の聲に響有。心は高麗もろこしを兼。詞は蘆原中津國や。八雲の風
 をや傳ふらん。三寸を勸る砌には。鸚鵡盃の情をしゐてまし。菓は上林苑
 に。此誰かは覓ざるべき。家主は今や小餘綾の。急て磯菜みるめ苺。入江の
 濱物尋つゝ。鹽干のがたにいざりせむ。春日閑き花の宴。霞める日影も暮
 程。春の鶯。轉曲や。柳花苑の手折る姿。雪を廻らす袂より。秋風身にしむ
 夕ばへの。紅葉の錦の色々に。袖打ふりし時しもあれ。吹合せたる絲竹の。
 調に通ふ松風。凡管絃に曲多く。其品様々なれども。鶯のかたらひは。花の
 本になめらかなるのみならず。急雨に紛大絃。小絃は私言のごとし。つら
 らの下に咽ぶ流の音澄て。或は一聲の鳳管は。秋秦嶺の雲を驚す。能鳴和

琴の秘曲の妙なる調に音信て。心有てや雁金の。雲るに己が音を副ん。抑
 朝庭龍樓鳳闕仙洞竹園。博陸輔佐の翫び。此殿上の淵醉。露臺の亂舞。重陽
 の宴。南陽縣の花の色。折袖匂仙人の。幾千代秋をかさぬらむ。音曲野吟悉
 く。本末の拍子も取々に。神樂には弓立宮人。燎の前に挿頭てふ。神幣篠
 弓。千歳々々。又折てはしる。囀聲のきりぐす。催馬樂には葦墻の。隔に
 隠ぬ梅が枝。名も昵じき婦と吾。契は結んあげ卷や。色にぞ移る櫻人。狹鰭
 河岸に立るか青柳や。夏引の蠶絲の貫河。いかにせん有といふなる淺水
 の。橋をばわたらざらんや。

夢

ぬるが内に見るてふ夢の面影は。烏羽玉の夜半の衣を打返し。思へば他な
 る形見の。猶又しるて戀しとや。夢の直路をしたふらん。夢路をたどる袂
 には。露打拂ふさ夜衣。ゆきふみ分て君を見ても。夢かと思ふおもひき

や。さだかなる夢にいくらも増らぬは。是や此現ともなき中河の。逢瀬を
 したふ曉。浮立峯の横雲は。別る夢の外絶にて。衣々の袖をやしぼるらん。
 覺ぬる夢の心地して。枕に残面影は。又ねの夢の餘波かは。夢とやいはん
 さても彼。小野の里人をのづから。有と計の心當に。尋る道をしるべにて。
 思はぬ山に踏まよふ。夢の浮橋浮沈。絶ぬ命の長経ても。有し昔を忘れや。
 往事渺茫として。都夢に似たりとか。或は殷帝夢に見て傳説を得。或は魏
 徴を夢に見て子夜に鳴。仙家に夢を通る夜。深て蘿洞の月を見る。漢に叫
 て驚夢。風に和しては猥がはしく。霜夜に冴る鶴の聲。抑多の夢の内に。驚
 程こそたどるらめ。始十信十住より。次又十行十廻向。其品餘多に見ゆる
 夢の。終十地の眠覺。妙なる覺に入とかや。過去の迦葉の御代かよ。未來
 を遙に知せしも。記栗枳王に告し十の夢。如夢幻泡影と説るゝも。金剛般
 若の眞文也。

無常

夫異生羝羊の拙心。嬰童無爲の幼なき。我等が狂酔覺難く。道をや外に
 たどる覽。暫やすらふ迷有。無常は春の花盛。林を飭る夕の色。移ひ安き
 句の嵐に隨ふのみならず。黄葉の脆秋の梢。時雨に絶ぬ別も。生滅共に
 終しなく。其車の廻に異ならず。無明縁行より。行縁識々縁名識。々々縁六
 入は。十二の因縁の。うつれば替姿也。東岱前後の煙は。山の霞と立のぼ
 り。朝市の榮花は忽に。日夕の露をあらそふ。行水に數書がごと跡なき世
 と。思へば他なる泡の。哀をとも入月の。傾山の端近ければ。老の涙の雨と
 のみ。ふり行年のいつまでか。芭蕉泡沫電光朝露に替らぬ身の。終は枯野
 の草の原。霜の降場の朝日影。待間も程無世をしらで。たれかは憑はつべ
 き。任他れ能やさは。終にはとまらぬ棲なれば。いそがはしき所は。常樂我
 淨の風閑なる。四徳波羅蜜の波の邊。功德池の砂に戲て。海雲比丘の如

ならむ。善哉童子を友とせん。
爲

法華

會事は妙なる法の英を。掌に得たるのみならず。口に其文字をも唱れば。
 化佛はそらに顯れ。他なるかゝる翫とはいはじ。此言の葉の末までも。傳
 てきかん功德は。喩も足ざりければにや。佛も説演給ず。抑彼瑞相に。燈明
 佛の古は。實相の宗をあらはし。涌出の菩薩に讓しは。久遠實成のこほり。
 彼是會場の有様も。由有てぞや覺る。凡此經を説れし事。番々出世の如來
 の。唯以一大事因縁とこそ見へたれ。然ば縁を結て。砂を集る手すさみ。只
 等閑に手折花。或は手をあげ頭をうなだれて。供養をのべ。又乃至童子の
 戲まで。他なる態とは説れず。況や寂寞無人聲。讀誦。此經典の室には。我
 建天龍王。夜叉鬼神を聽衆とし。諸佛も共に見そなはせば。恒沙の佛もま
 見へ給。忝ぞ覺ゆる。天諸童子の給仕のみかは。十女も擁護を垂給ふ。南無

靈山界會。法華經中一乘教主。多寶分身。諸如來梵釋。多門諸天聖衆。慚愧
 懺悔。六根罪障の霜消ざらめや。衆罪は草葉の末の露、本の滴と成々も。理
 とぞや覺る。誰かは更に疑はん。波路の障を凌て。乙女の姿を改し。南方無
 垢の成道も。勝此經の故也。二もなく三もなき。只一乘の法なれば。顯密權
 實皆漏ず。諸宗は是より詞の玉を抽。學者は文を集て鏡を瑩。餘經も幡
 をなびかして。諸論も楯を引つべし。丈夫の道に向には。功臣の忠も何か
 せん。髻をも切て由無。輒も無明の敵をば。只此經に任べし。などかは五千
 の慢人は。筵を卷て去りけん。我等はいかなる契にて。只假初の情に。詞を
 かはし座を連ぬ。是皆如來の應用の。一味の雨に潤ふ。如我昔所願の慙。化
 一切衆生の謀。いかでか憑ざるべき。さればにや大士の菩薩より。人天龍
 神其會の衆。皆大に歡喜を成つ。佛の御と法を受持して。禮を成て而も
 去き。

阿波本旁訴
「モトドリ」ハ
カ

釋教

本覺の城を出しより。眞如の臺に塵積て。此身の身を知がほにして知ぬ
 かな。生じ生じても。猶死の行えをば辨ず。如來は我等が慈父として。一
 子の慈悲を垂給ふ。なぞしも我等が思もしらでのみ過す。不孝の責をいか
 がせん。情思つゞくれば。他にも年月を争送けんやな。こゝろより外には
 法の馬もなし。精進の鞭をばすゝむとも。しかすか定惠の埒にはつまづか
 ざるべし。醫王の藥を儲しも。病に利有と見給へども。其藥をなむる人は
 皆。只良藥の名にのみめづ。故有とぞや覺ゆる。淨名居士の無言說。文殊
 は是を知て不二法門と褒給ふ。云ば云いはねば恨む等閑の。情の言の葉
 は。由無婦が玉章。何とかやあな云しらずや。水は流て春の色。嵐は吹て秋
 の空。本よりなれる理をば。いかゞは作成べき。抑六大四曼の相。緑の春の
 英。色々にさける秋の草。琴詩酒の戲。緊那羅摩睺羅が法までも。歩を運手

しかすがに

をあさふ。是皆秘密の形なり。さながら深秘の言種。見も見ざるに似たり。
聞(い) ざるても聞ざるのみならず。或は色に出。或は聲に立。宮商角徵羽の五音。
 五色五輪の形も。五佛の智より顯る。知と知ざると。捨と捨ざるとなれば。
 いざさらば只大に漕いでむ。大悲の海には弘誓の舟を浮べつ。取手は緩
 とも。忍辱の梶に身を任。引手にたゆみなく。大慈の綱に懸りて。浦々島々磯
 本動。猶豫浪に立る白雲。八重に隔る海原や。青波分出る岩が根。藻に住虫
 の棲にも。我からゆかんの道なれば。十界六道皆漏さず。只其群類の奴に
 ならんとぞ思ふ。乞願は此願を。陰らず照給は。上は法身の月の前。下
 復和光の塵の底。我等に深き結縁の。感應擁護を仰國津神。蘆原や磯
 馭盧島に御屋敷建て。御座かりける憑敷ぞ覺る。
 淨土宗

歸命頂禮彌陀願海。即得不退涅槃會。廣して猶邊もなく。深して復際も
ハ「ウラモヒ」
モヒ」ノ略

禁從父のノ類從本錯簡下
 波本ノ綴考
 誤アルニ考
 本今之レヲ
 訂文ノ如ク
 濟類從本漏
 本ニ據ル

なし。頓教菩提の藏なれば。開てもみだりに疑はされ。觀經證定の古。貞
 元入藏の掌を。さすがに争仰がざらん。況や諸佛の證誠は。三千に普詔。
 必至無上の正覺は。超世の願にはやこたへ。斯願不満足の誓は。偏思
 なく憑有。拔諸生死勤苦なれば。誰かは漏る類あらん。六八弘誓の門を建。
 門々毎に悉。稱我名號の心有。亦達多が勸し禁父の縁。禁母を犯し折指の
 咎。先其姿を説しも。下輩の弑母を顯す。然ばさてもいかゞはせん。我身を知
 ば濁江の藻に埋る。玉柏。浮出べき便だに。渚に遠き水底の。そこ共しら
 でやみなまし。廣劫多生の流轉は。因位の悲願に濟れ。佛の十劫成道は。
 我等が爲に成せらる。彼是共に結ほれ。豈さは行ざるべけんや。忝も拙き
 袖に。手折て挿頭英に。芬陀利の名を得のみならず。汝好持是悟の附屬は。
 偏に御名に限れり。さればにや暫しるべせし。一一の門の益もなを。閉目は
 てぬる八重葎。しげれる宿にもさはらぬは。望佛本願の秋の月。定散均
「ヤ」
ヒト
茂
障
指
南
爲
猶
は
果
ツ
キ
シ
ヤ
ウ
サ
シ
ト
シ
ク

廻して。開て長銷(錯)ざるは。名號不思議の樞なり。宜哉や第十八ツフハチに。正願王シヤウクハ(フ)ンワウの名を與ヒツキ。いかなる宿縁ナカクサヒ催て。今此法に逢ぬらん。只二三四五ダイの如來シヤウクハ(フ)ンワウの御本ミモトに植けん種のみかは。若門此經信樂受持ニヤクモンシキヤウシンラクジュチ。堅が中に堅しとす。其有得ゴウトク聞彼佛名號モンヒフツミナウガ(カ)ウ。歡喜踊躍の人は皆。上無功德を具足す。只等閑タナナ(ホ)ザリの翫オモイ(ヒ)ミダに。思亂スサミる。世なりとも。一筋ヒトに憑を懸るならば。御手なる絲イトのくり返しオヘ。專モツハラにして復專マタモツハラなれ。三念サンネン五念ゴネン捨られず。乃至一念至心廻向證ネンニシツシンクワウジウ。無生五乘ムシヤウゴモツヨウも均く入なれば。誰かは更に疑はん。たのもしくぞや覺る。
ヲ(ホ)ヒ

追撰新作三首

祝

花は萬歳ハナバンザイの春ハルの匂ニホヒ。月は千秋ツキセンシウの秋アキの光ヒカリ。陰らぬ鏡カガミの宮柱ミヤナカ。太敷建フトシキタテては皇スメラミコの代々ヨリヨリに榮サカエて徳高く。上ウヘとして愍アハレミヒロ廣ければ。海百川ウミハクセンをいとはず。下筑波根シモツツバネの動ユギなく。此面彼面コノモカノモに。敷フカしも分ワカず道ミチしあれば。巷チヤウに徳トクをや歌ウタらん。されば古イニシ

瞻不明阿波
本ノ旁訓ニ
據リテ此字
ヲ充ツ

を訪へば。三皇サンクワンに恥ハヂざる政マツリゴト。遠トホく異朝イテウを顧カヘリミれば。五帝イムカシの昔ムカシを奈ナともせず。文フミには螢雪ケイセツの翫オモイ。直モテアンビフ(ホ)キを賞シヤウする事態コトウツ。皆家々ミナイヘクの風カゼに傳ツタれり。藻鹽草モシヨクサかくてふ文字モジの關セキの外ホカ。西戎セイジウは浪路ナミヂのするの。泡ウベと消キエては跡無泡アトナキウツカ。武マタは又梓弓眞マツアツユミ弓ユミ。槻弓キノユミ取々トリトリに。其勢イキナホヒにやなびくらん。轡クツバミを並ナラべ轅ナガエを廻メグルしては。此又右車左馬コノマダウシヤサマの謀イソ。重オモシは恩オンによればなり。輕カヨクは命イノチをや忘ワスるらん。霞カスミを隔ヘリる陸奥ミナソノの。壺ツボの石イシぶみに書カキし跡アトも。朽クサせぬしるしに殘也ノコルナリ。是皆神風コレミナカミカゼや御裳ミモスガハ濯河タヌヘの絶ツツぬは。御注連ミシヅメの玉鬘タマカヅラ。掛カケも賢サトく跡アトを垂タレて。同梢ドウシャウの男山オノヤマ。流ナガレは替カハらぬ石清水イハシミヅ。其源ミナモトの濁に無こりなく。代ヨを平ヒラにや瞻サシすらん。差サシてもいはじ三笠山ミカサヤマ。照日テルヒの影カゲは限カギあらし。

薰物

色いろにはめ愛でじ咲さく花ハナに。思オモひ付身ツクミのいかなれば。身ミに疲イタツキの入イルも知シラれず白眞シラマ弓ユミ。春ハルは心ココロの空ソラにのみ。あくがれ出イデても何ナニかせむ。移後ウツロフノチの記念カタミとは。匂ニホヒを袖ソデ

青ノ下錯簡
アリ訂正セ
ルコト前陳
ノ如シ
荷阿波本ニ
據リテ補フ

にや留まし。されば匂に心の移來て。(後朝)衣々の名残の袂にも。なを染深き(猶ほ)薰
 衣香。幾里懸てか香ほるらん。遙に匂ふ百步香。思亂ても信夫摺の。見過し
 難き故郷に。それかとしるき舊簾の方。心に懸るは軒端なる。梅花の方の
 空燒。夏は汀の蓬葉の。冷しき風にやかほるらん。秋の籬の白菊の。移ふ匂
 ぞ懐き。烏羽玉の夜半の黒方は。誰手枕に香をとめむ。幽美く覺る匂は。五
 葉の枝に麗かに。結付けん薰の。匂を送し節かとよ。婦やとがめむ花の香
 を。えならぬ袖にと有しは。兵部卿の宮の御返。匂もかほるも思も分て契
 より。心うかれて浮船の。憂名を留し小島が崎。他にや浪のこえつらん。懸
 る迷を思にも。勝さは誠の法の道の。妙なる匂を爭しらん。佛土に微妙の
 薰香有。青白朱色の蓮花香。荷葉團々と水清く。功德池の浪にやかほるら
 ん。林は菩提を飭つ。涅槃の山に風薰す。樂榮る砌なり。

雨

西北にノ
阿波本ニ據
リテ補フ

雲とノと阿
波本にニ作
ル
宵のノ下錯
簡アリ訂正
セルコト前
陳ノ如シ
行ハ給ルノ
シニ井ザル
歩行ノ然

秦皇泰山の天の下。星霜ふりにし古。榮爵にあづかる松が枝の。緑も深き
 色を増す。凡雨は天子のや思として。國に普き徳を成。西北に起る雲の
 膚。東南に來雨の足。時を違ざるは是やこの。十日に閑き惠ならん。春の荒
 小田打返し。思へば榮る民の草葉も押並て。苗代水の引々に。取や早苗
 の態までも。畔こす小浪に袖ひちて。春雨急雨白妙の。卯の花くだし五月
 雨。影ろふ雲にやさはぐらん。おもひもあへぬ夕立。すゞしき風を先立て。
 露置副る秋の雨は。時雨に成か尾上吹。嵐の末の浮雲。小雨に懸る露けさ。
 ひち笠雨のやすらひ。葱に傳ふ玉水の。落るや軒端の山下に。脆も木の葉
 の雨とふれば。いつしかさゆる氣色にて。風まぜに碎てたまらぬ玉霰の。
 雲とかはる冬の雨。さびしき詠の徒然に。其品様々なりけるは。雨夜の翫の
 物語。勝忘れぬ節々も。さこそはおもひ合せけめ。雨の名残の宵の間に。
 温明殿の渡を。たゞずみ歩行て。東屋歌し折かとよ。うたてもかゝる雨そ

字ナ「ア」リ
更ニ「ト」ル
加ヘ「タ」ル
ウナリ「ヤ」
浅水「ア」サ
旁訓「ア」サ
ミ「ト」ア
レ「ハ」ア
ニ「ハ」ア
サ「ハ」ア
論「ハ」ア

そぎ。眞屋の餘も馴しとや。數ならでさすが世にふる習は。身を知雨の槓
の屋に。やすくも過るか浅水の。橋うち渡す雨もよに。此とゞるとゞると
降し雨。

究百集

隱徳

夫譽を顯して名を揚は。あの終に隱徳のなす所。隱徳の云ざるをみるは。又
た明王の曇らぬ鏡也。凡隱に類おほけれど。隱て希に知とかや。傳聞孔
子の教今に絶ずや。壁に納し經書も。隱て徳を施し。舜は隱て死をのがれ。
或は畔に耕わざ。或は賤漁に。超過のとくをもや隠けん。四皓七賢も。
商山の雲に跡を隠し。竹林の隱士として。各名を埋き。伯夷叔齊は。この首
陽山に隠つ。朽せぬ名を残せり。老子の信たる徳にも。正に隱君子の號
あり。君に仕る忠臣も。密事の偽らざれば。是恩澤の誠にはほこるとか。諸
曲の究まる所皆。竊に傳て顯さるるを。隱て床敷道とす。雲隱行月影を。
扇ならでもと。口翫つ。招けん。撥を納し所かとよ。覆手に隠る隱月。々々

擢不明阿波
本旁訓ニ據
充テ此字ヲ
蒲菖類從本
阿波本共ニ
此ク作ル

安ハ假借

の其名もよしあれや。如何なる秘曲を隠らん。霞に隠て歸る山の。嶺飛越
る春の雁。島隱行海士小船の。ほのくみゆる朝霧の。絶間を隠す興津波。
寄來る浪に隠るゝは。渚の松が根。磯間傳ふ。岩根の道の岩稜。汀に擢る空
貝。乙女が漁に拾玉。水底に隠玉柏。水隱の沼の蒲菖の長根。みえ分ぬ姿
の池の玉藻隱や。藻樛束鮒童子が。小網さす跡にぞ隱なる。深き夏野を分
行ば。茂みに隠る姫百合。小鹿入野の茂み隱。狩庭の雉の草隱。鶉の床も深
草の。下はふ葛の葉隱に。結びもあへぬ夕露。葦の葉に隠て住し攝津國の。
小屋とも更に聞ねども。したひくる妻が邊の名も昵き。綴喜のさとをや尋
まし。籬に隠る面影。人知ず外にはつゝむ中河の。逢瀬に沈埋木も。終にや
隱はてなん。せめても隠て傳るは。鳥羽に書玉章。抑鷺峰の雲に隱しは。
雙林樹下の夕の月。鷄足の蘿の洞こそ。迦葉の隠し砌なれ。佛の在世にも
顯ず。滅後八百歳か。とよ。南天の鐵塔を。始て開し教法。故安なる物をな。

誰ハハカ

なバノバ阿
波本ニ據リ
テ補フ

東土の久米の道場に。隠して納し古。忝なくぞ覺ゆる。瑜伽密教の理。他
にもゆるす事ぞ無。誰かと輒く傳へん。此祕が中の祕なれば。深が中に深
しとす。

和歌

傳に聞。日本尊の歌は是。天地開始り。人事定らざりしより。心内に動て。
理世の道も備り。詞外に顯れて。撫民の信を先とす。されば日域朝廷の本
主は專我國の。習俗を捨ずして。時雨降をける櫛のはの。侍臣に仰し萬葉。
勅集の源也けり。其後世は十嗣をへ。年は百年あまりか。とよ。延喜の聖の
御代には。古今集を選て。此卷を廿に調へ。品をバ六種に分てり。梨壺の五
人を。昭陽舎に置て。後撰集を集しむ。拾遺は花山の製作。長保寛弘の
比とかや。後拾遺の奏覽は。應徳三の長月。金の葉を重ぬるも。同き御宇
とこそ聞。彼よりおほくの春をへて。詞の花を手折は。崇徳の賢翫。千載

集めノめ阿波本ニ據リテ補フ

は文治の夏の天。彼宇治山の跡を訪て。松の樞を出たるや。傍に越し譽な
 らむ。さても新古今を集。其名を興すのみならず。歌を二千々にかさねつ
 つ。君もさながら難波津の。よしあしを分るゆへに。手づから集め。自撰る
 跡を留め。臣も又あさか山。淺深に迷ねば。心の林詞の露。漏たる玉やなか
 りけん。花の匂鳥の聲。此月の光雪の色。景趣こゝろすくして。眺望眼
 に浮ぶより。盡せぬ戀を駿河なる。富士の煙に身をこがし。鏡の影の朝毎
 に雪と浪とは厭しく。長柄の橋の橋柱。朽ぬる昔を忍びつ。鶴龜に餘副
 ても。あの萬代を祈まで。勝磯城島の道無ば。知もしらぬもうつもれぬ。其
 名をば何にか残べき。渾百福の宗は悉。六義の内に演盡し。萬物の徳は何
 れも。八雲の奥に納れり。大空の月も住吉の。圍墻の松の葉散事なく。代々
 に絶せぬ此歌も。菓のかづらながらん。

長恨歌

改ハ假借字典ニ集韻ヲ引イテ答リトアリ

春類從本雲ニ作ル阿波本ニ據ル

夫泰階平に。四海ことなく。玄宗位に御座て。天の下治事。改の年を重
 ても。霓裳羽衣の袂に。花笈善目並色やなかりけん。楊家の深き窓に養れ。
 一朝に撰て。君王の傍に相見つ。この百の媚ありしかば。六宮の粉黛も。
 顔色無とや愁けん。さればや風になびく。雲の鬢なつかしく。雨を帯たる。
 花の容貌匂を副。芙蓉の帳あたゝかに。春のよいとみじかく。日闌てをき
 給ては。朝政や怠し。承觀に寢に待て。閑成暇なく。春は春の遊に隨ひ。
 夜は夜を專に。仙樂風に飜り。所々に聞つ。緩々歌ひ。猥がは敷かなで
 や。絲竹の調をこらしけん。觀覽終日に飽しも。理とぞ覺る。しかはあれ
 ども。翠花瑤々として。行て又留る。都門を出て百餘里。その六軍なともせ
 ざりき。花の挿頭地にゐして。治る人やなかりけん。風蕭索たり。雲の梯廻
 り迴て。劍閣のみねにのぼるとか。娥眉の山の邊にも。行人ぞ稀なりし。
 朝なくよなくの心。行宮に月を見ば。心を痛しむる色。夜の雨に猿を

緑のノの阿波本ニ據リテ補フ
頼阿波本邊ニ作ル

聞て。腸を斷聲も。勝然さこそは哀なりけめ。春の風に。桃李の花の開る日。
秋の露に。梧桐の葉の落る時。西宮南内に。秋の草や茂るらむ。落葉階に
満て。紅拂ずとかやな。鴛鴦の瓦すさまじく。霜花重や。ふるき枕ふる
き衾。誰と共にかなづさはむ。抑方士が尋得し。太眞院の玉の樞。左右の
侍者。をのくく緑の袖を連ね。出向しありさま。執あへざりし挿頭のね
くたれ髪のそのままに。思ひ亂れし粧ひ。彼驪山宮の私ど。語傳し態まで
も。あの天長地久。終に絶せぬ契りは。頼敷ぞや覺る。

納涼

青苔の地の上。緑樹の陰の前。晚涼興を催す砌。古集の詩を吟ず也。鳴扇
の風をも。岸風に代てや忘るらん。冷泉砂なめらかに。氷になつむ玉かと
見えて。底きよき水のしがらみ。懸ても袖にすゞしきは。只一重なる夏衣。
日も夕陰に傾ど。歸様もさらにいそがれず。暫し立寄氣色の森の。木陰も

口ハ術カ

地ハ池カ

冷きに。いざ然は誰も挿頭取とらん。夕立のあと吹をくる風越の。嶺の浮雲
晴行ば。篋代表衣うち拂ふ。山路のつつゆの玉篠の。裳すそにかゝる涼しさ。
青嵐松に音信る。汀の浪のよるは涼しき。月待ほどの手翫に。岩間の水の
幾結び。むすびも敢ぬうたねの。み終ぬ夢の名残の。枕を過る風の音。抑
納涼の。勝地名所の中にも。殊に床敷覺るは。涼風薫ずる摩訶陀園の。
梅檀樹の下。娑羅林雙林那羅陀樹下とかや。玉順山の碧岸。悟眞寺の瑤地。
天台山に曝布の泉。玉泉龍門の瀧津瀨。頼川耳を濯し水上ぞ。聞さへ涼し
かりける。流絶せぬ瑞籬の。久敷すめる神泉苑。冷しき梢の滋野井。山の
井玉の井玉河。川浪寄るなきさの院。平等院に釣殿。影ろふ汀は朝日山の。
麓にみゆる款冬の。瀬々の岩根に浪越る。此橘の小じまが崎に。船指留し
河岸。

風

旁訓「ミナ
ギルハ「ミ
ナギラス
トイフベ
キ
所ナリ

處阿波本所
ニ作ル

風大虚にゆるくして。春の水。氷を漲流あり。風野徑に音信て。秋の露。
 草葉を潤す粧ひ。寒暑折をたかへず。其徳時にかなへるや。聖代明王の御
 代成らん。先は風輪最下の安立より。器世間是に成ぜらる。五大をいへば
 風大。黑色其色をかたどり。代に皆其風儀あり。いはゆる巢穴冬夏の住居
 として。繩を結びや木をきさみし政。伏羲氏王爲。書契をつくりし風體。黃
 帝代を治しも。風后輔佐の臣たりき。凡あらゆる事態。何か風の徳を備ざ
 らん。されば詩歌の妙なる詞にも。風月の名を先とす。遙に漢家を訪ば。昭
 明太子の選し。文選の中にも。あの宗玉が風の賦。近く吾朝をかへりみれば。
 風土記は廣く記する處。風俗は神の御代より。今にたへざる郢曲。家々
 の風に傳はる。源氏の卷にも。松風野分ぞわりなく聞る。六義の風情に風
 あり。古今の作者は春風興風。小野の道風は。此畫圖の屏風に筆を染む。琵琶
 の調に風香調。樂には夏風秋風樂や。五音皆風にあり。絲竹の調に顯る。

風北林になる。花をおひて。鳳の舞かと疑れ。竹に向ては。龍吟に似たる
 響あり。青嵐窓を過る聲。曉の夢も通ずとか。竹風葉を鳴すや。夜を殘すね
 覺の友ならむ。嶺嵐琴を弾ずなる。何の緒よりか調らん。風渡る諏訪の御
 海に春立ば。浪の白木綿神懸て。風の祝にすき間あらずなと祈ばや。木曾
 路の櫻ささぬらん。東吹風に浪寄は。霞を流す櫻川。乾風の風に迷は。時雨
 を誘ふ浮雲。紅葉の筏を下は。嵐の山の麓の。河瀬に秋や暮ぬらん。寒嵐冷
 く。霜深き夜の。月にさげぶ哀猿。風を便に渡成は。梢を傳ふむさび。俱
 羅を増も風なり。風を向る海月。いかなる故成るらん。檜の葉柏うちそよ
 ぎ。木枯はげしき飛鳥川。風寒ければ。汀の浪や氷るらん。風のしなくに。
 所によりて興あるは。山風谷風山下風。山下木の下葉分の風。松吹風のつ
 れなきは。憑めて問はぬ夕暮。葛の裏かぜ恨わび。身にしむ秋の初風。かぜ
 の便風の傳。かぜの宿りを誰かしらむ。浦風鹽風興津かぜ。眞穂の追風朝

嵐にや。湊吹越(お)いな(お)の渡り。抑君(キミ)の恩を仰ぎて。此風(コノカゼ)の徳に喩れば。風の前(マエ)の賊塵(ソウジン)は。拂(ハラフ)に敵する類なく。なびかぬ草木(クサキ)もあらじかし。

水

佛陀(ブツ)に結縁(ケツエン)を求る。花水(ハナミヅ)供(ケ)に始り。灑水(シヤスイ)加持(カチ)五瓶(ゴヒヤウ)の水。四海(シヤイ)の流を汲ても。深(フカ)き故安(コアン)なる物をな。毘盧舍那(ヒルシヤナ)覺位(ケツイ)を證(シ)せしめ。即位(キツイ)の臺(ダイ)も忝(カゲ)なく。彼等(カレラ)の水(ミヅ)をや灑(シ)らん。父母(フボウ)の恩徳(オントク)をむくふも。水菽(スイシヤク)の孝(コウ)を道(ミチ)とす。水曜(スイヤウ)天(テン)に連(ツラナ)りて。地(チ)をおほふ光曇(ヒカリクモリ)なく。水神(スイジン)地(チ)にたたへて。あ(あ)の天(テン)の乘(ノリ)る惠(メグミ)あり。天地(チノチ)勢(セ)を和(ワ)。陰陽(インヤウ)時に調(トウ)ほり。水(ミヅ)にあまたの徳(トク)を聞(キク)。姑洗(コセン)初三(ソウサン)の春(ハル)の日に。水巴(スイハ)の字(ジ)をなすなる。曲水(コクスイ)の宴(エン)を訪(マシ)へば。源周(ゲンシュウ)年に起(オコ)しより。幾(イク)若干(ソバク)の霜(シモ)を重ね。顯宗(ケンソウ)の朝(アサ)には移(ウツリ)しけん。堙入(イニル)の水(ミヅ)の涼(スズシ)きは。木隱(キオン)深(フカ)き中河(ナカガハ)の宿(ヤド)りも終(オハ)ぬ夢(ユメ)の名殘(ナノゴロ)。取(トリ)あへぬまで驚(オドロク)す。鳥(トリ)の聲(コエ)く鳴(ナ)きわかれ。月(ツキ)は晨明(アキラ)の光納(ヒカリナ)まりて。薄(ウス)ぎり残(ノコ)る。山本(ヤマモト)くらき木枯(キカラシ)に。紅葉(モミヂ)の色(イロ)も深(フカ)けれど。渡(ワタリ)れ

安ハ假借
殺不明阿波
本ニ據ル波
水歡ノ語禮
記檀号ヨリ
出ヅ

河のノの阿
波本ニ據リ
テ補フ
ト不明阿波
本ニ據ル
この阿波本
あのニ作ル

ば濁(ニ)る河(カハ)の瀬(セ)の。あさくは契(チ)らぬ中(ナカ)なれや。音信(オンシン)ながらさびしき。筧(カケヒ)の水(ミヅ)に袖(スベテ)ぬれて。さそふ水(ミヅ)あらばと讀(ヨメ)るは。縣召(ケンマウ)の後朝(ゴウテウ)。三代(サンダイ)まで汲(ヒキ)し三井(サンキ)の水(ミヅ)。彌勒(ミロク)常座(ジョウザ)の砌(キ)より。龍花(リウガ)を待(マテ)てや流(ナガ)るらん。尺尊(シヤクソン)難行(ナンキヤウ)のいにしへ。探(サヒ)菓汲(クワキ)水(ミヅ)の勤(チノメ)にこたへつ。一乘(イチジョウ)無二(ムニ)の法(ホウ)を受(ウケ)。累劫(ルイキヤク)成道(ジョウダウ)の今(イマ)も又(マタ)。漸濕(シヤンシツ)土泥(ドネ)を見れば。決定(ケツテイ)知近(チキン)水(スイ)の喩(ユ)に。因位(インイ)の丹誠(タンジョウ)を演(エン)らる。抑垂(オチシ)仁(ニ)の治天(チテン)に。天照皇(アマテラスヒメノミコ)太神(タカミヤミ)。五十鈴(イソジ)の原(ハラ)の水邊(ミヅノヘ)に。光(ヒカリ)を和(ワ)げ給(たま)て。衣(イ)を洗(アラ)ふ山水(サンスイ)。御裳(ミモズ)濯(ソク)河(カハ)の名(ナ)を流(ナガ)す。白浪(ハクナミ)眇々(ミョウミョウ)たる水(ミヅ)の底(ソコ)。百尺(ヒャクシヤク)を卜(ウラ)の瀧祭(タキマツリ)。遠岸(エンガン)蒼々(ソウソウ)たる水(ミヅ)のうへ。一里(イチリ)を去(サ)ざる常(ジョウ)の宮(ミヤ)。この所々(ココココ)に跡(アト)を垂(シ)。誓(チカヒ)を様々(サマサマ)に顯(アハ)す。然(シカレ)ば一天(イツテン)利生(リシヤウ)を仰(オホ)つ。十善(ジュゼン)首(ウタ)をたれ給(たま)ふ。鈴鹿河(スズカガハ)八十(ヤチ)瀨(セ)の水(ミヅ)は遠(トウ)けれど。伊勢(イセ)まではるかに思(オモ)ひやり。五畿(ゴキ)七道(シチダウ)の人民(ニヒト)も。宮川(ミヤガハ)の水(ミヅ)の木綿(キワタ)鬢(ハシ)。心(ココロ)に懸步(ケンブ)を(猶ほ)なほ重(オモ)なれる足引(アシヒキ)の。山田(ヤマダ)の原(ハラ)のすぎやらで。手向(テムケ)になびく神態(カンライ)。太祝(フトコト)言(ト)のれの句(ク)の中に。百王(ヒャクワウ)恙(ツツ)御座(ミマシマ)さず。萬人(マンジン)やすき憑(タシ)あり。

十驛

悠々として遙なり。淺深千萬軸おほく。此杳々として幽なり。内外に百種の道廣し。三聖を遣す仁徳。皆牟尼の善巧より起。十驛を連る住心。これ毘盧の金言成べし。中にもをろかにはかなきは。異生のつたなき狂醉。十悪日々に心よく。三業夜々に犯しつゝ。燃に焦る夏虫の。身を徒になすのみか。棘に草取箸鷹。木綱をはなれて走犬にや。禽獸涙をながすらん。澤を籠つゝ引網の。勞敷態にさす小網。魚鼈の族をつくしても。猶あきたらぬ心ざし。強竊二の咎たゞ。衣食に耽て樂み。名利に誇て戯る。歌舞遊覽の興をまし。翠黛紅顔なつかし。林に猪鹿の類をかけや。池に酒の浪を湛。いつかは醉を醒さん。抑石田月日へて。秋畝の恵に會なれば。法界毗富羅の内薫外に顯て。由良の湊に拾貝の。たま〜得たる人身。五常を堅守てぞ。檢束の譽普く。仁義の道を仰べき。金銀銅鐵粟散王。四州の民に致まで。誰かは

毘阿波本ニ據リテ補フ

切阿波本ニ據ル

確ハ旁訓ニ據ル

淮南王ノ事カ

費張ハ費長房ノ事カ

驚阿波本龍ニ據ル

記ハ起カ

無縁にノに阿波本ニ據リテ補フ

拂阿波本掃ニ作ル

廢阿波本ニ據ル

是を捨べき。戒珠の光妙なるは。四王切利の花の下。あの四禪無色の雲の上。確王の藥高く上り。費張の竹遠く飛。二篇二見の雲闇く。眞如の月を隠つゝ。涅槃の山に入。されば六行の水泥やすく。五熱の燃消難し。鉛刀の鈍をなげすて。泥蛇の愚なるを嫌つゝ。四諦の利劍賊を切。三藏の鷹鷲雨を灑ぐ。三十七品菩薩の種。漸甲さけ萌つゝ。四向四果の英や。そも二百五十に開らん。猶も哀のまさるは。霞の内の山櫻。嵐のまゝに散はてゝ。青葉に残る夏木立。緑もふかさ色々を。時雨や染て過ぬらん。村々移紅葉ばの。終に留らぬ神無月。無常を四種に觀じつゝ。十二の縁記覺安く。部行も是を先とし。隣喻もいかでか捨べき。されども化城に逆上る。羊鹿の車軸をれ。いつかは寶所に致べき。去來さは心をはげまして。此利他を無縁に調へ。芥石を久劫に磷つゝ。二空の月をかゞやかし。三性に塵を拂はん。五等の位隔なく。一眞の臺を整つゝ。廢詮の客にかしづかれ。蘊落の賊にも恐

じ。誠に唯識の軍の。等持の城を守つゝ。勝義の城無爲なれば。太平の徳を
 うたふなれど。内證の光闇くして。五障の雲をや隔らん。隔雲にまがふは。
 空即是色の花の色。匂を八不に任つゝ。牙き影の隈なくば。色即是空の秋
 の月。姿を二諦に明む。齊の建武の時かとよ。遼東を出朗公。興王に虎を服
 しつゝ。江南に劔を振しかば。成實の楯を靡てや。敵する類も無りけん。風
 にしたがふ浪も皆。水の外なる色ぞ無。中道の玉を浮べても。眞俗道別つ
 境理になをも闇くして。絶中の月を得ざりしかば。無明の闇にや迷ふ
 らん。迷闇路を導引は。界外に飭し駕。開三顯一の理。誰かは信ぜざるべ
 き。放光の瑞を見とつゝ。久成の形を示。皆本遮不思議の業因。あの二佛同
 座の寶塔。光を耆崛の星に磨き。三昧不染の花潔く。白鷺池の浪に浮ぶな
 り。草木法雨にうるをひて。菓を未來に結ばしむ。龍女が無垢の成道。我獻
 寶珠の供養をば。世尊納受を垂給ふ。信に南岳山明て。陳隨の風冷敷。明淨

外二阿波本
ハフノホル
ト訓ス怖ラ
クハ誤ナラ

見と本ノマ
イ或ハ見セ
カ

の徳を開しは。一心三觀の窓の前。藍より出て青と也。天真朗なりとやと
 む。無二亦無三の本懷。恆沙の己有を知られば。一道に争かやどらん。いつ
 かと待し朝日影。高山のみねにくもりなく。功德の林花綻び。匂を四方に
 や分らん。成道二七の法輪。七の所を飭つゝ。八會に儲し教法。修羅の四兵
 のどくして。海印に浮びし三世の徳。祇園鷺子も現前し。未來を遙に顯
 して。信に果海を兼なれば。一念に唱る正覺。他ならずぞや覺る。されば
 則天の春の月。朧々たりし明方に。十門の霞を拂て。金師子形を磨つゝ。
 賢首の智光を耀して。十支の臺明かに。六相の門深けれど。微細の霧晴ざ
 れば。闇道よりいとひ來て。金張を開謀ど。忝なくぞ覺る。あの郭に牛
 を放し客。この廟に鶏を待賓。龍宮の玉を得てしかば。濁らぬ蓮あざやかに。
 曼陀の花芳敷。兩部塵數の妙徳。心のまゝに施して。教綱四方に覆つゝ。
 苦海の鱗品々に。何をかすくはざるべき。

かとむハラむ

張ハ帳カ